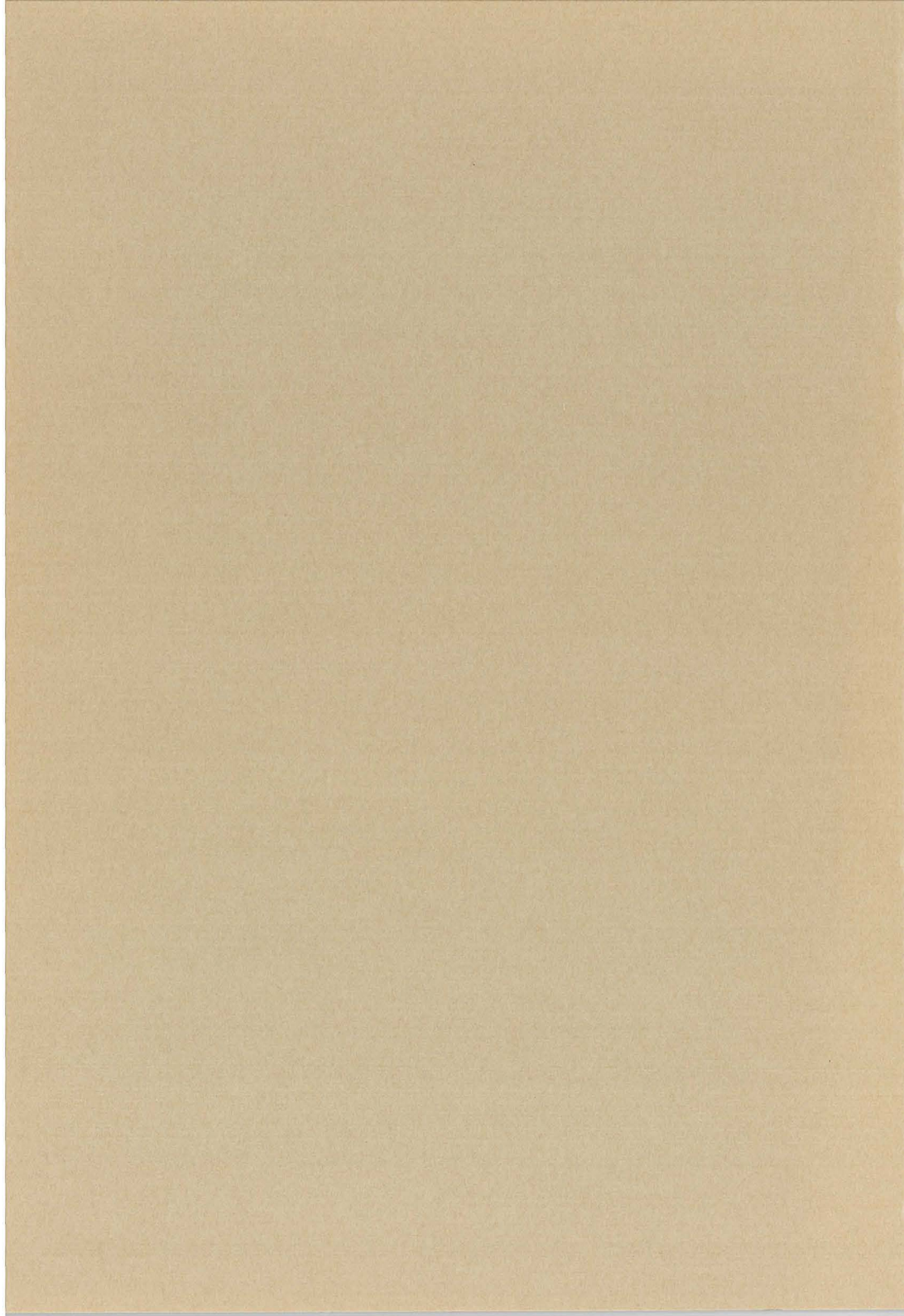


ISSN 1344-476X

財団法人 東洋文庫年報
平成 17 年度

財団法人 東洋文庫



目次

I	平成17年度の東洋文庫	1
II	図書事業	3
	1. 資料の収集	3
	2. 資料の整理	5
	3. 資料の利用と複写サービス	5
	4. 書庫資料の見学と研修	9
	5. 資料の保存整理と複製	9
	6. 業務の機械化	10
	7. 書庫内資料と書架スペース	12
III	研究事業	14
	1. 調査研究	14
	A 超域アジア研究	14
	B アジア諸地域研究	17
	C 平成17年度 研究部5部門11研究版 研究組織	25
	D 東洋文庫研究員等・研究課題一覧	31
	E 日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究	38
	F その他の民間学術助成金による調査研究	41
	2. 学術図書出版	45
	3. 講演会	46
	4. 学術情報提供	49
	A 研究者の交流および便宜供与のサービス	49
	B 各種研究会等への会場提供サービス	52
	C 研究資料の復刻・増刷の刊行サービス	53
	D 参考情報提供のサービス	53
	E 広報普及	53
	5. 研究員等の研究業績	54

IV	業務報告	86
1.	総務報告	86
2.	人事報告	88
3.	会計報告	93
V	役職員名簿	94
1.	役員	94
2.	評議員	94
3.	東洋学連絡委員会委員	95
4.	名誉研究員	96
5.	職員	97
6.	客員研究員	100

I 平成17年度の東洋文庫

平成17年度において東洋文庫が実施した諸事業の経過、及び内容の要旨は次の通りである。

まず本年度内に生じた役員・職員の異動について述べる。6月の理事会・評議員会にて、理事任期満了となった、岩崎寛弥、草原克豪、佐藤次高、田仲一成、鶴見尚弘、西田龍雄、原實、若井恒雄の各氏が再任され、新たに槇原稔氏が評議員を退任され理事に新任された。評議員では任期満了となった、安西祐一郎、池端雪浦、梅村担、尾池和夫、大崎仁、岸本美緒、後藤明、佐竹昭広、白井克彦、濱下武志、間野英二の各氏が再任され、槇原稔、松村潤の両各氏が退任された。加えて、早稲田大学教授の平野健一郎氏が評議員に新任された。また、役職指定の評議員では東京大学の佐々木毅総長から小宮山宏総長へ交代が諮られた承された。監事は東條和彦氏が再任、種田公二氏は退任しワコール監査役の岡野理一郎氏が新任された。また、12月の理事会では、高木丈太郎氏が評議員を退任され三菱地所会長の福澤武氏が評議員に新任された。一方、東洋学連絡委員会では、昭和52年以来30年にわたり委員を勤められた日比野丈夫氏が高齢のため退任された。

次に職員であるが、文庫長の井坂清信氏が国立国会図書館に転出し、渡邊幸秀氏が新文庫長に就任した。尚、6月24日には昭和28年以来50余年の長きにわたり当文庫の研究員であった山根幸夫氏が84歳を以ってご逝去された。

平成17年度の当文庫の活動の特記事項としては、まず4月1日より新基準による特定公益増進法人（寄付金非課税法人）の新認定を得、本ステータスを継続することが出来た（2年間有効）。懸案である当文庫の書庫の不足、建物の老朽化問題については、建替え・移築の両案を平行して具体的検討を開始した。もちろん、建替え・移築には相当額の資金が必要で、とても当文庫の自己資金で賄えるものではないことは自明であり、資金面でのサポートの可能性を三菱金曜会に打診している。大変有り難いことに、三菱金曜会でも内部委員会として「東洋文庫建設準備委員会」の立ち上げを決定し、建替え・移築の資金面での支援の検討を開始して頂いている。同建設準備委員会には当文庫専務理事も委員として参加している。

12月の理事会では懸案の寄付行為の全面改定、及び会計処理規程の新制定を行った（寄付行為は1月16日、会計処理規程は18年度より施行）。今回の寄付行為の全面改訂により、理事会の決議機能と評議員会の諮問機能が明確化され、併せて、

評議員会議長は評議員の互選によることとなった。一方、国立国会図書館よりは、昭和23年以来継続している当文庫と同図書館との支部契約を解約する方向で協議したいとの申し出があり、残念な申し出ではあるが事情を理解出来る面もあり、今後具体的解消案・手順を協議のこととした。本支部契約が解消されることとなれば、解消後の図書の閲覧・目録整理などは当文庫として独自に行う必要があり、これは当然コストの増加につながる事となる。

図書部関係では、6月に会計検査院検査官による国立国会図書館支部東洋文庫の現地視察がなされた。また、7月には書庫本格建替え迄の当面の応急策として、書架の仮設を決定した。9月以降は、台湾中央研究院語言研究所との間で学術・文献交流協定の締結交渉を本格化させた。一方、当文庫のデータベース化は着実に進展しており、データベースへの月間アクセス数は、年度初めには約1万件であったものが年度末には月間1万5千件のレベルにまで増加している。書誌ベースでの当文庫のデータベース化は既にほぼ95%にまで達している。本年度の当文庫の図書の増加は合計約1万2千冊であった。

研究部では、平成15年度より始まった新しい研究体制がいよいよ3年目を迎え、一つの節目としてこの3年間の研究成果を纏めることとし、出版物も充実させた。定期出版物9冊の発刊に加え、論叢類7冊（内4冊は英文等）を発刊した。東洋学講座では、春は「アジアの歴史と文化を語る」、秋は「近現代のアジアを考える」という統一テーマの下、計6回の講座を開講した。また、特別講演会を6回、研究会を2回開催した。外国研究員との交流も活発で、受入れ外国人研究者6名、外国人研究者への便宜供与は約60名に達した。一方、研究員については、4月より従前の「研究委嘱」（研究協力者）を「客員研究員」へシフトして発令したほか、外国人の名誉研究員を13名追加委嘱し、名誉研究員は合計16名となった。

文庫全体の問題としては、東洋文庫80周年記念事業推進委員会がその使命を完了し年度末に解散した。本事業で残るのは80年史の刊行のみとなり次年度に引き継ぐこととした。5月には当財団の認可部局である文部科学省学術機関課による現地検査があった。また、人事院が平成18年度以降給与構造改革（5ヵ年計画）実施を勧告したことに伴い、当文庫も原則的にこれに準拠対応する方針とした。当文庫の財政面では、過去の高金利時代に購入した債券等が順次満期を迎え、基本財産有価証券の利息収入が逡減する状況にあり、年間収支不足額を過去の内部留保並びに維持会寄付金の取崩で賄っている状況である。これらの内部留保金もあと1年程度で底をつく状況にあり、来年度中には中期的な抜本策が必要であり、来年度にその具体策を策定することとなる。

Ⅱ 図 書 事 業

1. 資 料 の 収 集

(1) 資料購入

本年度資料購入費の支出総額は30,816,718円で、各部門別の冊数内訳は以下のとおりである。

	和漢書 (冊)	洋書 (冊)	計 (冊)
超域・現代中国研究	771	28	799
超域・現代イスラーム研究	0	2,294	2,294
東アジア研究	411	13	424
内陸アジア研究	10	227	237
インド・東南アジア研究	0	849	849
西アジア研究	0	645	645
共通 (継続・大型資料)	951	296	1,247
計	2,143	4,352	6,495

主な購入図書としては以下のものがある。

上海道契	29冊
北京図書館蔵家譜叢刊 閩粵僑郷卷	50冊
日本関東憲兵隊報告集 第1・3輯	42冊
中国民族問題報告書コレクション	61冊
新編中国地方志	138冊
林孝勝氏収集東南亞華僑華人関係資料	167冊
エジプト、レバノン等発行アラビア語資料	643冊
ペルシア語資料	827冊
トルコ語資料	1146冊
パキスタン発行ウルドゥ語等資料	817冊
ベトナム発行雑誌マイクロフィルム	46リール
中国近代史資料マイクロフィルム 政治史地資料編・経済資料編	115リール

(2) 資料交換

出版物交換の実績は以下のとおりである。

区 分	受 贈			寄 贈		
	和漢書(冊)	洋書(冊)	計(冊)	国内(冊)	国外(冊)	計(冊)
単行本	1,028	2,772	3,800	1,479	744	2,223
定期刊行物	2,822	536	3,358	3,865	1,656	5,521
非図書資料	0	0	0	0	0	0
計	3,850	3,308	7,158	5,344	2,400	7,744

主な受贈資料としては、以下のものがある。

林亜傑氏寄贈 中国書法関係資料	6冊
Academie Tunisienne 寄贈資料	69冊
宝音達来氏寄贈 モンゴル語資料	42冊
額敦桑布内蒙古科学技術出版社社長寄贈 同社出版モンゴル語資料	7冊
故山本達郎先生旧蔵 東南アジア関係資料	2,852冊
中村菊之進氏寄贈 仏教関係中国書	123冊

資料室では上記以外に重複図書等の有効活用を図るため、内外の諸機関に交換用の図書リストを提供している。

2005年度は3機関に対して交換リストを送付した。

交換機関	送付リスト	送付図書数
International Exchange Section 中国国家図書館 中華人民共和国	近代中国関係日文図書 100タイトル	57タイトル
韓国精神文化研究院 東北亜古代史研究所 大韓民国	韓国古代史関係日文図書 96タイトル	96タイトル
中央研究院 近代史研究所 郭廷以圖書館 中華民國	近代中国関係日文図書 100タイトル	80タイトル

(3) 蔵書数

収蔵する蔵書総数は923,505冊で、和漢書521,323冊、洋書372,382冊、複写資料29,800冊である。

2. 資料の整理

(1) 図書

整理冊数は次のとおりである。

和漢図書	1,171冊
欧米語図書	913冊
アジア諸言語図書	1,538冊

整理した主な図書

- (1) 新編中華人民共和国地方志叢書 96冊
- (2) 中国簡牘集成 12冊

(2) 雑誌

本年度の受入タイトル・冊数は次のとおりである。なお、そのうち新規受入誌は和・中・韓文60タイトル、欧文16タイトルである。

	タイトル数		冊数	
	和・中・韓	欧	和・中・韓	欧
受贈	800	177	2,745	527
購入	122	90	532	185
小計	922	267	3,277	712
計	1,189		3,989	

(3) 新聞

本年度は17種（何れも中文）を受入れた。

3. 資料の利用と複写サービス

(1) 閲覧サービス

本年度、閲覧証の新たな交付は162名で、内訳は教職員60名（外国人25名）、研究機関関係者16名（外国人9名）、大学院生39名（外国人8名）、大学生36名（外国人8名）、その他11名（外国人1名）であった。

閲覧開館日は229日、利用者数は2,615名、利用資料数35,380冊で、詳細は下表のとおりであった。

なお、東洋文庫研究員および職員の研究室等での資料の利用は延べ1,119名、3,128冊であった。

開館日数および閲覧者数

	開館日数	閲覧者数	日平均	昨年同月比 (△印は減)
平成17年 4月	(日) 19	(人) 180	(人) 9	(人) △14
5	18	206	11	10
6	21	212	10	△54
7	19	225	12	△36
8	22	262	12	△51
9	19	241	13	11
10	19	182	10	△43
11	18	235	13	9
12	17	235	14	4
平成18年 1月	17	173	10	△4
2	19	221	12	19
3	21	243	12	23
計	229	2,615	11	△126

閲覧カウンター出納冊数

	和書		漢書		洋書		合計		日平均	昨年同月比 (△印は減)
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数		
平成17年 4月	99	437	323	2,041	140	393	562	2,871	151	280
5	185	699	320	2,021	139	375	644	3,095	172	954
6	147	455	297	1,525	230	723	674	2,703	129	△1,004
7	183	496	256	1,314	150	577	589	2,387	126	△1,419
8	160	411	499	2,785	184	832	843	4,028	183	△1,046
9	166	289	419	2,610	244	936	829	3,835	202	898
10	118	189	164	911	169	662	451	1,762	93	△734
11	112	147	307	2,036	336	987	755	3,170	176	678
12	130	638	264	1,474	207	714	601	2,826	166	△393
平成18年 1月	197	616	295	1,469	128	308	620	2,393	141	△236
2	166	736	266	1,222	220	665	652	2,623	138	△198
3	122	295	392	2,737	255	655	769	3,687	176	731
計	1,785	5,408	3,802	22,145	2,402	7,827	7,989	35,380	154	△1,489
比率	15.3%		62.6%		22.1%		100%			

(2) 複写サービス

国内外の研究者・研究機関の便宜に供するために行ったもので、実績は下記のとおりであった。

マイクロ・フィルム

申込件数	紙焼用撮影齣数	紙焼提供枚数	フィルム提供齣数
329	14,850	26,167	811

電子複写

申込件数	提供枚数
775	43,781

(3) レファレンス

受付数は目録室、閲覧室など合わせて826であった。

(4) 資料の貸出

博物館・美術館などが主催しておこなう展覧会への資料の貸出は6件で、詳細は次のとおりである。

展覧会への資料貸出一覧

	展覧会名	主催者	展覧会会期	開催場所	主な資料と数量
1	特別展示「描かれた動物・植物—江戸時代の博物誌—」	国立国会図書館	平成17.10.14 ～11.28	国立国会図書館 東京本館、関西館	『禽鏡』はじめ全 3点
2	企画展「田中吉正とその時代」	岡崎市美術博物館 市立長浜城歴史博物館 柳川古文書館	平成17.10.14 ～12.4	岡崎市美術博物 館	『駒井日記』全1 点
3	開館十周年記念特別展「よこはま浦島太郎」	横浜市歴史博物館 文化庁	平成17.10.22 ～11.27	横浜市歴史博物 館	『御伽草子』はじ め全5点
4	「ユートピアを探しに—想像力の彼方へ—」	新潟県立近代美術 館万代島美術館	平成17.10.29 ～12.11	新潟県立近代美 術館万代島美術 館	Chinese Drawings “A Series of Colour Prints” 全12点
5	特別展「親鸞と青砥藤綱—東京下町の歴史伝説を探る—」	葛飾区教育委員会 葛飾区郷土と天文 の博物館	平成17.11.3 ～12.11	葛飾区郷土と天 文の博物館	『累井筒紅葉打敷』 全1点
6	特集展示「徳川將軍家の学問—紅葉山文庫と昌平坂学問所—」	東京都江戸東京博 物館 財団法人徳川記念 財団	平成18.2.28 ～3.26	東京都江戸東京 博物館	『貞観政要』はじ め全4点

4. 書庫資料の見学と研修

申請は21件あり、228名に便宜を計った。その詳細は次のとおりである。
なお、このほかに当日申込の書庫見学が46件123名あった。

	実施日	申請者	参加者	人数	主な内容
	平成17年				
1	4月6日	山口 昭彦	聖心女子大学学生	3	書庫及び所蔵資料見学
2	4月7日	安部 さち子	国立国会図書館職員	10	〃
3	4月27日	斯波 義信	早稲田大学、慶応義塾大学学生	17	〃
4	5月9日	グッド長橋 広行	ビッツバーグ大学東アジア図書館職員	1	〃
5	5月11日	村田 雄二郎	東京大学学生	16	〃
6	5月12日	原 啓 芳	三菱信託銀行一行	2	〃
7	5月26日	三浦 徹	お茶の水女子大学学生	15	〃
8	5月27日	小松久男、小松香織	東京大学、筑波大学学生	18	〃
9	6月9日	菊地 董	元衆議院議員	2	〃
10	6月9日	森 島 聡	東京外国語大学学生	5	〃
11	7月7日	寺内 威太郎	明治大学学生	32	〃
12	7月8日	梅村 担	寧夏社会科学院一行	10	〃
13	7月25日	白井 佐知子	東京外国語大学学生	34	〃
14	8月5日	倉持 由美子	上海交通大学一行	9	〃
15	10月3日	小松 久 男	カザフスタン国立図書館館長	2	〃
16	11月2日	藤本 幸 夫	英国図書館職員	3	〃
17	11月9日	森 正 夫	徳島大学教員	2	〃
18	11月10日	日野 知 子	仏教図書館協会一行	29	〃
19	11月24日	太田 幸 男	北京師範大学教員ほか	4	〃
	平成18年				
20	1月27日	味 岡 徹	聖心女子大学学生	7	〃
21	3月28日	原 徳 三	三菱重工業OB一行	7	〃

5. 資料の保存整理と複製

原資料の保存整理と劣化資料のマイクロフィルム化など他の媒体への交換を行った。作業項目と内容は下記のとおりである。

(1) 漢籍地方志

継続している作業で、本年度は、分類記号Ⅱ-11-F-26～Ⅱ-11-G-22までを対象。

裏打ち 1,455葉、綴じ直し 111冊、帙作製 19ヶ。

(2) 貴重洋書 (Old books)

継続している作業で、本年度は、分類記号O-1-C-8~O-2-A-37を対象。

清掃、クリーニング、オイリング及びラッパー作製203冊。

(3) その他の書庫内資料

近代中国研究班収集資料、目録室資料を対象。

本製本(洋、和)91冊、再製本と簡易製本245冊、巻物2点、

帙およびラッパー作製23ヶ、補修4,347枚、整理保全26冊(単行本)207点(地図等)。

雑誌合冊製本(外注)831冊。

(4) 資料の撮影 31,773コマ

対象資料：漢籍稀覯書と修復作業の終了した岩崎和古書、満州語資料を対象に作業をおこなった。

(5) 活用フィルムの作成のためのポジフィルムの撮影 69リール

撮影した上記の資料のネガフィルムとすでに撮影されている現代中国関係資料のネガフィルムを対象にポジフィルムの作製を行った。

6. 業務の機械化

引き続きデータベースの入力作業を継続する一方、インターネット上でのオンライン検索ができるよう作業を進めた。平成17年度末現在、東洋文庫のWebページでオンライン検索が可能な目録データベースは下記の27種である。このうち※印のついているものが平成17年度新規公開分である。

- (1) 中国語逐次刊行物 (約4,600件収録)
- ※(2) 日本語逐次刊行物 (約2,000件収録)
未公開の所蔵データに「日文逐次刊行物(旧近代中国研究委員会収録)」を統合したもの。
- (3) 漢籍資料オンライン検索 (約27,000件収録)
- (4) 岩崎文庫(和貴重書) (約8,000件収録)
- ※(5) 続修四庫全書 (約6,200件収録)

上海古籍出版社刊行の叢書『續修四庫全書』に収録されている書目が検索できる。

※(6) 欧文図書 (約66,400件収録)

既存の「欧文図書の検索(近代中国研究委員会収集)」「辻直四郎文庫 欧文図書」「モリソン二世文庫・ペラルデ文庫」「東洋文庫所蔵洋書目録 KO-REAの部」「榎文庫 欧文図書」「洋書目録(Southeast Asiaの部)」「新収洋書目録オンライン検索」「洋書 America 目録」「洋書目録 West Asiaの部」を統合し、「モリソンパンフレット」等未公開の所蔵データを加えて、新規公開した。

- (7) 別置ロシア語図書 (約600件収録)
- (8) 中文図書の検索(近代中国研究委員会収集) (26,000件収録)
- (9) 日本文図書の検索(近代中国研究委員会収集) (約17,000件収録)
- (10) 日本文図書の分類表検索(近代中国研究委員会収集) (約17,000件収録)
- (11) 近代日本関係日本語文献目録 (約6,000件収録)
- (12) 韓国・朝鮮語図書の検索 (約4,300件収録)
- (13) 藤井文庫オンライン検索 (約1,450件収録)
- (14) モンゴル語資料検索 (約1,600件収録)
- (15) アラビア語図書の検索(東洋文庫、東文研所蔵)・同全リスト (約12,000件収録)
- (16) ペルシャ語図書の検索(東洋文庫、東文研、東外大所蔵)・同全リスト (約8,100件収録)
- (17) 現代トルコ語図書の検索 (約9,300件収録)
- (18) オスマントルコ語図書全リスト (約1,400件収録)
- (19) キルギス語図書全リスト (約20件収録)
- (20) ウイグル語図書全リスト (約1,100件収録)
- (21) カザフ語図書全リスト (約240件収録)
- (22) スインディー語図書全リスト (約150件収録)
- (23) チベット語文献(河口慧海将来蔵外文献) (約500件収録)
- (24) チベット語文献(米国議会マイクロフィッシュ版) (約4,000件収録)
- (25) ビルマ語図書の検索 (約700件収録)
- (26) インドネシア語・マレーシア語の検索 (約300件収録)
- ※(27) 南方史資料 (約4,200件収録)

東洋文庫に寄贈された故山本達郎氏旧蔵書籍が検索できる。

入力及び公開にむけての作業は次年度以降も引き続き進めていく予定であり、同時に所蔵資料のデジタル化も積極的に推進していく計画である。

7. 書庫内資料と書架スペース

書庫内資料の排架一覧と新規排架および主な調整箇所

階	1号棟	新規排架・調整箇所	2号棟	新規排架・調整箇所
6	朝鮮本、安南本、満州本、蒙古本、和書（XIII～XVII大型）			
5	Old Books、PB、MS、漢籍稀覯書、岩崎文庫、銅版画、古地図、梅原考古資料、辻文庫・榎文庫 Old Books 及び綴装本		和書（II～XII）	梅原文庫（和漢書） 辻文庫（ 々 ） 和書（II～IX）
4	洋書（I～XII・大型）、モリソン二世文庫、ペラルデ文庫、ウルドゥー語資料、ロシア語別置資料		トルコ語資料、榎文庫、岩見文庫、ペルシア語資料（P-A-1～P-LI-761）、チベット語資料	榎文庫、岩見文庫、ペルシア語資料、現代トルコ語資料
3	漢籍（経部・子部・集部・叢書・大型）、日本語・ハングル新着雑誌		洋書（XIII～XVII・MX）モリソンパンフレット、アラビア語資料、ペルシア語資料（P-LI-762～P-Z-6）	アラビア語資料 ペルシア語資料
2	漢籍（史部）		近代中国研究委員会収集資料	
1	逐次刊行物（日・中・朝・洋新聞）、中国語、欧文新着雑誌		逐次刊行物（欧文）	

臨時書庫

オスマン・トルコ語

書架調整のみでは対応しきれない現状を打開し、書架狭隘を大きく解消するため、1号棟2階及び2号棟3階4階5階に単式6段書架計107台を増設した。この書架増設は3カ年計画の初年度分である。これに伴う本年度の主な資料移動は以下のとおりである。

1. この増設書架に資料を展開させる形で、榎文庫・岩見文庫・アラビア語・ペルシア語・現代トルコ語・日本語資料（II～IX）の排架調整を行なった。
2. また、さらにアラビア語・ペルシア語・現代トルコ語資料については、これ

まで書架の不足から複数箇所分散して排架していた資料を1カ所に纏め、
出納作業を円滑に行なえるように改めた。

3. あわせて、辻文庫・梅原文庫の和漢書を臨時書庫から2号棟5階に移動し資料の排架適正をはかった。

Ⅲ 研究事業

東洋文庫は、アジアを構成する諸地域の歴史・文化の発展に関する基礎資料を、組織的かつ継続的に収集してこれを広く内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、内外のアジア研究の進展に大きく貢献することを主要な目的としている。

東洋文庫はこの事業のいっそうの拡充に向けて、平成15年度以降、研究体制を一新した。すなわち（イ）研究員の編成において若手研究員の参加に意を注ぐとともに、（ロ）現代アジアの課題に多面的かつ総合的に取り組む方策を打出し、（ハ）欧文による成果の発信を拡充して国際的な活動を強化し、（ニ）研究情報および資料情報の公開と共同利用、内外にわたる情報の授受を促進すべく、研究部と図書部を一丸とした電子情報システムの構築に着手した。これを機に、研究分野は《超域アジア研究》と《アジア諸地域研究》に二分され、前者は現代アジアの学際的な動態研究、後者は各ディシプリンを生かした基礎研究に取り組む。

1. 調査研究

A. 超域アジア研究

1940年代以降のアジアは激変と急成長をとげ、21世紀の世界情勢の展望にとってアジアの占める位置と役割は高まりつつある。中国は1949年の革命ののち、急速な変容と発展を経過しており、中国情勢は国内問題に加えて、隣接アジア諸地域を包摂した課題として総合的・多面的な研究を不可避としている。また、イスラームのグローバル化とその先鋭化も近年の著しい現象であり、現代世界の理解のためには、中東や中国・東南アジアのイスラームの現実を柔軟に解析することが必要である。

このような意味で、現代の中国圏域およびイスラーム圏域に関するアジア研究を新たに組織し、これを政治学・経済学・国際関係論・歴史学などを融合した学際型のプロジェクト研究として実施する。

○超域アジア・プロジェクト研究

(1) 「現代中国の総合的研究」

(超域アジア研究部門、現代中国研究班、総括・斯波義信)

1949年の革命以後、国内で政治、経済、社会の激変を経験し、東アジアから世界にまで政治・経済的な影響力をもちつつある隣邦中国の全容を、歴史・文化の流れを含めて総合的に捉える研究体制（資料、政治と外交、経済、国際関係・文化の4班）を構築する。また、関連する基礎資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点にしなが、学際的研究・公開利用の観点から拡充と再編をはかる。

[研究実施概要]

「現代中国班」は、統一テーマを〈国際社会における現代中国の変容：持続と変革〉と定めた上、《資料》《政治と外交》《経済》《国際関係・文化》の4グループを編成した。平成17年度は、定例の研究会を主軸にしなが、研究発表、国内・海外の調査、資料の収集を継続実施中であり、復旦大学中国歴史地理研究所葛劍雄教授、華東師範大学図書館の黄秀文館長、張静波副館長を招聘し、研究交流を行った。

また、折衝中であった財団法人東洋文庫と台湾の中華民国中央研究院歴史語言研究所との間の学術交流協定が平成18年2月7日に調印の運びとなり、平成18年4月1日より平成24年3月31日まで、向こう6年間を当面の目処として実施される。この協定は研究部・図書部・総務部を含む東洋文庫の全体に関わる内容のものであり、研究部の事業のなかでは中国およびその周辺を対象とするものである。おもな交流内容は、(1)年間1名の研究者を相互に受け入れる。(2)東洋文庫は所蔵のモリソンパンフレットのマイクロフィルムを提供する。(3)中央研究院は漢籍電子文献資料庫所収の電子文献資料を東洋文庫に対し無償で研究利用に提供する。この漢籍電子文献資料庫は、主として唐・宋から元・明・清・民国期に及ぶ基礎文献を網羅しており、またこの協定では歴史語言研究所は近代史研究所も合わせて代表しているので、東洋文庫としては現代中国、近代中国、さらに前近代中国研究の諸班が、この協定を活用することになる。

業績の出版では、経済グループがその研究成果を *Restructuring China: Party, State and Society after the Reform and Open Door* [東洋文庫欧文論叢 (TBRL) No. 8] として刊行したほか、当面中国を主体とした *Modern Asian Studies Review* の定期出版を開始し、資料、政治と外交、経済および国際関係・文化の各グループのうち、創刊号では経済班の研究成果4篇を収載し、刊行した。さらに『中国学術雑誌全文データベース』哲学・思想編のアクセス権を確保した。

以上、平成15年度の発足以来、各研究グループにおいて研究の体制がととのい、それぞれの研究の成果が著述や機関誌論文の形で着実に内外に向けて公表されつつある。一方、資料収集については、電子化された情報を受信・発信する体制が整備されつつあり、内外の研究者と資料・情報を共有しつつ研究を推進する方向に向けての努力が実りつつあると言えよう。

(2) 「現代イスラームの超域的研究

－議会主権の展開と立憲体制に関する研究－

(超域アジア研究部門、現代イスラーム研究班、総括・佐藤次高)

本プロジェクトでは、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書（アラビア語、ペルシア語、トルコ語）を分析し、それぞれの地域（国家）に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討することを通じて、中東・イスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を総合的に考察する。

[研究実施概要]

「現代イスラーム班」では、まず、イラングループが、平成17年度にイランの議会文書を対象に、*Agenda Index of the Minutes of the Iranian National Assembly*（ペルシャ語）の成果を公刊（CD-ROM版）した。また、研究交流の面では、パデュー大学の Janet Afary 助教授を招聘し、講演会が実施された。アラブグループにおいては、昨年度に引き続き、アラブ諸国の議会主義・議会制度史に関する比較研究を進める一方、エジプト議会資料の分析と利用法の調査研究を行い、合わせてシリア・チュニジア・モロッコの議会資料についての資料収集と現地調査を実施した。成果出版においては、*Tax Farm Registers of Damascus Province in the Seventeenth Century: Archival and Historical Studies*（西アジア研究班と共編）を公刊した。トルコグループでは、前年度に引き続きトルコ議会関係資料の収集、分析を行い、平成18年度にその成果を刊行する予定である。なお、3月にはチュニジア教育省顧問の Tarek Chehidi 氏を招聘し、3グループ参加による合同研究会を開催した。各グループの報告は以下の通りである。①トルコ：粕谷元「トルコ共和国最初の憲法（1924年憲法）の制定過程 [コメンテーター 新井政美]」、②イラン：八尾師誠「史料としてのイラン議会議事録を巡る諸問題と今後の展望」、③アラブ：Tarek Chehidi “The State of Tunisia during the Nineteenth Century” [コメンテーター 小杉泰]、④平成15～17年度各グループ活動報告。

合同研究会での「総合討論」でも指摘されたように、今後は立憲制と議会制の確立課程を歴史の中に位置づけ、その結果をアラブ、イラン、トルコ間で比較することが有益であろう。この作業と議会文書の解読作業とを組み合わせることによって、立憲制と議会制の比較研究はいわゆる実証研究の段階に進むことができるものと思われる。

B. アジア諸地域研究

現代アジアの複合的かつ動的な発展を理解する上で、各民族が有する個性豊かな歴史と文化の基礎的研究が欠かせない。本研究は、アジアの現状に影を落としている歴史・文化の諸要素につき、基礎的かつ長期の取り組みを要する総合的な研究を継続した。

〈東アジア研究部門〉

(3) 前近代中国研究班

①「前近代中国の法と社会」—プロジェクト研究— (総括・鈴木立子)

宋から明清時代にかけて豊富に残されている判牘文・条例などから、各時代の戸婚・田土・錢穀などの「民事」に関わる法について、その特質・歴史の変遷・地方性などを分析し、前近代中国の社会の本質を考察する。その成果は、論文集『宋—清代の法と地域社会』の刊行を期す。またその過程で明清時代を中心とした判牘文・条例集について調査・収集する。

[研究実施概要]

- a) 研究会を催し前近代中国の「民事」的な法・規範に関する研究成果として、『宋—清代の法と地域社会』(307頁)を刊行した。
- b) 「民事」的な法・規範に関する文献目録の作成を継続した。
- c) 国内外の宋—清代の条例等の調査・収集と条例集の「内容索引」の作成を継続した。

②「中国古代地域研究—『水経注』の分析から—」 (総括・宇都木章)

『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注を考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析することによって、中国古代の地域社会の構造を再検討する。

[研究実施概要]

- a) 陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとして、隔週の研究会において、その巻17・18「渭水」(甘肅省に発し、陝西省成陽の南、西安(長安)の北を経て黄河に注ぐ)の部分、旧ソ連製('78年、1/100,000)の詳細なランドサット衛星地図およびアメリカの航空写真と重ね合わせ、継続して諸注及び緒校訂を丁寧な検討し読み進めた。
- b) 20世紀以降の中国における渭水流域の諸遺跡の考古学的調査・発掘の報

告書を集め、この地域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせ検討し、渭水流域の古代の自然・社会的実態により具体的に迫るようつとめた。

- c) 2004年に発掘された西周王墓の可能性が指摘される陝西省岐山県周公廟遺跡、秦公大墓および河南省洛陽地域の歴史地理調査のため、渭水流域の現地調査を実施し、陝西省考古研究所、北京大学および中国社会科学院の考古研究所の発掘担当者との学術交流・検討会を重ねた。平成18年度にこの成果を冊子体の報告書にまとめるため作成につとめた。

③「宋史食貨志研究」

(総括・斯波義信)

宋代の経済につき王朝の官僚機構が記した克明な「資料」にもとづいて、経済政策・財政運営の全体像を解明する。「資料」の中心をなすものは『宋史食貨志』であり、その総合的研究の成果として訳註書を完成し、また、その資料源である『宋会要輯稿』食貨語彙索引編の作成事業の完結を期す。

[研究実施概要]

- a) 隔週の研究会のもとに、平成17年度は、『宋史食貨志訳注(六)』収載の酒・香・商税・市易など講読研究会を重ねて刊行した。
- b) 『宋史食貨志訳注(五)』の語彙索引を作成した。
- c) 前年度につづき『宋会要輯稿』食貨の部の語彙「一般編」カード約78,000枚の入力・原典照合・校正を遂行し出版にそなえた。
- d) 中国社会経済史用語解(宋代篇)作成の研究に着手した。
- e) 『朝野類要』の書誌的研究を実施した。

④「東アジア都城の考古学的調査・研究(2)」

(総括・田村晃一)

平成14・15・16年度と続けて、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として平成16年度に『東アジアの都城と渤海』(394頁)を公刊した。しかしながらその中心的なものであった、渤海上京龍泉府址(東京城)出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、整理に手間取り、一部の遺物の調査・研究については、平成17年度以降、継続実施する。

[研究実施概要]

- a) 平成17年度においては上記の一部遺物についての調査・研究を続けると共に、渤海中京顕徳府、渤海東京龍原府などとの比較という方向で調査の範囲を広げて実施した。また従来はとかく中原との関連に目を向けがちであったが、その弊を改め、今年度から新たに、渤海と深い関係にあった遼・金の都城との関連について検討した。

- b) 平成18年度中に、平成16年度の成果刊行につづけて『渤海の都城』（仮）として冊子体報告書を刊行するため準備を進めた。

(4) 近代中国研究班

①「1910年代における日本の中国認識」 （総括・本庄比佐子）

近代日本の政府及び民間機関が作成した中国実態調査資料の検討を通して、日本の同時代中国認識がいかなるものであったかを明らかにすることを基本に、本研究では、比較的研究の手薄な1910年代から20年代初めの時期の山東地方を取り上げる。

[研究実施概要]

- a) 平成17年度には、これまでの研究の成果として『日本の青島占領と山東の社会経済：1914-22年』（404頁、付図2枚）を刊行した。
- b) 構成メンバー各々がテーマを設定して、個々の研究を進め、その成果をもちよって研究会において意見交換を継続実施した。
- c) 昨年度に引きつづき関係資料の調査・収集につとめ、青島守備軍民政部鉄道部発行の『調査資料』シリーズのほか、『山東鉄道調査報告』、『青島実業協会月報』など多くの貴重資料の調査・研究を継続した。

(5) 東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究」 （総括・吉田光男）

京都大学附属図書館河合文庫、東京大学総合図書館阿川文庫、天理図書館今西文庫をはじめとして、日本各所に所蔵されている近世朝鮮文献資料の歴史学的・文献学的研究を行う。18～19世紀の商人関係文書群など、朝鮮半島では類例が発見されていない非刊本資料も多く、その全体像を把握する必要がある。本研究では、官民の帳簿・成冊など、主として手写本によって作成された近世朝鮮非刊本資料の調査と分析を行い、4ヶ年計画でその成果の刊行を期する。

[研究実施概要]

- a) 朝鮮近世史研究の基礎的基盤を構築するために、日本散在の近世朝鮮文献資料、主として官民の帳簿や成冊などの収集・調査・分析につとめた。
- b) 平成16年度に新たに3名の研究分担者の参加を得て、4ヶ年間のプロジェクトの研究成果の公表を期し実施した。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究」

(総括・松村潤)

近年、中国清朝満洲語檔案資料の重要性が注目されてきているが、清朝の基盤組織である八旗のひとつ鑲紅旗満洲の衙門(事務所)の文書群である、東洋文庫所蔵の「鑲紅旗檔満洲都統衙門檔案」の研究を継続する。同檔案には、衙門が設けられた雍正元年(1723)から民国十一年(1922)にいたる、約2,240件の文書が残されている。その文書群の「概要」については、すでにToyo Bunko Research Library No.1 *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko* に紹介したが、檔案のもつ歴史的意味、個別檔案の内容等について「研究編」を編み英文での刊行を期す。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫所蔵鑲紅旗檔満洲語檔案の「研究編」(英文)刊行の作業をすすめた。
- b) 「清入関前内国史院檔満文檔案」(北京の中国第一歴史檔案館所蔵)の『内国史院檔、天聰七年』(ローマ字転写・和訳・原文写真収載)の出版につづき、「天聰五年(1631)檔」および「天聰八年(1634)檔」について講読を完了し、出版原稿を準備した。

(6) 日本研究班

①「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」

(総括・佐竹昭広)

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語・美術を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌学的調査は未だ十分になされていない。平成16年度以降は、江戸期の近世写本・刊本、特に歌書関連の貴重書について組織的、総合的に行い、研究の基盤を整備するとともに、これを広く社会に公表し、研究の進展に資することを期す。

[研究実施概要]

- a) 岩崎文庫貴重書書誌プロジェクトは、平成15年度までに室町時代以前の成立の古写本・古刊本について、図版を掲載してⅠ～Ⅳを公刊した。平成16・17年度は、引き続いて江戸時代の近世写本・刊本を調査し、研究会を催して全体像の把握につとめ、まず平成18年度に『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅴ』を刊行するために、室町以前の歌書99件の書誌調査・解題執筆・収載図版選定などにつとめた。

〈内陸アジア研究部門〉

(7) 中央アジア研究班

① 「St. ペテルブルグ文書研究」

(総括・梅村坦)

東洋文庫所蔵のマイクロフィルム（ロシア科学アカデミー St.ペテルブルグ東洋学研究所所蔵文書）のうち、5 - 6世紀から15世紀頃に活躍したトルコ系・イラン系民族のウイグル語・ソグド語・コータン語・マニ文字文献（約14,000駒）およびモンゴル語文献（約12,000駒）を整理分類し、まず、その総合課題カタログを作成する。それと並行して文献学的・歴史学的・言語学的研究をすすめ、オアシス社会と遊牧社会との関連を含めて、中央アジア諸民族の残した文書により、その当時の歴史文化的背景を明らかにする。

〔研究実施概要〕

- a) 各言語の分担者による共同文書研究資料として使用するため、断片の文書を含めて、その複製を作成し分類整理をすすめ、まず、各言語別に文書の同定などの文献学的研究につとめた。
- b) St. ペテルブルグ文書群との比較検討の資料として、大英図書館所蔵のウイグル語文献の総合リストを作成し、個々の文書の比較同定の基礎を着実に整えた。

② 「近現代中央アジアにおける民族の創成」

(総括・小松久男)

1991年ソ連解体と中央アジア5ヶ国の独立以来、現今のアフガニスタン情勢まで連動して、中央アジア諸国および、ヴォルガ・ウラル地域ではあらたな「民族意識」がさまざまな形で姿を現し、周辺地域（たとえば新疆ウイグル自治区）にも影響している。このような現代中央アジアの動態を近年における東洋文庫の収集資料を活用して主に歴史学の方法によって検証し、「国民国家」の枠組みを問いなおしつつ、「民族」創成の多様な論理と過程を明らかにする。

〔研究実施概要〕

- a) 近現代中央アジアに関する研究情報の蓄積と世界における研究動向の把握とを目的として TBRL No.7 *Research Trends in Modern Central Eurasian Studies (18th - 20th Centuries): A Selective and Critical Bibliography of Works Published between 1985 and 2000, Part2*を刊行した。
- b) 近代中央アジアの諸民族に関する資料の調査及び収集
今年度、北海道大学付属図書館及びスラブ研究センターで行った調査では、

まず18世紀初頭のロシア帝国に含まれていた、あるいは以後に含まれることになった中央アジアの諸民族に関する基礎的な資料 Полное собрание законов Российской Империи (СПб.1985-1916) 第5巻から7巻を、デジタル化した映像として入手した。次に、中央アジアの諸民族に関して多くの情報を含む Сборник императорского русского исторического общества (СПб. 1867-1916) 43巻から101巻について、そこに含まれるロシア政府の決議や決定を通観し、重要部分に関して複写した。さらに、宗教に関連した中央アジア諸民族の情報に富んだ Православный палестинский сборник (СПб. 1882-1914) の内容をチェックし、主にロシア政府による中央アジア諸民族へのロシア正教宣教についての情報を収集した。本調査では、18世紀初頭のロシアと中央アジア諸民族との関係について、国内に存在する資料の基本的な収集を行ったが、今後は中央アジアやロシアにおけるより詳細な調査が必要と考えられる。

- c) 研究チーム以外の研究者の参加を得て本研究テーマに関する研究会を継続的に開催した。平成17年度にはウズベキスタン、カザフスタン、ロシア、米国などの研究者とともに国際シンポジウム「中央ユーラシア研究の新地平」(7月10-11日、東京大学)を開催した。

③「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」 (総括・土肥義和)

これまで、旧来、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた中国の内地及び内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を原地で作成された生の漢文文書を分析研究することによって、諸民族の歴史の実態を明かにすることにある。このために、本研究は、3世紀から13世紀に至る時代に作成された漢文文書を記述内容によって分類し、それぞれの文書がどのような特質をもっているかを、書誌学的、あるいは古文書学的に研究することによって、諸種文書の外形的な特徴、即ち、様式を究明するとともに、内陸アジア諸民族の歴史の実態を明らかにすることを期す。

[研究実施概要]

- a) ロシアのサンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土文書のマイクロフィルム中の漢語文献(全107リール、Nos.256-362リール)の点検を終了し、各リールに含まれている文献の整理番号とその齣数とを示す対照一覧表を作成した。なお、この一覧表には、既存の『俄藏敦煌文献』(全17冊、上海古籍出版社)に収録された文献(図版)の所在(巻数・頁数)明示した。
- b) 国内外の研究者の利用に供するため、上記の対照一覧表のデータベース

化をすすめるとともに、メンバーの担当分野にかかわる漢文文書の重要なものを抽出して、その史料的价值の究明につとめた。

- c) 研究分担・協力者以外の研究者の参加を得て「内陸アジア出土古文獻研究会」を開催した。

(8) チベット研究班

①「チベット蔵外文献の書誌的研究」

(総括・川崎信定)

河口慧海将来文献を含む東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録のデータベース作成を継続する。また、チベットの伝統的仏教学の基礎研究書である『トゥカン一切宗義書』(インド仏教編) テキスト校訂と語彙収集およびデータベース化を行う。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録の編纂カードを点検して、目録データベースの作成を継続した。
- b) チベット人研究協力者の協力のもとに東洋文庫所蔵チベット蔵外文献中の河口慧海将来文献の校訂と語彙収集およびデータベース化を継続した。
- c) チベットの伝統的仏教学の基礎研究書として、従来より研究を進めてきたトゥカン『宗義書』(既刊6冊)の続編として「インド仏教編」のテキスト校訂および和訳研究注記の作成を進めた。

〈インド・東南アジア研究部門〉

(9) インド研究班

①「南アジアにおける支配権力の政治と文化」

(総括・小名康之)

南アジア史における支配権力は、概略、古代のヒンドゥー政権、中世のムスリム政権、近代の植民地政権、現代の民主政権へと展開した。この中、わが国において最も遅れているムスリム政権のムガル時代を中心に、南アジア史関係のペルシア語、ウルドゥー語史料の蒐集につとめ、インド=ムスリム政権の権力構造とその支配下における社会、経済、文化の実態を解明する。

[研究実施概要]

- a) 研究分担者の個別研究を進める過程で、ムガル帝国時代のムスリム関係史料(サンスクリット語・ペルシア語文献、ウルドゥー語史料、ヒンディ文学関係史料)とヨーロッパ人による史料(ポルトガル人史料、カトリック

ク宣教師史料、ヨーロッパ東インド会社史料、ヨーロッパ人旅行記)の調査をすすめ、蒐集計画を検討して、データ入力をすすめた。

(10) 東南アジア研究班

①「東南アジア諸国の伝統と近代化をめぐる諸問題」 (総括・石井米雄)

東南アジアの港市には、東西世界の商人が逗留するとともに、中国やインド、西アジアからの移住者も流入した。そこで、東南アジアの前近代から近代にかけてこうした移住者達が、出身地といかなるネットワークを形成し、また近代東南アジア社会の構築にいかに関わったかを、港市を拠点に考察する。

[研究実施概要]

- a) 東南アジア関係マイクロフィルム資料の分類整理とデータ入力を進めた。
- b) 東南アジアの王統記の他者表象をめぐる記述の一覧表作成につとめるとともに、東南アジアの港市におけるアラブ系住民や華人系住民の居住区の訪問調査を進めた。

〈西アジア研究部門〉

(11) 西アジア研究班

①「イスラーム世界における契約文書の研究」 (総括・三浦徹)

個人間の契約(売買契約など)にとどまらず、広く君臣契約や行政契約(徴税請負など)を含め、現存する文書や史料をもとに、イスラーム世界における契約を保証するシステムと契約によって結ばれる社会関係の全体像を検討する。

[研究実施概要]

- a) 平成17年度には、3ヶ年間にわたるムカータ台帳(17世紀のシリア・ダマスカス州の徴税請負台帳)の校訂と研究の成果として、超域研究の現代イスラーム班との共編で *Tax Farm Registers of Damascus Province in the Seventeenth Century: Archival and Historical Studies* を刊行した。
- b) 本プロジェクト総括の三浦が、米国ワシントンにおける北米中東学会でムカータ台帳研究等の研究動向を報告した。
- c) 他機関の協同プロジェクト「中央アジア古文書研究」(京都外国語大学)、イスラーム写本・文書の総合的研究(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)などと共同研究会を催し、イスラーム法廷文書にかかわ

る研究者のネットワークの構築を継続した。

C. 平成17年度 研究部 5 部門11研究班 研究組織

(◎は専従者、Wは重複を示す)

超域アジア研究部門

研究顧問 石井米雄 (大学共同利用機関法人 人間文化研究機構機構長)

○現代中国研究班「現代中国の総合的研究」

総括	斯波 義信 [◎]	(東洋文庫理事長)
資料	田仲 一成 [◎]	(東洋文庫図書部長)
	矢吹 晋	(横浜市立大学名誉教授)
	丸尾 常喜	(大東文化大学元教授)
政治	廣瀬 紳一	(A. T. Keaney, Principal)
	毛里 和子	(早稲田大学教授)
	興梠 一郎	(神田外語大学助教授)
	唐 亮	(横浜市立大学助教授)
	青山 瑠妙	(早稲田大学助教授)
	天児 慧	(早稲田大学助教授)
経済	平野 聡	(早稲田大学助教授)
	中兼和津次	(青山学院大学教授)
	加藤 弘之	(神戸大学教授)
	川井 伸一	(愛知大学教授)
	巖 善平	(桃山学院大学教授)
	佐藤 宏	(一橋大学教授)
	田島 俊雄	(東京大学教授)
	丸川 知雄	(東京大学助教授)
国際関係・文化	平野健一郎	(早稲田大学教授)
	衛藤 藩吉	(東京大学名誉教授)
	濱下 武志	(京都大学教授)
	田中 明彦	(東京大学教授)
	伊香 俊哉	(都留文化大学助教授)
	内田 知行	(大東文化大学教授)

川島 真	(北海道大学助教授)
貴志 俊彦	(高根県立大学助教授)
金 鳳珍	(北九州市立大学教授)
胡 潔	(名古屋大学助教授)
黄 東蘭	(愛知県立大学助教授)
小浜 正子	(日本大学教授)
砂山 幸雄	(愛知大学教授)
高田 幸男	(明治大学助教授)
土田 哲夫	(中央大学教授)
古田 和子	(慶應義塾大学教授)
村田雄二郎	(東京大学教授)

○現代イスラーム研究班「現代イスラームの超域的研究
 - 議会主義の展開と立憲体制に関する比較研究 -」

総括	佐藤 次高 [○]	(東洋文庫研究部長)
アラブ	長沢 栄治	(東京大学東洋文化研究所教授)
	小杉 泰	(京都大学教授)
	池田美佐子	(光陵女子短大教授)
	関本 照夫	(東京大学東洋文化研究所教授)
	松本 弘	(大東文化大学助教授)
イラン	八尾師 誠	(東京外国語大学教授)
	黒田 卓	(東北大学助教授)
	吉村慎太郎	(広島大学助教授)
	松永 泰行	(同志社大学ニューヨークセンターフェロー)
	鈴木 均	(アジア経済研究所研究員)
トルコ	永田 雄三	(明治大学教授)
	設楽 國広	(立教大学教授)
	新井 政美	(東京外国語大学教授)
	小松 久男	(東京大学教授)
	粕谷 元	(日本大学講師)
	大河原知樹	(東北大学助教授)
超域2班事務統括	瀧下 彩子 [○]	(東洋文庫研究員)

歴史・文化研究（アジア諸地域研究）

○東アジア研究部門

前近代中国研究班

「前近代中国の法と社会」

総括（元代）	鈴木 立子	（愛知大学教授）
南宋	柳田 節子	（学習院大学元教授）
	大澤 正昭	（上智大学教授）
明清	鶴見 尚弘	（山梨県立大学学長）
	岸本 美緒	（東京大学教授）
	寺田 浩明	（京都大学教授）
	山本 英史	（慶應義塾大学教授）
	濱島 敦俊	（臺灣暨南國際大學教授）

「中国古代地域史研究——水経注の分析から——」

総括	宇都木 章	（青山学院大学名誉教授）
	掘 敏一	（明治大学名誉教授）
	松丸 道雄	（東京大学名誉教授）
	太田 幸男	（東京学芸大学名誉教授）
	藤田 忠	（国土館大学教授）
	飯尾 秀幸	（専修大学教授）
	塩沢 裕仁	（法政大学講師）
	初山 明	（埼玉大学教授）

「東アジア都城の考古学的研究（2）」

総括	田村 晃一	（青山学院大学名誉教授）
	飯島 武次	（駒澤大学教授）
	清水 信行	（青山学院大学教授）
	井上 和人	（奈良文化財研究所第一調査研究室長）
	妹尾 達彦	（中央大学教授）
	早乙女雅博	（東京大学助教授）

「宋史食貨志研究」

総括	斯波 義信 ^W	（前出）
	中嶋 敏	（東京教育大学名誉教授）

柳田 節子 ^w	(前出)
千葉 巽	(桐朋学園大学名誉理事長)
吉田 寅	(立正大学元教授)
渡辺 紘良	(濁協医科大学名誉教授)
窪添 慶文	(お茶の水女子大学教授)
妹尾 達彦 ^w	(前出)
長谷川誠夫	(東洋文庫研究員)

近代中国研究班

「1910年代における日本の中国認識」

総括	本庄比佐子	(東洋文庫研究員)
経済	久保 亨	(信州大学教授)
	奥村 哲	(首都大学東京教授)
	金丸 裕一	(立命館大学教授)
	弁納 才一	(金沢大学教授)
	富澤 芳亜	(島根大学助教授)
政治	内山 雅生	(宇都宮大学教授)
	曾田 三郎	(広島大学教授)
	松重 充浩	(日本大学教授)
文化・社会	三谷 孝	(一橋大学教授)
	瀧下 彩子 ^o	(東洋文庫専任研究員)

東北アジア研究班

「日本所在近世朝鮮文献資料研究」

総括	吉田 光男	(東京大学教授)
	糟谷 憲一	(一橋大学教授)
	山内 弘一	(上智大学教授)
	井上 和枝	(鹿児島国際大学教授)
	須川 英徳	(横浜国立大学教授)
	六反田 豊	(東京大学助教授)
	山内 民博	(新潟大学助教授)
	森平 雅彦	(九州大学専任講師)

「清朝満洲語檔案資料の総合的研究」

総括	松村 潤	(日本大学名誉教授)
----	------	------------

石橋 崇雄	(国士館大学教授)
C.A.ダニエルス	(東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所教授)
加藤 直人	(日本大学教授)
中見 立夫	(東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所教授)
細谷 良夫	(東北学院大学教授)

日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」

総括	佐竹 昭廣	(京大名誉教授)
語学	酒井 憲二	(田園調布学園大学短大部名誉教授)
	柳田 征司	(奈良大学教授)
	石塚 晴通	(北海道大学名誉教授)
文学	朽尾 武	(成城大学教授)
	今西祐一郎	(九州大学教授)
	大谷 俊太	(奈良女子大学助教授)
	上野 英二	(成城大学教授)
	深澤 眞二	(和光大学教授)
	辻本 裕成	(南山大学助教授)
思想・文化	宮崎 修多	(成城大学助教授)
	斉藤真麻理	(国文学研究資料館助教授)
	和田 恭幸	(龍谷大学助教授)

○内陸アジア研究部門

中央アジア研究班

「St. ベテルブルグ文書研究」

総括	梅村 坦	(中央大学教授)
社会・文化	林 俊雄	(創価大学教授)
歴史	片山 章雄	(東海大学助教授)
モンゴル	杉山 正明	(京大大学教授)
コートン	熊本 裕	(東京大学教授)
ウイグル	庄垣内正弘	(京大大学教授)
ソグド	吉田 豊	(神戸市外国語大学教授)

「近現代中央アジアにおける民族の創成」

総括	小松 久男 ^W	(前出)
	新免 康	(中央大学教授)
	梅村 坦 ^W	(前出)
	片山 章雄 ^W	(前出)
	濱田 正美	(京都大学教授)

「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」

総括	土肥 義和	(國學院大学名誉教授)
碑銘讀文	池田 温	(創価大学特任教授)
官・私文書	氣賀澤保規	(明治大学教授)
	荒川 正晴	(大阪大学教授)
	關尾 史郎	(新潟大学教授)
	妹尾 達彦 ^W	(前出)

チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究」

総括	川崎 信定	(東洋大学教授)
歴史	山口 瑞鳳	(東京大学名誉教授)
宗教文献	松濤 誠連	(大正大学名誉教授)
密教図像	立川 武蔵	(愛知学院大学教授)
仏教稀覯本	御牧 克己	(京都大学教授)
民間文学	星實 千代	(東洋文庫研究員)
チベット仏教思想	吉水千鶴子	(筑波大学専任講師)

○インド・東南アジア研究部門

インド研究班

「南アジアにおける支配権力の政治と文化」

総括	小名 康之	(青山学院大学教授)
ドラヴィダ	辛島 昇	(大正大学教授)
サンスクリット	山崎 元一	(國學院大学名誉教授)
	水野 善文	(東京外国語大学助教授)
	太田 信宏	(東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所助手)

ウルドゥ 萩田 博 (東京外国語大学専任講師)

東南アジア研究班

「東南アジア諸国の伝統と近代化をめぐる諸問題」

総括	石井 米雄 ^W	(前出)
	桜井由躬雄	(東京大学教授)
	弘末 雅士	(立教大学教授)
	嶋尾 稔	(慶應義塾大学助教授)
	西尾 寛治	(立教大学講師)

○西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究」

総括	三浦 徹	(お茶の水女子大学教授)
契約観念	後藤 明	(東洋大学教授)
トルコ	永田 雄三 ^W	(前出)
	林 佳世子	(東京外国語大学教授)
トルコ・ペルシア	清水 宏祐	(九州大学教授)
	掘川 徹	(京都外国語大学教授)
	磯貝 健一	(京都外国語大学研究員)

歴史・文化研究 (アジア諸地域研究) 4部門9研究班 事務統括
松本 明^W (東洋文庫研究員)

なお、その他の研究員33名については、平成17年度現在、以上の組織に分属していないため、ここに記載しないこととした。

D. 東洋文庫研究員・研究課題一覧

研究員	研究課題
青山 瑠妙	現代中国政治・外交の研究
浅野 秀剛	日本版画美術の研究
天児 慧	現代中国の政治体制及び国際関係
荒 松雄	南アジア史、民族・宗教の研究

新井 政美	トルコ近代史
荒川 正晴	中央アジア古代史
飯尾 秀幸	中国古代国家史
飯島 武次	殷周時代の考古学研究
池田 温	中国中古史、前近代東亜文化交流史
池田美佐子	エジプト近現代史
伊香 俊哉	日本近現代史、戦争責任研究
石井 米雄	タイ史・三印法典の研究
石塚 晴通	日本語の歴史的研究、古代漢字文献学
石橋 崇雄	清朝政治史
磯貝 健一	イスラーム期中央アジア古文書研究
市古 宙三	太平天国及び中国共産党の研究
井上 和枝	李氏朝鮮時代郷村社会史研究・朝鮮女性史研究
井上 和人	東アジア古代都城制度の比較研究
今西祐一郎	源氏物語を中心とした平安時代文学の研究
上野 英二	平安朝文学の研究
内田 知行	1930-40年代中華民国社会史
内山 雅生	近代中国華北農村経済史
宇都木 章	春秋時代政治史
梅田 博之	現代朝鮮語の記述的研究
梅村 坦	ウイグル民族誌、内陸アジア史
海野 一隆	東洋地理・地図学の研究
衛藤 藩吉	近代中国政治史
大江 孝男	現代朝鮮語及び中期朝鮮語の研究
大河原知樹	19-20世紀シリアの社会史・政治史
大澤 正昭	唐宋時代社会史
太田 信宏	南インド近世史
太田 幸男	秦墓竹簡の研究
大谷 俊太	室町・江戸時代文学の研究
岡田 英弘	アジア史
奥村 哲	中国近現代史
小名 康之	インド・ムガル朝史
風間喜代三	印欧語の比較言語学的研究
粕谷 元	トルコ現代史
糟谷 憲一	18-19世紀朝鮮政治史
片山 章雄	中央アジア古代史

加藤 直人	清朝の民族統治政策・清代檔案史料の研究
加藤 弘之	地域開発の現状と政策に関する実証研究
金丸 裕一	中国政治経済史・日中関係史
辛島 昇	南アジア史
川井 伸一	中国企業研究
川崎 信定	チベット仏教の研究
川島 真	近代中国外交史
菊池 英夫	唐宋時代の行政および法制の研究
貴志 俊彦	近代中国における権力と秩序の形成史
岸本 美緒	明清時代地方社会史
北本 朝展	文献のデジタル・アーカイブ化
金 鳳珍	近代東アジア国際関係論・比較政治思想
草野 靖	宋代税財政史
久保 亨	中国近現代史
窪添 慶文	魏晋南北朝時代史
熊本 裕	イラン語史の研究
黒田 卓	近現代イラン史
氣賀澤保規	魏晋南北朝隋唐時代の政治社会文化史
巖 善平	中国の地域間労働移動と経済発展の研究
胡 潔	和漢比較文学の研究・比較家族史の研究
黄 東蘭	近代日中関係史
興梠 一郎	現代中国論、中国現代史
小杉 泰	現代イスラム政治の研究
後藤 明	イスラム社会と政治の研究
小浜 正子	上海都市社会史
小松 久男	中央アジア近代史
佐伯 富	中国山西商人の研究
早乙女雅博	東アジア考古学の研究
酒井 憲二	日本語の史的研究
桜井由躬雄	ベトナム史
佐竹 昭広	中世日本文学の史的研究
佐藤 次高	西アジア・イスラム史
佐藤 宏	農村経済社会の長期変動
塩沢 裕仁	中国古代歴史地理研究
滋賀 秀三	中国法制史の通史的研究
設楽 国広	オスマン帝国末期政治史

蔀 勇造	南アラビア古代史
斯波 義信	中国社会経済史
嶋尾 稔	ベトナム史
清水 宏祐	セルジューク朝時代イランの研究
清水 信行	古代の日本・大陸交流史
志茂 碩敏	13・4世紀モンゴル政権中枢・中核の研究
庄垣内正弘	チュルク語の研究
新免 康	東トルキスタン史
末成 道男	東アジア人類学、民間における社会と宗教
須川 英徳	高麗・朝鮮時代の商業
杉山 正明	モンゴル帝国史
鈴木 均	イランおよびアフガニスタンの地域研究
鈴木 立子	元朝社会経済史
砂山 幸雄	現代中国思想・文化・政治体制
妹尾 達彦	中国古代・中世都市史
関尾 史郎	敦煌・トルファン文書研究
関本 昭夫	東南アジア伝統工芸業の研究
曾田 三郎	中国近代政治・社会史
高田 幸男	長江下流域の地域社会・エリート・教育団体
瀧下 彩子	近代中国社会文化史
武田 幸男	朝鮮古代・近世史
田島 俊雄	中国農業・農家の経済計算と所得分配
立川 武蔵	チベット密教教理の研究
田中 明彦	現代東アジア国際政治の研究
田中 一成	中国演劇史
田中 時彦	日本の政治的近代化の研究
C.A.ダニエルズ	清代社会経済史、中国技術史
田村 晃一	東北アジアの考古学研究
笠沙 雅章	中国仏教文化史
千葉 熈	宋代宮廷史
辻本 裕成	中古・中世日本文学の研究
土田 哲夫	1920～40年代の中国政治・外交史
鶴見 尚弘	明・清時代社会経済史
寺田 浩明	中国明清法制史
唐 亮	現代中国政治史の研究
枅尾 武	和漢比較文学の研究及び日本に伝来した漢籍の研究

土肥 義和	西域出土漢文文書の研究
富澤 芳亜	中国近代経済史
鳥海 靖	日本近現代史
中兼和津次	現代中国経済・移行経済の研究
長沢 栄治	近代エジプト社会経済史
中嶋 敏	宋代史
永田 雄三	オスマン帝国社会経済史
永積 洋子	日本近世対外交渉史
中野真麻理	中世日本文学の研究
中見 立夫	清代モンゴル史・清代文書の史料的研究
並木 頼寿	中国近現代史
西尾 寛治	マレーシア・インドネシア近世史
西田 龍雄	チベット・ビルマ語派の研究
萩田 博	クルドゥー語学・文学の研究
長谷川誠夫	宋代官僚制の研究
八尾師 誠	20世紀初頭のイランにおける立憲革命の研究
花田 宇秋	正統カリフ・ウマイヤ朝史
濱下 武志	中国近現代史
濱島 敦俊	中国近世社会経済史
濱田 正美	中央アジアにおけるイスラーム研究
林 佳世子	オスマン朝期中東社会史
林 俊雄	中央ユーラシア史・草原考古学の研究
原 實	インド古代文学の研究
平野健一郎	近代東アジア国際関係論
平野 聡	中国党支配（国民党・共産党）の史的研究
弘末 雅士	インドネシア宗教社会史
深沢 眞二	連歌・俳諧の研究
藤田 忠	中国古代政治・社会史
古田 和子	情報・流通ネットワークの歴史的分析
古屋 昭弘	中国語の音韻史的研究
弁納 才一	近現代中国農村経済史
星 実千代	現代チベット口語の研究
細谷 良夫	清朝政治史
堀 敏一	中国古代都市文化の研究
堀川 徹	中央アジア文書研究
本庄比佐子	近現代日中関係史

松重 充浩	近現代中国政治・社会史及び東北アジア地域史
松永 泰行	現代イランの政治・宗教及びシーア派研究
松濤 誠燿	インド古代神話学の研究
松丸 道雄	殷周金文の研究
松村 潤	東北アジア民族史
松本 明	中国隋唐政治史
松本 弘	イエメン地域研究、エジプト近代史、現代中東政治
丸尾 常喜	魯迅の文学とその伝統
丸川 知雄	中国の産業集積および日中経済関係
三浦 徹	イスラム都市社会史
水野 善文	古典サンスクリット文学と中世ヒンディー文学
三谷 孝	現代中国の秘密結社研究
御牧 克己	チベット宗義書の研究
宮崎 修多	近世近代漢詩文の研究
村井 章介	日本中世を中心とする東アジア文化交流史
村田雄二郎	中国近代ナショナリズム、改革開放期の文化問題
毛里 和子	現代中国政治・外交及び東アジア国際関係
初山 明	中国古代法制史・辺境史
森平 雅彦	朝鮮中世・近世史
森安 孝夫	古代ウイグル文書の研究、中央ユーラシア古代中世史
矢沢 利彦	西洋人の見た中国事情研究
柳澤 明	清代外交史・民族関係史
柳田 征司	日本語の歴史的研究
柳田 節子	宋代社会経済史
矢吹 晋	近現代中国経済
山内 弘一	李朝史、朝鮮儒教研究
山内 民博	朝鮮後期郷村社会史研究
山口 瑞鳳	チベット史、チベット語文法、チベット仏教研究
山崎 元一	インド古代史
山本 英史	17-19世紀中国社会構造の研究
山本 毅雄	東洋学研究資料のデジタル・アーカイブ化
吉田 寅	中国塩業史
吉田 伸之	日本近世都市社会史
吉田 光男	朝鮮近世史
吉田 豊	ソグロ語及びソグド語文献の研究
吉水千鶴子	インド・チベット仏教思想史の研究

吉村慎太郎
六反田 豊
和田 博徳
和田 恭幸
渡辺 紘良

イラン近現代史
朝鮮中世・近世史
明清時代社会経済史
仮名草子および近世通俗伝書の研究
宋代社会史

(以上189名)

E. 日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究

(1) 研究成果公開促進費

「東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム」

(An Information System of Multimedia Digital Library of Multilanguage Materials for Asian Studies) [東洋文庫電算化委員会委員長：斯波義信] (平成6年度以降採択)

[分野][東洋学全般]

[目的・内容]

本プロジェクトは、東洋学に関する世界5大機関の一つに数えられる研究所・図書館である(財)東洋文庫が80年にわたり収蔵してきた言語種類50数種、部数360,000件、冊数880,000冊におよぶ大量の多言語資料について、従来構築した書誌データのオンライン検索の基礎の上に、画像資料をデジタル化した上、インターネットを通じて内外の研究者が自由に利用できるようにすることを目指している。[学術的価値]本文庫のモリソン・岩崎コレクションには国宝、重文を含む貴重な文献、絵画が含まれる。これらは、本文庫として従来から細心の注意を払って保存してきたが、近年の電子技術により、これをデジタル撮影して保存し、画像データベースにより公開すれば、内外の要請に応えることができ、また資料保存の面でも劣化に対応することができる。特に地図(江戸地図200種、欧米人のアジア地図300種)、銅版画、浮世絵、挿絵本、中国南北朝拓本、考古学者の中国・朝鮮・日本関係発掘資料、器物写真など、デジタル化して画像資料として研究者に提供する価値のあるものが多い。また、マルコポーロ東方見聞録のテキスト50数種、16世紀以来のイエズス会士の書簡、江戸時代のオランダ商館関係者の記録などの古洋書、岩崎家収蔵の万葉集、源氏物語、徒然草などの貴重古典籍なども、全文テキストとして公開することが内外研究者から期待されている。

[準備]昨年度から、画像データベースの構築に着手した。台湾の国家典藏数位計画、上海の資料庫構築計画、シンガポールアーカイブのデジタル資料状況などを視察した上、独立行政法人情報学研究所と技術提携し、資料のデジタル化を試行してきた。文化庁・総務省によるデジタルアーカイブの構築にも情報学研究所を通して画像資料を提供している。本文庫として、デジタル化の対象となる膨大な資料を擁している。デジタル化計画は着手したばかりであるが、関係諸機関との協力の下に、できるだけ早く目的を達成する。

[事業実施概要]

(1) 書誌データベースの補充

漢籍データのうち、叢書類の子目書70,000件は、従来、脱落していた著者名の補充入力をはかるほか、手作業でチェックした上外注入力、3,000件程度。他に

和書、多言語書誌データ追加入力2,000件程度。また、長期間にわたって複数の担当者が入力してきたため、データの間、不統一が起っている。このため、データの統一のための処理作業を行った。

(2) 画像データデジタル化

- a) 地 図 江戸時代刊行の江戸府内図200枚、京都、大阪など地方図100枚のうち、100枚を選んでデジタル撮影。
- b) 絵 画 室町、江戸時代の絵本、仮名草子、お伽草子、洒落本、黄表紙、読み本、名所案内、旅行記、などに含まれる挿絵のうち100枚を選んで、デジタル撮影。
- c) 浮世絵 江戸時代の浮世絵300枚のうち、画帳類100枚を選んでデジタル撮影。
- d) 考古器物 梅原考古資料のうち、朝鮮・中国出土器物のマイクロフィルムをデジタル化する。2,000件

(3) 全文テキストデジタル化

- a) イエズス会士書簡 マイクロフィルムからデジタル化。2,000頁。
- b) 岩崎貴重古典籍 マイクロフィルムからデジタル化。3,500頁。

以上のほか、本文庫の所蔵の特色である漢籍地方誌・族譜などについては、内外の利用者が多いので、各所の序跋、巻首の書影などをデジタル化して Web に上げることに着手した。

[作成担当者] 田仲一成 (図書部長)

(2) 基盤研究 (B)

「第一次大戦期日本の山東経営をめぐる総合的研究」

[研究代表者：本庄比佐子] (平成15年度採択、4ヶ年間・3年度目)

[目 的]

第一次世界大戦期に日本はドイツの青島要塞を攻略し、山東半島を拠点として中国大陸に対する利権拡張政策を積極的に展開した。そしてこの時期以降、日本は青島、山東半島を拠点に、それまで主に東北地域と台湾に限られていた利権を、中国の関内地域に拡大していく。本研究では、この時期、1910年代後半から1920年代初めにかけて、青島守備軍、満鉄、農商務省などの国家機構を動員して進められた山東地域など中国の実態調査の全貌を明らかにするとともに、それらの調査資料を参照しつつ、青島・山東地域を中心に、当時の中国の政治・経済・社会に関する総合的な考察を試みる。

[研究実施概要]

- (1) 過去2年間の活動によりかなりの調査資料を調査・収集でき、それらの分

析もある程度進んだ状況をふまえて、その中間報告としての論文を作成した。ただし、一部に今年度初頭の計画通りに進まなかったテーマもあった。その実際は次の通りである。

曾田「山東鉄道をめぐる日中交渉」、松重「大連の〈山東榎〉」、久保「山東の工業調査」、富澤「山東省の炭鉱」、弁納「山東の綿業」、瀧下「山東鉄道延長線問題」の6件はほぼ計画通りのまとめとなったが、本庄「青島守備軍の軍政と調査活動」は軍政の概略をまとめ得たが、調査活動はその一端を示すに止まり、金丸「青島のインフラストラクチャ」は電気事業だけに焦点を絞り、内山「山東農村社会の変動」は農村からの出稼ぎに重点を移した。また、奥村「農産物事情」及び三谷「山東の民衆」は中間のまとめに至らなかった。

しかしながら、上記の諸研究を通して日本の軍事占領と経済的進出について、かなりの程度その実像を把握できるようになった。

- (2) 中独関係の研究者であるドイツのミュールハーン氏（現職はフィンランド Turku 大学教授）を迎えて、研究交流をおこなった。本プロジェクトのテーマである第一次大戦期の日本の山東経営の基礎となったのがドイツの膠州湾租借地経営であるので、きわめて貴重な意見交換をすることができた。
- (3) 中間報告をまとめるにあたり、新たに九州大学図書館及び長崎大学経済学部図書館で追加の資料調査・収集をおこなった。
- (4) 最終報告に向けて、青島守備軍の作成した調査資料のデータを研究協力者に依頼してパソコンに入力した。

[研究分担者] 曾田三郎 松重充浩 久保享 奥村哲 金丸裕一 富澤芳亜
内山雅生 三谷孝 弁納才一 瀧下彩子

(3) 基礎研究 (C)

「朝野類要の総合的研究」

[研究代表者：渡辺紘良]（平成17年10月追加採択、2ヶ年間・初年度目）

[目的]

宋、趙昇著『朝野類要』は、官制用語について、簡にして要を得た説明の為されている書として有名であり、官制を扱う者の必ず引用する文献である。しかし著者をはじめとして、その書の刊行の経緯、その後の利用状況、版元の種類等について、従来、調査研究のなされることがなかった。われわれは宋史選挙志研究を踏まえ、宋代科挙官僚制研究にいつそう資すべく、その版本・利用状況等を調査し、詳細な訳注を作成せんとするものである。

[研究実施概要]

- (1) 定期的に（月2回）研究会の会合を開き、朝野類要巻1班朝、巻2挙業、

- 卷3入仕、爵禄、卷4文書、卷5余紀等の条文の訓読と注釈の作業に当たった。
- (2) 北京大学張希清教授を招き、講演会（2月3日演題「中国における科挙研究上の諸問題」を開催し、同席した朝野類要の会合（2月4日）では、北京大学大学院の朝野類要のゼミナール、朝野類要の版本、朝野類要研究の方法等について意見交換を行った。
 - (3) 訪中して、中国国家図書館所蔵の朝野類要清刊本3種（3月1日）、北京大学図書館所蔵四庫全書原本、即ち恵棟校本（3月2日）等の版本調査を行った。
 - (4) 訪中中、北京大学中国古代史研究センターにおいて、北京大学張希清、鄧小南、劉浦江、李孝聰の諸先生、大学院生と朝野類要に関する研究会を開催し、当方から①朝野類要研究会の由来、方法、②著者趙昇の調査、③条文1、2条の具体的な検討、等の発表を行い、相互に意見を交換した。
 - (5) 河南大学苗書梅教授を招き、講演会（3月9日演題「官員專任制度より見た宋代社会」）を開催し、宋代科挙官僚制度及び朝野類要に関連した諸問題について意見交換を行なった。

[研究分担者] 長谷川誠夫 相田洋 青木敦 近藤一成

F. その他の民間助成金による調査研究

(1) 三菱財団人文科学研究助成金特別事業

① 「中国古代地域史研究—『水経注』の分析から」

[代表研究者：堀 敏一]（平成14年10月～17年9月・終了）

[目的]

本研究は、中国中原地域とその周辺の各地域を対象とする地域史を中心に、近年の考古学や科学の発展によって再検証が求められている典籍史料の再構築を目指すという明確な目標を有するとともに、『水経注』という限定した文献的な整理とその考察とによって、古代地域史の水準を高め、中国古代史の新解釈を試みようとするものである。

『水経注』は黄河と長江及びその支流全域にわたり逐条、各地の詳細な調査と記録を行ったものであり、我国でも『水経注』の部分的注解や翻訳は行われていたが、なお注文まで含めた徹底的な解釈、翻訳はなされていない状況にある。

本研究プロジェクトでは、数年来継続してきた『水経注』の総合的注釈作業を基礎とし、清代考証学の成果である『水経注疏』（楊守敬・熊会貞疏・段熙仲點校）をテキストとして使用して、原典に関する精査、分析整理を行っている。若手研究者の補助を得つつ、考古学資料などをも加味することによって新解釈を成し遂げ、以て『水経注疏・新訂』の刊行を目指すことを目的とする。

[研究実施概要]

今年度は段熙仲点校・陳橋驛復校『水経注疏』（江蘇古籍出版社、1989年）をテキストに、主として巻一八渭水（中）を読み進めた。昨年・一昨年と同じく、講読には三菱財団助成事業によって逐次購入しているロシア（旧ソ連）の衛星地図（1978 USSR 1/100000）により該当する地域を確認し、『水経注』文献上の記載と、地形や地勢による精緻な検討をすすめた。巻一八渭水（中）は現陝西省西部を流れる流域を対象とする。中心となるのは渭水の支流雍水である。雍水流域には秦の都であった雍城があり、中国史における重要地域である。秦公大墓の発掘をはじめ考古学成果も多数報告され、秦の宮殿跡も発見されている。このため『水経注疏』本文の精読、地図による検討、考古学資料の確認それぞれに課題が山積し、極めて充実した研究が行われた。ただ検討すべき事例が余りに多く雍水流域の講読には予想以上の時間を費やしている。

雍水流域では秦公大墓等秦国に関わる重要な考古学遺跡は既に知られていたが、本研究による講読中に新たな考古学的大発見がもたらされた。西周王墓ではないか、とも考えられる大墓が陝西省岐山県周公廟から発見されたのである。周以前に存在した殷王朝では王墓が発見されている。だが周代では王のような極めて身分の高い人物を葬った墓はこれまでに発見されていなかった。更に続けて西周初期の都ではないか、とされる都市遺跡が陝西省鳳翔県水溝で発見された。いずれも渭水支流雍水の流域における発見である。巻一八渭水（中）には「周城」という記載がある。この記述が示す都市は不明であったが、水溝遺跡の発見と「周城」の比較により、新たな知見を得ることが可能になった。中国古代史研究にとって、周王朝の存在は大変に大きい。西周大墓と水溝遺跡の発見は、文献・地理・考古学の総合という方法をとる本研究にとっても画期的なものである。

今年度財団の研究助成事業のもとで行った主な成果を以下に列挙する。

- (1) 段熙仲点校・陳橋驛復校『水経注疏』（江蘇古籍出版社、1989年）巻一八をテキストにして、『水経注』本文及び清朝考証学の議論が凝縮されている楊守敬・熊会貞による疏文を講読した。注・疏に引用された文章は可能な限り原典により再確認し、考証学者による議論も、その争点を明らかにした。
- (2) 楊守敬は『水経注疏』の他、河流を図にした『水経注図』も著している。この図及びロシア（旧ソ連）製衛星地図をスキャナーによりコンピュータに取り込み、電子資料として活用できるようにした。これにより対応箇所の拡大等が可能になり、『水経注図』に示された河流と現在実際に存在する河川及び地勢を比較し、確定することが容易になった。
- (3) 『陝西省文物地図冊』（西安地図出版社、1998年）にまとめられた考古学資料等を活用し、『水経注』に記載される秦の宮殿の位置と発掘された宮殿跡の地点を比較した。また雍水流域で発見された西周王墓の可能性が指摘される岐

山県周公廟遺跡、西周時期都城遺跡である鳳翔県水溝古城遺跡について、殷周時代を専門とする研究分担者松丸道雄を中心に、遺跡の意義と可能性について検討した。

(4) (1)～(3)の研究をふまえ『水経注疏』をテキストとする訳注を刊行する準備を進めた。これまでに発表された『水経注』訳注では疏文までを対象にしたものはない。周公廟遺跡の発見等、検討すべき資料が予想以上に増加しているため、まず『水経注』巻一七～巻一九の渭水上中下のうち、源流より長安までの流域を刊行予定としている。刊行後も講読は継続し、最終的には渭水全流域の研究をまとめたい。

(5) 三菱財団助成事業による海外派遣として、研究分担者東洋文庫研究員宇都木章、松丸道雄及び研究協力者石黒（高田）ひさ子は平成17年5月8日より15日まで中国陝西省宝鶏地域・河南省洛陽地域の歴史地理調査を行った。この調査には文部科学省科研費補助金（特定奨励費）による東洋文庫研究員2名と私費による共同研究者7名も参加した。また陝西省内では北京大学教授徐天進氏及び陝西省考古研究所、洛陽では中国社会科学院考古研究所研究員許宏氏及び同研究所洛陽工作站・洛陽市文物工作隊の協力を得た。

a) 渭水支流雍水流域で発見された周公廟遺跡・水溝古城遺跡では、現地調査及び最新の発掘資料を見学した。『水経注』に現れる秦雍城遺跡については鳳翔県博物館や秦公一号大墓遺址博物館を見学し、理解を深めた。陝西省考古学研究所陳列室では「祈年宮」文字瓦を実見した。この出土地点は『水経注』の「祈年宮」記載位置とやや異なり、更に検討が必要である。宝鶏青銅器博物館では宝鶏周辺の渭水流域で発見された多くの青銅器を見学した。

b) 渭水では陝西省・河南省・山西省が省境を接する潼関で黄河に注ぐ。渭水研究の最終目標地点であるこの地では渭水と洛河、黄河の三河が合流する「三河口」を調査した。現在は水量が減少し、『水経注』に書かれた激しい合流はなく、穏やかな流れであった。

さらに河南省に入り、三門峡市で虢国博物館を訪問した。ここは宝鶏付近にあった虢国が周の東遷に伴い移動してきた場所である。展示物には周公廟遺跡で見学した玉器等に相似するものもあり、周と虢の関係や渭水・雍水流域から洛河・黄河流域への歴史的移動等について大きな示唆を得た。洛陽では二里頭遺跡・偃師商城・漢魏洛陽城等、歴史地理的考察と考古学資料を結びつける上で重要な都市遺跡を調査した。

洛陽外国語大学に長期滞在し、現地の考古学者と常時連絡を取りつつ実地研究を進めている研究分担者塩沢裕仁の手配があったため、短期間に充実した調査を行なうことができた。この調査については報告書の刊行を準備中である。

[研究分担者] 松丸道雄 太田幸男 飯尾秀幸 塩沢裕仁

②「中国社会経済史用語解釈（宋代篇）作成の研究」

[代表研究者：斯波義信]（平成17年10月～20年9月・3ヶ年間）

中国社会経済史研究において研究者が通常に直面する困難は、根本史料の過半を占める漢籍から必要な情報を引き出すに当って、長期の厳密な原典の読解の努力とその訓練を必須とすることである。なかんずく頻出する社会経済の用語については、用例・用法ごと、時期・地域ごとに多様であるにもかかわらず、用語解の専門辞書が極めて少なく、詳細な辞書でもそれらを稀にしか掲載していない。結局、ベストの解決法は基本史料の訳注、あるいは専門書において施された用語解釈を参照して辞書に代替することである。

東洋文庫では、創立当初からの継続的事業の一つとして、中国経済史の基本史料に当たる13種の歴代正史食貨志（経済・財政記録）の詳しい訳注を作成してきた。このうち最も大部で、しかも元・明・清時代の制度や実体のルーツを記録する『宋史』の食貨志篇について、その訳注を逐次刊行し平成17年度にその完成を見るに至った。

そこで、これまでに蓄積された用語解釈を選定集成し、国内及び海外の宋代社会経済史の研究者が常時必携参照し、研究全体の推進に資すべき用語解の編纂を計画した。用語の選定範囲は基本的には『宋史』食貨志篇の各章とするが、右各章の記述の源泉をなす『宋会要輯稿』食貨篇の語彙索引（現在同時推進、刊行中）及び専門学術書中の附註なども広く参照し、また各語彙の用例、用法、典拠史料、時期別、地域別の限定も付し、要するに実用的な辞書機能を帯びた用語解釈の集成を行うものである。この企画を実現し、さらに将来その成果を日本文・英文で刊行することに至れば、中国社会経済史の研究の推進と解釈の深化が大いに期待される。

[研究実施概要]

- (1) 初年度は、《用語解》に収録する語彙を選定し、解説の範囲及び項目、すなわち語彙の用法、用例、典拠記事、時期および地域の特定等、について検討し、この資料をデジタルデータベースとして入力する方式・準則を定め、役割を分担し、《用語解》原案の作成に入った。
- (2) 語彙選定については、作業上『宋史』食貨志の上巻、すなわち田制・税制・衣料生産・物資買上げ制・輸送制・賦役制・救済制等、「食」に関する部分（A班）と、『宋史』食貨志の下巻、すなわち会計・幣制・専売制・商業税・国営商業・物価対策・海外貿易等、「貸」に関する部分（B班）とに分け、班ごとに原案を作成中である。
- (3) 選定語彙及び用語解釈の原案を審議し、記述準則を共有するために定期的に会合する。また、協同研究者は準則を共有しつつ、用語解釈の作成と入力に

入るが、絶えず班ごとにあるいは全体で会合し、作成上の問題点を出し合って調整した。

- (4) 同時に『宋会要輯稿食貨索引』一般語彙の編集作業を推進した。
- (5) 平成18年度は、初年度を承けて《用語解》の成稿作成と入力を継続し、定期的に会合して問題点を調整する。また成稿上の用語と解釈について、その英語表記の検討に入る。
- (6) 平成19年度中に、各自分担の作業を完了させ、後半には逐次会合を持ち、総合的な最終調整を行う。

[研究分担者] 千葉隼 吉田寅 安野省三 梅原郁 渡辺紘良 長谷川誠夫
石川重雄 青木敦 J. P. McDERMOTT

(2) 生化学工業株式会社寄付金特定事業

[事業名] アジア関係資料データベース化プロジェクト

[プロジェクト代表：斯波義信]

[期 間] 平成13年度～同17年度（5ヶ年計画）

当初予定された事業は完了したので、新たに東南アジア関係の資料のデータベース化事業を推進する。

[目 的] 本プロジェクトは生化学工業株式会社元社長水谷当称氏の寄付金5千円を以て、東南アジア研究を促進するためであったが、当初予定の事業を終えたので、今後は広くアジア関係資料の公開も含め、データベース化事業を推進することを目的とする。

[事 業] アジアを中心とした資料の整理公開のためのデータベース化事業を進めた。

2. 学 術 図 書 出 版

新しく発表される、或いは「調査研究」の成果として東洋学に関する重要な研究業績を出版し国内国外に紹介する。また、アジア研究の国際化をさらに促進すべく、東洋文庫を中心とする日本のアジア研究の優れた研究成果を、主に英文等の欧文を中心に『東洋文庫欧文論叢』として刊行する。

A. 定期出版物刊行

『東洋学報』（東洋文庫和文紀要） 第87巻第1～4号	A 5判	4冊	562頁
<i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i> No.63	B 5判	1冊	124頁
『近代中国研究彙報』第28号	A 5判	1冊	108頁
『東洋文庫書報』第37号	A 5判	1冊	168頁
『超域アジア研究報告』第3号	B 5判	1冊	98頁
<i>Asian Research Trends New Series</i> No.1	A 5判	1冊	103頁
『東洋文庫年報』平成16年度版	A 5判	1冊	102頁

B. 論叢等出版

<i>Research Trends in Modern Central Eurasian Studies-Part2-</i> (Toyo Bunko Research Library 〈TBRL〉 東洋文庫欧文論叢 No.7)	A 5判	1冊	397頁
<i>Restructuring China: Party, State and Society after the Reform and Open Door</i> (TBRL No.8)	A 5判	1冊	
<i>Tax Farm Registers of Damascus Province in the Seventeenth Century</i>	B 5判	1冊	488頁
<i>Agenda Index of the Minutes of the Iranian National Assembly</i>			(CD-Rom 版)
『宋－清代の法と地域社会』（東洋文庫論叢65）	A 5判	1冊	307頁
『日本の青島占領と山東の社会経済：1914－22年』（東洋文庫論叢66）	A 5判	1冊	389頁
『宋史食貨志訳註（六）』（東洋文庫論叢67）	A 5判	1冊	

3. 講演会

A. 研究情報普及

(1) 東洋学講座

(春 期) 共通テーマ：アジアの歴史と文化を語る

第487回 平成17年5月10日(火)

「イスラム国家は税金をどのようにして取り立ててきたか
—オスマン帝国の徴税請負制を中心に—」

東洋文庫研究員
明治大学教授 永田 雄三 氏

第488回 平成17年5月17日(火)

「“海東の盛国” 渤海の文化」

東洋文庫研究員
青山学院大学名誉教授 田村 晃一 氏

第489回 平成17年5月24日(火)

「妻の質入問題からみた明清中国の法と裁判」

東洋文庫研究員
東京大学教授 岸本 美緒 氏

(秋期) 共通テーマ：近現代のアジアを考える

第490回 平成17年10月11日(火)

「新段階の日中関係をどう考えるか」

東洋文庫研究員
早稲田大学教授 毛里 和子 氏

第491回 平成17年10月18日(火)

「膨張する中国経済—その光と影—」

東洋文庫研究員
青山学院大学教授 中兼和津次 氏

第492回 平成17年10月25日(火)

「政治・外交と文化交流—日韓中関係史に即して—」

東洋文庫研究員
早稲田大学教授 平野健一郎 氏

(2) 特別講演会

第1回 平成17年7月1日(金)

「10世紀以後における中国都市の形態と構造の展開」

北京大学中国古代史研究中心教授 李 孝聡 氏

第2回 平成17年9月1日(木)

「知の伝播—書籍史の観点から見る中国宋明時期の社会と経済—」

Fellow of St. John's College, University Lecturer J. P. McDERMOTT 氏

第3回 平成18年2月3日(金)

「中国における科挙研究史上の諸問題」

北京大学中国古代史研究中心主任・教授 張 希清 氏

第4回 平成18年3月7日(火)

「Poet, Patronage, and the Place of Persian in the Early Modern World」

(近世世界における詩人、文芸保護、そしてペルシア語の地位)

Associate Prof., Indiana University Paul Edward Losensky 氏

第5回 平成18年3月9日(木)

「選任制度よりみた宋代社会」

河南大学教授 苗 書梅 氏

第6回 平成18年3月13日(月)

「Foucault and the Iranian Revolution」(フーコーとイラン革命)

Associate Prof., Purdue University Janet Afary 氏

(3) 研究会(東洋文庫談話会)

・日時 平成18年3月10日(金)

「清末、東三省における旗民制の変容課程」

長野大学産業社会学部助教授 塚瀬 進 氏

・日時 平成18年3月24日(金)

「清代康熙朝奏摺政治の展開と地方社会」

日本学術振興会特別研究員PD 内田 直文 氏

B. データベース公開

平成17年4月1日～同18年3月31日までの期間に、東洋文庫の図書・資料の(データ日本語、英語)に対するオンライン検索アクセス件数は、概略、以下の通りです。

区分/2005年4月～2006年3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
漢籍資料(含・中文逐次刊行物)	843	1,372	1,762	1,427	1,355	1,474	2,073	2,174	2,421	1,823	2,311	1,674
洋書(欧文)図書・目録(含・近中)	1,272	1,573	1,318	1,287	1,538	1,041	1,265	988	1,360	721	922	1,126
中・日・欧・ロ文新収図書目録	161	182	153	144	176	128	280	189	228	127	129	183
中文図書(近中)	314	953	1,054	1,512	1,058	1,123	1,303	1,469	1,124	1,032	1,113	764
日本文図書(近中)	426	1,470	1,386	1,339	1,250	1,751	1,521	1,572	1,136	1,075	1,117	819
日文逐次・日文関係目録(含・岩崎等)	847	1,476	1,164	951	836	891	911	885	1,014	799	915	659
アラビア語図書	493	520	455	623	682	540	838	641	796	423	610	801
トルコ語図書(含・オスマン語)	306	279	268	191	134	194	296	241	326	155	216	299
ペルシア語図書	442	484	512	608	706	577	907	696	871	458	664	804
チベット語文献(河口・蔵外文献)	366	417	436	406	450	428	657	503	665	421	571	508
モンゴル語図書・資料	215	216	321	233	174	186	234	290	229	229	261	225
ウイグル語図書・資料	83	222	185	51	193	115	255	122	349	137	167	142
ビルマ語図書	169	131	205	136	186	169	243	172	300	175	167	209
インドネシア・マレーシア語図書	158	165	154	80	93	149	266	172	220	129	183	223
中央アジア研究文献目録	415	438	405	359	405	311	653	456	630	371	479	496
中東イスラム研究文献目録	691	922	830	845	825	649	1,085	1,157	954	710	782	912
アジア歴史研究者等ディレクトリ	236	306	367	436	206	255	272	439	770	377	403	211
そのほか(別置ロシア、カザフ、朝鮮、南方など)	492	480	340	535	531	451	840	513	846	494	510	570
洋書総合						168	641	566	646	896	1,358	1,036
画像D P(梅原考古資料、香港銅版画等)								676	876	674	737	841
合計	7,929	11,606	11,315	11,163	10,798	10,600	14,540	13,921	15,761	11,226	13,615	12,502

4. 学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A. 研究者の交流および便宜供与のサービス

(1) 長期受入

1) 国内研究者の受入

塚越 進（長野大学産業社会学部助教授）

「20世紀前半、中国東北地域における社会経済変動の研究」

（平成17年10月1日～同18年3月31日・6ヶ月間、長野大学の依頼）

2）平成17年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

内田 直文（九州大学大学院PD）

「清代中国の文書行政及び皇帝側近集団から見た清朝国家の支配構造の分析」

（平成15年度採用、同16・17年度3ヶ年間）

高村 武幸（明治大学大学院PD）

「秦漢帝国支配下の地域社会

—紀元前3世紀～紀元3世紀初頭の社会生活史の視点から—」

（平成15年度採用、同16・17年度3ヶ年間）

石川 博樹（東京大学大学院PD）

「16、17世紀エチオピア北部社会の研究

—牧畜民の流入とイエズス会布教の影響を中心に—」

（平成16年度採用、同17・18年度3ヶ年間）

五十嵐 大介（中央大学大学院PD）

「マムルーク朝後期エジプト・シリアにおけるイクター制の崩壊過程と

社会体制の変容」

（平成17年度採用、同18・19年度3ヶ年間）

河原 弥生（東京大学大学院PD）

「コーカンド・ハーン国期における

フェルガナ・ムスリム社会の形成とイスラーム」

（平成17年度採用、同18・19年度3ヶ年間）

3）外国人研究者の受入

Jérôme BOURGON（フランス国立科学研究センター〔CNRS〕研究員）

「清朝の官箴類を中心とした中国法制史関係の資料調査と研究」

（平成16年6月8日～同18年3月31日・フランス政府資金）

Luca GABBIANI（フランス社会科学高等研究員研究所員）

「清朝の戸部機構および官箴類を中心とした中国法制史関係の史料調査と研究」

（平成16年7月1日～同18年3月31日・フランス政府資金）

Christophe MARQUET (フランス国立東洋言語文化研究所教授)

「江戸中期・後期の絵入り本と画譜」

(平成16年9月1日～同18年8月31日・フランス国立極東学院経費 [東京支部代表])

Claus M. FISCHER (ドイツ連邦ゲッチンゲン大学教授)

「東洋文庫(岩崎コレクション)所蔵日本近世演劇史資料の調査研究」

(平成17年2月8日～同18年2月7日・私費)

Peter J. McDERMOTT

(イギリス・ケンブリッジ大学セントジョーンズカレッジフェロー)

「中国華北・華南都市の社会組織と構造：700年～1700年」

(平成17年7月16日～同9月13日・60日間、日本学術振興会の招聘)

(2) 外国人研究者への便宜供与

China (Peoples Republic)

葛 劍 雄

復旦大学中国歴史地理研究所 (以下、20名)

France

Benoit de Tréglolé

Embassy of the France

(以下、2名)

Finland

Klaus Mühlhahn

Prof. Faculty of Social Sciences Department of Contemporary History University of Turku (以下、2名)

Germany

Erhar Rosner

Prof., Ostasiatisches Seminar der Universität Göttingen

(以下、3名)

India

Winie Soodel

Ecle francaise d'Extriem Orient, Pondichery Centre

(以下、2名)

Iraq

Mahmud Abd al-Wahid Mahmud

Dr., Historical Dept. Head Faculty of Education Takrit
University Takrit

Kazakhstan

Murat Auezov

Director, National Library of Republic Kazakhstan
(以下、5名)

Korea

金星周

ソウル大学校韓国文化研究所研究員 (以下、8名)

Norway

Fossgaard Ole

University of Oslo

Tunisia

Tarek Chehide

Advisor to the Ministry, Ministry of Education and
Training

U. K.

Joseph MacDermott

Fellow, St John's College, University of Cambridge

U. S. A.

Benjamin A. Elman

Professor of East Asian Studies and History, Princeton
University (以下、14名)

B. 各種研究会等への会場提供サービス

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
研究会回数	13	17	13	15	4	14	14	13	9	13	14	17	156回
参加人数	154	344	84	182	38	185	353	164	102	104	156	246	2,112人

C. 研究資料の復刻・増刷の刊行サービス

東洋学報 第86巻 4号	70部
東洋学報 第87巻第1～3号	各350部
<i>Modern Japan-China Relations</i> (TBRL 5)	80部
<i>The Structure of Ancient Indian Society</i> (TBRL 6)	80部
東アジアの都城と渤海	150部
宋会要輯稿食貨語彙索引 一地名篇一	200部
近代中国研究彙報 第27号	50部
東洋文庫書報 第36号等2件	各50部
東洋文庫キャストラヴィー関係加賀谷コレクション・解説目録	30部
東洋文庫年報 平成16年度版	10部

D. 参考情報提供のサービス

E. 広報普及

東洋文庫ホームページ（和文・英文）を随時更新・刷新した。

平成17年4月～平成18年3月までのホームページ全体のアクセス件数は、以下のとおりである。

なお、ホームページ全体のアクセス件数には、東洋文庫図書資料データベース（書誌データ）へのオンライン検索アクセス件数を含む。

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
アクセス数	19,667	26,356	25,778	24,916	25,635	22,846	34,592	27,983	37,445	23,691	28,609	27,906	325,424

5. 研究員等の研究業績

期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日まで

略号：①…著書 ②…編著 ③…論文 ④…学会動向 ⑤…書評・紹介
⑥…翻訳 ⑦…講演 ⑧…その他（評論・雑記・座談会等）

浅野 秀剛

①『浮世絵ギャラリー4 写楽の意気』（小学館、2006年1月、80頁）、『浮世絵ギャラリー6 歌麿の風流』（小学館、2006年3月、80頁）、③『自然をめぐる4年の旅—山水から風景へ—』展図録（愛知県美術館、2005年3月～5月、図版解説12点）、「風流造形、なぞらえる操作—「見立」と「やつし」とその周辺」（『講座日本美術史3 図像の意味』東京大学出版会、2005年6月、205～236頁）、「北斎の主題選びの法則—フリーア美術館所蔵の肉筆画調査レポート」（『北斎展』図録、日本経済新聞社、2005年10月、30～43頁、ほか図版解説58点）、「歌麿の吉原風俗画」（『四代浮世絵師展』図録、神戸新聞社、2006年1月、8～11頁）、Yōkai Bestiary du fantastique japonais 展図録（Maison de la culture du Japon à Paris、2005年10月、図版解説14点）、⑦「大森善清の絵本の後摺本」（第7回国際浮世絵学会大会研究発表、2005年6月19日）、「江戸と上方寛政期の役者絵の役者名と役名の表記をめぐって」（第10回国際浮世絵大会シンポジウム「浮世絵における江戸と上方」2005年10月30日）、「浮世絵と妖怪」（パリ、日本文化会館での講演、2005年12月7日）、「魅力的な役者絵とは何か」（早稲田大学演劇博物館主催演劇講座「美術史から見た役者絵」、2006年1月20日）、「江戸の描かれ方—屏風・画卷を中心に—」（シンポジウム「江戸とロンドン」、2006年3月16日）、⑧「北斎・富嶽三十六景の謎」（えどはくカルチャー講座・対談浮世絵1、対談、2006年1月13日）、「市民とともに創造していく美術館」（「ふなばし市民美術講座」公立と私立の美術館の学芸員による対談、2006年1月27日）。

荒川 正晴

③“Sogdian merchants and Chinese Han merchants during the Tang Dynasty” (E. de la Vaissière and E. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp.231-242)、「唐代粟特商人与漢族商人」（『粟特人在中国—歴史、考古、語言的新探索』（『法国漢学』第10輯、中華書局、2005. 12, pp.101-109.）、⑦「トゥルファン漢人支配期（6-8c.）の税・役について」（第50回国際東方学会議 Symposium II 「前近代中央アジアにおける税役」2005年5月20日）、⑧オアシ

ス王国ホータン点描) (『NHKスペシャル 新シルクロード2 草原の道・タクラマカン』日本放送出版協会、2005.4, pp. 208-223.)。

飯島 武次

③「唐代長安城の遺跡」(『東アジアの古代文化』)第123号、111～123頁、大和書房、2005年5月15日)、「西周遺跡と周公廟遺跡に研究」(『駒澤考古』第30号、87～95頁、駒澤大学考古学研究室、2005年5月)

池田 温

②『日本古代史を学ぶための漢文入門』(吉川弘文館、2006年1月、340+10頁)、③「貴族とは何か—東アジアの場合」(笠谷和比古編『公家と武家の比較文明史』思文閣出版、2005年8月、263～282頁)、「《文公家禮》管見」(高明士編『東亞傳統家禮、教育與國法(一) 家族・家禮與教育』國立臺灣大學出版中心、2005年9月、129～141頁)、⑧「追悼文」(神田信夫先生追悼文集編集委員会編『傷逝—神田信夫先生追悼文集』2005年4月、125～129頁)、「「井真成墓誌」をめぐる」(専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』朝日新聞社、2005年7月、209～216頁)、「座談会学問の思い出—窪徳忠博士を囲んで—」(池田(司会)、東方学110輯、2005年7月、168～190頁)。

池田 美佐子

③“Towards the Democratization of Public Education: The Debate in Late Parliamentary Egypt, 1943-1952.” (*Re-Envisioning Egypt 1919-1952*, eds. Arthur Goldschmidt, Amy Jhonson and Barak Salmoni, 218-48. Cairo/New York: The American University in Cairo Press, 2005.)、 “‘Bint al-Shati’ and Early Poverty Debates in Egypt” (『Cross Culture (光陵女子短期大学紀要)』22号、2006年3月、91～95頁)。

石橋 崇雄

②『中国「世界遺産」の旅』第1巻「北京と河北・東北地方」(責任編集・共著、2005年2月、講談社、総201頁)、⑦「中国清王朝史(1)・(2)・(3)」(千葉市民文化大学「講座：世界史学科」、2005年5月24日・5月31日・6月7日)、「西太后と溥儀にみる清朝末期」(『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』記念講演会、長崎歴史文化博物館、2006年1月21日)、「「故宮」の歴史」(朝日カルチャー《公開講座》「中国 世界遺産」シリーズ『「故宮」の歴史をたどる』第1回、2006年3月23日)、「清朝にみる二つの「故宮」の特色」(朝日カルチャー《公開講座》「中国 世界遺産」シリーズ『「故宮」の歴

史をたどる』第2回、2006年3月30日)、⑧「清」(愛宕元・森田憲司編『中国の歴史・下(近世・近現代)』昭和堂、2005年4月、195～250頁)、図録『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』(監修・執筆、アサツーディ・ケイ、2006年、総152頁)、「西太后と溥儀にみる清朝末期(上)・(中)・(下)」(『北京故宮博物院展～清朝末期の宮廷芸術と文化～』寄稿、『長崎新聞』日刊、2006年1月31日・2月1日・2月3日)。

井上 和枝

②『日本所在朝鮮戸籍関係資料解題』(東洋文庫、総355頁、2004年3月、解題部分と解説「朝鮮戸籍の制度・作成・内容」部分執筆、346～355頁)、『東アジア近代経済の形成と発展—東アジア資本主義形成史Ⅰ』(中村哲編、日本評論社、89～117頁、総288頁、2005年3月)、『동아시아 근대 경제의 형성기 발전—동아시아 자본주의 형성사Ⅰ』(中村哲・박섭編、新書苑、総404頁、2005年3月)、『東亞近代経済的の形成與發展』(中村哲編、王玉茹監訳、87～118頁、人民出版社、総325頁、2005年3月)、『東亞近代経済的の形成與發展』(中村哲編、王玉茹・林満江監訳、115～150頁、中央研究院人文社会科学中心、台湾台北、総368頁、2005年11月)、『1930年代の東アジア—東アジア資本主義形成史Ⅱ』(中村哲編、日本評論社、105～133頁、総191頁、2006年2月)。

井上 和人

③「東アジア古代都城の造営意義—形制の分析を通じて—」(『東南アジア考古学会研究報告〈東南アジアの都市と都城〉』第3号、1～32頁、東南アジア考古学会、2005年6月)、「渤海上京龍泉府と平城京」(『TOGI 渤海シンポジウム』古代日本と渤海—能登からみた東アジア—)167～196頁、大巧社、2005年7月)、「渤海上京龍泉府形制の再検討」(『東アジアの古代文化2005秋』125号、37～55頁、大和書房、2005年11月)、「平城京下層下ツ道の検証」(『飛鳥文化財論攷—納谷守幸氏追悼論文集—』175～184頁、納谷守幸氏追悼論文集刊行会、2005年12月)、「藤原京の建設と廃替—東アジア世界の激動のうねりの中で—」(『明日香風』第98号、飛鳥保存財団、2006年3月)。

上野 英二

③「みよしのゝたのむのかりも—「狩と恋」拾穂—」(『成城国文学』22、1～27頁、平成18年3月、成城国文学会)。

内山 雅生

③「山東省における労働力移動」(野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移

動』211～241頁、お茶の水書房、2006年3月)、「民国初期の山東省からの東北移民」(本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済 1914-22年』325-346頁、財団法人東洋文庫、2006年3月)、⑤「弁納オー『華中農村経済と近代化』」(『社会経済史学』71巻1号、93-95頁、社会経済史学会、2005年9月)。

海野 一隆

①『地図的文化史』(王妙発訳、北京、新星出版社、2005年5月、4頁)、『東洋地理学史研究、日本篇』(清文堂出版、2005年7月625+38頁)③「世界民族図譜としての明代の日用類書」(『汲古』47、30～39頁、汲古書院、2005年6月)、「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」(『東洋学報』87-1、101～143頁、(財)東洋文庫、2005年6月)、「東洋文庫所蔵ダンヴィルシナ地図帳」(『東洋文庫書報』第37号、1～26頁、(財)東洋文庫、2006年3月)、⑧「大型複製地図集瞥見」(『古地図研究』313、26～28頁、日本古地図学会、2005年4月)、「近世トルコの世界地図」(『地図情報』25-1、25～27頁、地図情報センター、2005年5月)、「中世日本人の国土認識」(『日本古書通信』70-8、8～10頁、日本古書通信社、2005年8月)、「東洋文庫の兼葭堂旧蔵『皇輿全図』」(『兼葭堂だより』5、2～3頁、木村兼葭堂顕彰会、2005年11月)、「岩橋嘉孝の『平天儀』」(『科学史研究』237、29～33頁、日本科学史学会、2006年3月)、「伊能忠敬研究の回顧と省察」(室賀信夫遺稿、海野一隆補、『洋学』13、61～90頁、洋学史学会、2006年3月)。

衛藤 藩吉

①『衛藤藩吉著作集 別巻』(東方書店、2005年11月、xi+224頁)、②『近代日中関係史年表 1799～1949』(〈本庄比佐子・家近亮子・石井明・中村義・藤井省三・山田辰雄〉、岩波書店、2006年1月、vi+809頁)、③「この非凡なる凡人」(『月間 自由民主』平成17年10月号、54～65頁、永田書房、平成17年9月)。

大河原 知樹

③“The Importance of the Tax Farm Register for the Study of Damascus City” (NAGATA Yuzo, MIURA Toru and SHIMIZU Yasuhisa, eds., *Tax Farm Register of Damascus Province in the Seventeenth Century, Archival and Historical Studies*, Tokyo, The Toyo Bunko, 2006, pp.53-62)、⑦「チュニジアの議会政治資料」(超域アジア研究部門現代イスラーム研究班2005年度アラブ班第1回研究会、東京大学東洋文化研究所、2005年11月12日)、「19世紀以降のシリアにおける商業不動産の占有形態および賃貸・売買契約」(アジア経済研究所「イランの不

動産取引をめぐる法と慣行」第4回研究会、東京外国語大学本郷サテライト、2005年11月26日)、「中東・イスラムにおける人口・家族・移民」(第1回中東・イスラム理解基礎セミナー、東北大学、2005年12月23日)、「アーカイバル・サイエンスと国際協力：中東の経済から」(JICA 宮城・海外を語る集い、仙台市市民活動サポートセンター、2006年2月2日)。

大澤 正昭

- ①『唐宋時代の家族・婚姻・女性—婦は強く—』(明石書店、2005年4月、282頁)、③「唐宋時代の家族と女性—新しい視点の模索—」(『中国史学』15巻、121~141頁、中国史学会、2005年9月)、⑤「関西中国女性史研究会編『中国女性史入門』」(『女性史学』15号、131~133頁、女性総合研究会、2005年7月)、⑦「嫉妬する妻たち—唐宋時代の婚姻と家族—」(『史艸』46号、280~284頁、日本女子大学史学研究会、2005年11月)。

岡田 英弘

- ①『誰が中国を作ったか 負け惜しみの歴史観』(PHP新書、2005年9月、189頁)、③“Saghang Erke Sechen Khong Tayiji and his Erdeni-yin Tobchi in the Light of their Relations with the Ching Supremacy” (*ALTAI HAKPO, Journal of the Altaic Society of Korea*, No.15, pp.129-140. June 2005)、「「反日」だけが彼らのアイデンティティ—」(『Will』創刊号、52~58頁、ワックマガジンス、2005年1月)、「今こそ中国幻想を捨てるべし」(『正論』7月号、98~109頁、産経新聞社、2005年7月)、「日中親善の幻想を捨て、対話より行動で接せよ」(『WEDGE ウェッジ』12月号、5~6頁、株式会社ウェッジ、2005年11月)、「「一衣帯水」の幻想を捨てよ」(『別冊正論』Extra. 01、103~113頁、産経新聞社、2006年1月)、「検証『中華人民共和国』中国語には『建前』と『本音』という言葉はない」(『BAN 番』2006年3月号、20~25頁、株式会社教育システム、2006年3月)、「中国人にとっての独立、日本人にとっての独立」(『日本人のちから』「特集 独立力」、2006年3月号、4~5頁、東京財団、2006年3月)、⑦「世界史はモンゴル帝国から始まった」(第10回モンゴル学術交流会、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所3階大会議室、2005年6月4日、宮脇淳子と共同発表)、「中国人の考え方の歴史的背景」(地域文化学会、中央大学後楽園キャンパス6号館2階6209号室、2005年6月18日)、「今こそ中国幻想を捨てるべし」(情報通信国際交流会、霞ヶ関ビル33階、2005年10月6日)、「日本とイランの歴史観」(笹川平和財団「イランとの文明間の対話」スタンフォード・ジャパン・センター京都、2006年2月16日)、「中国人とは何か？」(読売新聞社外交問題研究会「伝統思想から見る現代中国」シリーズ第1回、読売新

聞社10階国際サロン、2006年3月20日)、⑧「世界史はモンゴル帝国から始まった17世紀のモンゴル年代記『蒙古源流』はハーンとラマとの会見をこんな風に書く」(『ペルそーな』2005年4月号、74~77頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった。清の太宗ホンタイジの皇后五人はモンゴル人、清の中国支配はこうして始まった」(『ペルそーな』2005年5月号、76~79頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった モンゴル帝国二代目君主オゴデイ・ハーンのヨーロッパ遠征で全ロシアが征服された」(『ペルそーな』2005年6月号、76~79頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった アレクサンドル大公はモンゴル人に恭順の意は示すが、ヨーロッパとは戦った」(『ペルそーな』2005年7月号、80~83頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった モンゴル帝国の継承国家がロシア帝国の出発点、イヴァン雷帝にもモンゴルの血が流れていた」(『ペルそーな』2005年8月号、74~77頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった モンゴル語はロシア語でタタール、わが祖先はタタール、これがロシア貴族の誇り、ボリス・ゴドゥノフもそうだった」(『ペルそーな』2005年9月号、70~73頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった 『元朝秘史』に出てくる「蒼色の狼」は「蒼い狼」ではなく「斑の狼」が正しかった」(『ペルそーな』2005年10月号、74~77頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった コサックがシベリアに町を建設した17世紀初頭、モンゴル人の祖先とロシア人の関係ができた」(『ペルそーな』2005年11月号、80~83頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった 康熙帝の親政がはじまってから黒龍江をめぐってロシアと清国の間で外交交渉が始まった」(『ペルそーな』2005年12月号、70~73頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった「内モンゴル」と「外モンゴル」がわかれたのはいつ?また「モンゴル人民共和国」とは何か?」(『ペルそーな』2006年1月号、54~57頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった 康熙帝が清の大軍を率いてゴビの砂漠を越え、ガルダン軍を壊滅したジョーン・モドの戦い」(『ペルそーな』2006年2月号、78~81頁、宮脇淳子と共著)、「世界史はモンゴル帝国から始まった 北京で留守居をする皇太子に、遠征先から康熙帝は満州語の手紙をたびたび書いている」(『ペルそーな』2006年3月号、80~83頁、宮脇淳子と共著)、⑧「第五章 活発な交易による帝国の経済」(『堺屋太一が解くチングス・ハンの世界』講談社、2006年2月、120~127頁(岡田英弘教授に聞く))。

糟谷 憲一

⑥「李根寛『日本の韓国併合過程に関する国際法上中立の問題に対する考察』」(『日韓歴史共同研究プロジェクト第8回シンポジウム報告書』36~44頁、「東

アジア認識」研究会、2006年3月)、⑦「〔書評〕張弼基『朝鮮後期武班閩族家門研究』(ソウル・集文堂、2004年9月)」「朝鮮史研究会関東部会2005年11月例会、2005年11月26日、専修大学神田校舎)。

金丸 裕一

②『抗日・排日関係史料—上海日本商工会議所「金曜会パンフレット」』(監修・解説、ゆまに書房、2005年11月、第1巻～第5巻、778+538+716+436+524頁)、③「『南京図書大略奪』のまぼろし」(『諸君!』2005年8月号、162～175頁、文藝春秋、2005年8月)、「記憶と記録のあいだ—中国『新方志』における戦争と図書」(『立命館経済学』54-3、369～382頁、立命館大学経済学会、2005年9月)、「『中支電気事業調査報告書』(昭和13年2月)の一考察」(『立命館経済学』54-4、217～235頁、立命館大学経済学会、2005年11月)、「占領期青島における電気事業—日中合辦・膠澳電気公司設立前史」(本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済 1914-22年』(181～204頁、(財)東洋文庫、2006年3月)、④「2004年の歴史学界 回顧と展望 東アジア・中国・現代」(『史学雑誌』114-5、247～255頁、(財)史学会、2005年5月)、⑦「『台湾電気協会会報』記事総目録(1932年～1943年)」(『立命館経済学』54-2、127～152頁、立命館大学経済学会、2005年6月)。

辛島 昇

③「13～16世紀、コロマンデル海岸の港町—刻文史料と中国陶磁器片にみる」(村井章介編『港町と海域世界』歴史学研究会編「港町の世界史」1、pp.241～267、2005年12月)、⑧“Medieval Commercial Activities in the Indian Ocean as Revealed from Chinese Ceramic-sherds and South Indian Inscription”(第五十回国際東方学者会議(東方学会)・第IVシンポジウム「宋代の南海交易」、2005年5月20日、Transactions of the Internatinal Conference of Eastern Studies, No. L. The Toho Gakkai, pp. 137～138, Dec. 2005)。

川崎 信定

③「比較思想—はじめての人のための中村学入門—」『KAWADE 道の手帖』中村元・仏教の教え 人生の知恵(河出書房新社、平成17(2005)年9月30日、86～91頁)、「チベット仏教にみる終末観」『一人文知の可能性—日本学術会議哲学系公開シンポジウム提題レジュメ集』(第19期日本学術会議哲学研究連絡委員会編、平成17(2005)年9月30日、22～23頁)、「ほとけの知恵と力と、そして温もりを…、(東洋大学を去るにあたって、最終講義)」『東洋学論叢』第XXXI号(「東洋大学文学部紀要」第五十九集・インド哲学科篇)平成18

(2006)年3月、23-46頁)、「東洋大学図書館で河口慧海と出逢う」、『コスモス2006』No.147・東洋大学図書館ニュース、平成18(2006)年3月、6-7頁)、⑥「チベット文の解説・ローマナイズ・要約・解説」(『河口慧海著作集』別巻三・慧海資料、うしお書店、平成18(2005)年4月、396-407頁)、⑦「『チベットの死者の書』と日本の四十九日中陰回向」(2005年10月8日、東洋大学東洋学研究所研究プロジェクト公開講座講演、学術研究振興資金助成研究：「日本における死への準備教育—死の実存的把握をめざして—」代表者高城功夫研究員、レジュメ：『東洋学研究』第43号、川崎信定博士退任記念号、東洋大学東洋学研究所、平成18(2006)年3月15日、240-241；405-416。)、「日本仏教近代化と学祖井上円了先生の東洋図書館構想—挫折とその超克—」(第10回仏教系大学図書館協会研修会講演、平成17年11月10日、東洋大学付属図書館主催)、⑧「筑波大学時代の三枝先生」(『三枝充恵著作集』第4巻、第六回配本「縁起の思想」)『法蔵館月報6』(法蔵館、1-3ページ、平成17(2006)年4月)。

岸本 美緒

②『中国歴史研究入門』(礪波護氏・杉山正明氏と共編、名古屋大学出版会、2006年1月、467頁)、③「土地市場と『找価回贖』問題——宋代から清代の長期的動向」(大島立子編『宋—清代の法と地域社会』東洋文庫、2006年3月)、④「東京大学東洋文化研究所契約文書研究会の30年」(樂成顯氏訳、『史学月刊』2005年第12期、12~14頁、2005年12月)、⑤「紹介 鄧小南主編『唐宋女性与社会』上下」(『ジェンダー史学』創刊号、139~141頁、2005年10月)、⑥「冒捐考訴訟与清代地方社会」(台湾・中央研究院歴史語言研究所主催「明清司法運作中的權力与文化研討会」2005年10月13~15日)、“Rethinking ‘Early Modernity’ in Chinese History” presented at Beijing Forum (2005), November 16th-18th, 2005、「發展還是波動?—中国『近世』社会的宏觀形象」(国立台湾師範大学歴史学系主催「近世中国(960-1800)的社会与文化」(国際學術討論会、2005年12月16-17日)。

金 鳳珍

③「近代朝鮮の東アジア認識」(荒野泰典他編『「東アジア」の時代性』53~90頁、溪水社、2005年6月)、「『気』の公共性：崔漢綺気学政治論中的『公』與『共』」(黄峻傑・江宜樺編『公私領域新探：東西與西方观点之比較』165~181頁、台湾大学出版中心、2005年8月)、「世界化への便乗と抵抗—明治日本思想史における『アジア連帯論—』」(『美国学』第28集、139~174頁、ソウル大学美国学研究所、2005年12月)、「李朝末期：金允植と兪吉濬」(平石直昭・金泰昌編『知識人から考える公共性』公共哲学17、77~113頁、東京大学出版会、2006

年3月)⑤「岡本隆司『属国と自主のあいだ』(『歴史学研究』第808号、65～69頁、歴史学研究会、2005年11月)。

久保 亨

①『戦間期中国の棉業と企業経営』(汲古書院、2005年、320頁)、②科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号14310169)『1949年前後の中国 その政治・経済・社会構造の断絶と連続』(信州大学人文学部、2005年12月、245頁)、③「民国時期中国的工業発展：新修訂指数1912-1948」(中国語、張東鋼主編『世界経済体制下の民国時期経済』中国財政経済出版社、2005年8月、57～77頁)、④「近代山東経済とドイツ及び日本」(本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済1914-22年』東洋文庫、2006年3月、55～81頁)、⑤「世界史の中の斤現代中国—第20回国際歴史学会第3分科会に参加して—」(『信大史学』第30号、2005年12月、103～110頁)、⑥「1920～30年代中国における綿業経営」(第49回紡績企業史研究会、2005年5月16日、大阪・日本綿業会館)、“Continuity and Discontinuity of China’s Economy in the 20th Century”(第20回国際歴史学会第3分科会「近現代の中国と世界」2005年7月5日、シドニー)、「30年代中国的財政与財政官僚」(中国語、中国社会科学院近代史研究所・四川師範大学共催国際シンポジウム「1930年代的中国」2005年8月6日、成都)、“Industrial Development in Republican China, Newly Revised Index: 1912-1948”(オランダ・ポストマス社会経済研究所・一橋大学経済研究所共催国際シンポジウム「アジアにおける技術と長期経済成長」2005年9月9日、東京・一橋大学)、「1930至1940年代的上海紡織和香港的關係」(中国語、「上海经济社会歴史発展講座之六」2005年9月30日、香港大学アジア研究センター)、「1949年前後之中国与世界」(中国語、韓国現代中国学会・仁川大学共催シンポジウム「世界の中の中国、中国の中の世界」2005年12月9日、韓国・仁川大学)。

熊本 裕

②“Marginalia Hvatanica”(庄垣内正弘編『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』京都大学大学院文学研究科、2006)。

黒田 卓

③「イラン人下級官僚が見たジャンギャリー＝ポリシェヴィキ同盟」(『科学研究費補助金基盤研究A「中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究」(代表・堀川徹)報告書』、2006年3月)、④「イラン立憲革命百周年記念国際学会報告」(『イスラム世界』66、pp.48-54、日本イスラム協会、2006年3月)。

氣賀澤 保規

①『中国の歴史6 絢爛たる世界帝国 隋唐帝国』（講談社、2005年6月、414頁）、②『新版 唐代墓誌所在総合目録』（明治大学東洋史資料叢刊3、汲古書院、2004年3月、340頁）、「杉本直次郎著『阿倍仲麻呂傳研究（手沢補訂本）』復刻」（勉誠出版、2006年2月、906頁）、③「遣唐使留学生「井真成墓誌」への疑問」（『東アジアの古代文化』123号、26～36頁、大和書房、2005年5月）、「『井真成墓誌』と尚衣奉御という官職」（専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本 新発見「井真成墓誌」から何がわかるか』175～195頁、朝日新聞社、2005年7月）、「遣唐使「井真成墓誌」の発見とその意義」（『日本考古学2005』、35～46頁、明治大学博館友の会、2005年10月）、「見えてきた無名の遣唐使「井真成」の素顔」（『月刊現代』2005年12月号、176～182頁、講談社、2005年12月）、「『阿倍仲麻呂傳研究—朝衡傳考—』と杉本直次郎博士」（杉本直次郎著『阿倍仲麻呂傳研究（手沢補訂本）』解題、1～19頁、勉誠出版、2006年2月）、⑦「遣唐使留学生・井真成とその時代—新発見「井真成墓誌」の解釈をめぐる」（明治大学考古学友の会年会、2005年4月16日）、「遣唐使留学生「井真成墓誌」が語るもの」（多元的古代研究会、2005年5月8日）、「遣唐使「井真成墓誌」と唐代社会」（明治大学リバティーアカデミー・アジア史講座、2005年5月10日）、「新発見!!遣唐使留学生「井真成」墓誌とその時代」（日本歴史講座「いま明かされる古代XIII」、2005年6月11日、長野市・（社）金鶏会市民講座）、「遣唐使留学生「井真成墓誌」の世界—井真成が生きた唐代社会」（学習院大学史学会、2005年7月7日）、「中国の墓碑・墓誌について—「井真成墓誌」、「徳業寺宮人墓誌」・則天武后問題を中心に」（明治大学古代学研究所公開研究会「東アジアの石碑」、2005年10月22日）、「唐の則天武后」（朝日カルチャーセンター横浜、2005年10月29日）、「房山雲居寺石経と唐代社会」（東洋史研究会大会、2005年11月3日）、「中国華北の仏教石刻と遺跡の調査報告」（唐代史研究会・中国中世フォーラム共催秋期シンポジウム、2005年11月4日）、「唐の玄宗」（朝日カルチャーセンター横浜、2005年11月19日）、「中国華北仏教石経の世界—房山雲居寺石経を中心に」（明治大学リバティーアカデミー・アジア史講座、2005年12月6日）、「中国史上唯一人の女帝・則天武后とその周辺」（（株）日立工機役職研究会講演、2005年12月19日）、「則天武后の出家問題と宮人墓誌」（科学研究費補助金公開成果報告セミナー「中国石刻史料をめぐる諸問題」、明治大学、2006年1月14日）、「唐後半期の房山雲居寺石経事業の展開と社会」（東アジア仏教石刻研究セミナー（第2回科学研究費補助金公開成果報告）「石刻史料から探る北朝隋唐仏教の世界」、明治大学、2006年3月10日）、「2005年夏期華北仏教石刻調査報告・総論」（東アジア仏教

石刻研究セミナー（第2回科学研究費補助金公開成果報告）「石刻史料から探る北朝隋唐仏教の世界」、明治大学、2006年3月10日）、「民国期洛陽出土の北朝隋唐墓誌と郭玉堂」（洛陽師範学院首届石刻芸術国際研討会、中国・洛陽師範学院、2006年3月21日）、⑧「井真成墓誌」展示協力（墓誌文釈文・読み下し・内容説明・解説）（愛地球博（EXPO 2005 AICHI JAPAN）「芸術と文明」中国文物展示、2005年5月）、「神田先生のご逝去に寄せて」（『傷逝—神田信夫先生追悼文集』174～179頁、2005年4月）、「中国史学・川勝義雄先生と私」（『学術月報』2006-1、68～70頁、日本学術振興会、2006年1月）。

巖 善平

①『中国の人口移動と民工—マクロ・ミクロ・データに基づく計量分析』（勁草書房、2005年11月、271頁）②「第9章 大上海の下層労働市場—高度成長を支える民工の現状報告」（竹内実ほか編『大国 中国の現状と将来を読み解く』桜美林大学北東アジア総合研究所、2005年10月、pp. 93-108）、③「戸籍制限の撤廃で農民の大規模な都市への移動の実現を、」（日本経済研究センター・中国研究会報告書、2006年3月、pp. 81-101）、「中国は三農問題を克服できるか」（『公庫月報』2006年3月号、pp. 12-15）、「中国の都市労働市場における転職とそのメカニズム—労働市場の階層化にかんする実証分析」（『鹿児島国際大学地域総合研究』第33巻第2号、2006年3月、pp. 1-17）、「流動する社会 分断化する都市労働市場—人口移動にみる転換期中国の二重構造」（『桃山学院大学総合研究所紀要』第31巻第2号、2005年12月、pp. 1-25）、「広がる格差は成長の足枷となるか」（『経済セミナー』No.605、2005年6月、pp. 26-30）、「中国の所得分配と貧困問題」（『東亜』No.455、2005年5月、pp. 20-28）⑤「石田浩編『中国農村の構造変動と「三農問題」—上海近郊農村実態調査分析』（『中国研究月報』2005年12月、pp. 42-44）、「大橋英夫『現代中国経済論』（『国際問題』No.543、2005年6月、pp. 63-65）、⑧「農民工の人権改善迫られる—『世界の工場』支える労働力に不安」（『日本経済研究センター会報』2006年3月号、pp. 62-63）、「大上海の繁栄と民工」（『上海経済交流』第78号、2005年4月、pp. 1-3）。

胡 潔

③「『やまとうた』と『からうた』—古今和歌集の序文からみる—」（『言語文化研究叢書』第5号、第9～26頁、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2005年3月）、④「婚姻の問題」（『国文学』50、学燈社、2005年4月）、⑦「平安文学における「モロコシ」と「ヤマト」（『日本像を探る—外から見た日本・内から見た日本—』（名古屋大学言語文化研究科平成17年度公開講座、2005年6

月)、「平安文学と女性」(『グローバル時代における言語と文学』中国北京首都師範大学、2005年8月)。

黄 東蘭

- ②『新社会史2—身体、心性、権力』(浙江人民出版社、2005年9月、332頁)、③“Shrines of Yue Fei : Spaces for Creation of Public Memory”, *Chinese Sociology and Anthropology: A Journal of Translations*, Winter-2004-5/Spring 2005, vol.37, pp. 74-112 (M. E. Sharpe Inc. New York)、④『歴史学』(『中国年鑑』2005年版、222~224頁、創土社)。

興梠 一郎

- ①『中国激流 13億のゆくえ』(岩波書店、2005年7月、242頁)、③「東アジア統合と日中関係」(『東亜』464、4~5頁、(財)霞山会、2006年2月)、「日中の共通利益とは何か」(『遠近』9、13~15頁、国際交流基金、2006年2月)。

小浜 正子

- ③「日中戦争期上海の難民救済問題」(高綱博文編『戦時上海 1937~45年』(研文出版、2005年4月、331~365頁)、④「口述史料を利用した中国近現代史の可能性—山西省孟県の日本軍性暴力研究をめぐる」(『東洋史研究』第64巻第2号、2005年9月、125~140頁)、⑦「現代中国における生殖の国家・社会管理と女性たちの対応—1950年代の上海を中心に」(中国社会学会2005年度大会、2005年7月9日、於：東京大学)。

小松 久男

- ②『中央ユーラシアを知る事典』(梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹と共編、平凡社、2005年4月、624頁)、*Research Trends in Modern Central Eurasian Studies: Works Published between 1985 and 2000, A Selective and Critical Bibliography*, Part 2, Toyo Bunko Research Library 7 (Stéphane A. Dudoignon と共編、Tokyo: The Toyo Bunko, 2005, xv-397頁)、⑥フェリペ・フェルナンデス＝アルメスト編『タイムズ・ヨーロッパ民族事典』(東洋書林、2005年6月、641頁、共訳)、⑦“Abdürreşid İbrahim ve Japon Asyacılığı,” *The Golden Horde and Its Successors, Second International Conference*, Istanbul, Turkey, 2005年4月24日、“Kazan and Bukhara,” *Second International Symposium “Islamic culture in the Volga-Ural Region,”* Kazan, Tatarstan, 2005年6月24日、“Dār al-Islām under Russian Rule Understood by Turkestan Muslim Intellectuals,” *International Symposium, Regional and Transregional Dynamism in Central Eura-*

sia: Empires, Islam and Politics, (2005年7月7日、北海道大学スラブ研究センター)、⑧「中央ユーラシアの眺望」(『月刊百科』511、2005年5月、9～13頁)、
「ユーラシア史から見た中央アジア」(『NIRA 政策研究』19-3、2006年3月、72～73頁)。

早乙女 雅博

②『高句麗壁画古墳』(共同通信社、2005年9月、359頁)、③「関野貞と朝鮮考古学」(『関野貞アジア踏査』、225～232頁、東京大学総合研究博物館、2005年6月)、「高句麗壁画古墳の調査研究」(『関野貞アジア踏査』、273～288頁、東京大学総合研究博物館、2005年6月)、「高句麗・広開土王碑 東大建築本の調査」(『関野貞アジア踏査』、289～296頁、東京大学総合研究博物館、2005年6月)、「中国・朝鮮・日本の瓦」(『関野貞アジア踏査』、297～302頁、東京大学総合研究博物館、2005年6月)、「渤海の都城」(『年報都市史研究』13、47～56頁、山川出版社 2005年11月)、「東京大学所蔵の広開土王碑拓本一小拓紙からみた制作年代の考察」(『高句麗研究』21、257～285頁、高句麗研究会、2005年12月)⑦「東京城発掘遺物に基づく渤海都城研究」(『高梨学術奨励基金年報』平成16年度、56～59頁、(財)高梨学術奨励基金、2005年11月)、「植民地期の高句麗壁画古墳の調査と研究」(Harvard Conference on Koguryo History and Archaeology、2005年4月5日～7日)、「東京大学所蔵の広開土王碑拓本一小拓紙からみた制作年代の考察」(『広開土王碑と東アジア世界』第11回高句麗国際学術大会、2005年11月3日～5日)。

酒井 憲二

②『図書陵本類聚名義抄漢字索引』再版(勉誠出版、2005年6月、104頁)。

佐藤 次高

③「イブン・アルハーッジュによる砂糖精製所の実態」(『イスラム科学研究』2、2005年12月、pp. 71-80.)、「Slave Traders and Karimi Merchants during the Mamluk Period: A Comparative Study」(『Mamluk Studies Review』10-1 (2006)、pp. 141-156.)、④“Mamluk Studies in Japan: Retrospect and Prospect.”(『Mamluk Studies Review』10-1 (2006)、pp. 1-27.)、⑦「スーフイズム・聖者信仰・タリカをめぐる研究会」(総合討論コメント、2005年9月21日、軽井沢プラザホテル)、「イスラムの公益・福祉(マサラハ)と行政」(第5回国際シンポジウム「イスラムとIT」2005年11月23日、早稲田大学井深大記念国際会議場)、「イスラーム地域研究」(人間文化研究機構・第1回地域研究推進委員会、2005年12月16日、虎ノ門パストラル)、「イスラームの騎士と官僚—「剣

の人」と「筆の人」一」（共同研究会「公家と武家—官僚制と封建制の比較文明史的研究—」2005年12月17日、京都、国際日本文化研究センター）。

佐藤 宏

②LISHI and Hiroshi Sato (eds.) *Unemployment, Inequality and Poverty in Urban China* (London: Routledge, 2006年2月、336頁)、③「中国農村税賦的再分配効応；世紀之交農村税费改革的評価」（『北京大学中国经济研究中心経済発展論壇工作論文』FC 20050070, 1～28頁、李実・岳希明と共著）、「Housing inequality and housing poverty in urban China in the late 1990s」(*China Economic Review* 17-1、37～50頁、2006年)。

塩沢 裕仁

③「鄴城が有する都市空間 (The City area of Ye-Cheng)」(『中国史研究』第40輯、中国都市史特輯号、中国史研究会(韓国)、41～83頁、2006年2月)、⑦「鄴城が有する都市空間」(韓国中国史学会第6回国際學術大会“都市からみる中国の歴史”、『中国史学会第6回国際學術大会論文集』184～208頁)、「許昌および鄴都周辺の調査(西門豹取水口と渠道をまじえて)と洛陽周辺の発掘状況」(日本中国考古学会関東部会、2005年7月)、「中国古代ダムをめぐる古水文環境復元」(法政大学学術フロンティア「都市における水辺空間再生に関する研究」PJエコプロジェクト3、2005年8月)、「洛陽地区の魏晋南北朝隋唐期最新文物状況」(唐代史研究会、2005年8月)、「洛陽盆地における古代都城・聚落遺跡と水文環境をめぐる諸問題」(法政大学学術フロンティア「都市における水辺空間再生に関する研究」PJエコプロジェクト3、2006年1月)。

清水 信行

⑥「李亨源「三国～高麗時代の鍵・錠前の変遷とその性格」(『青山考古』第22号、pp. 35～73、青山考古学会、2005年5月)。

鈴木 均

②『ハンドブック現代アフガニスタン』(明石書店、2005年6月)、『アフガニスタン国家再建への展望—国家統合をめぐる諸問題』(アジア経済研究所、2005年6月)、『尾崎三雄アフガニスタン資料集—現地調査の記録1935-1938年』(アジア経済研究所、2006年3月)、『アフガニスタンの対周辺国関係—ターリバーン敗走から4年間の変容』(アジア経済研究所、2006年3月)、⑧「危険な漂流を始めた中東の大国—政局の潮目変えたイラン大統領選」(『世界週報』2005年7月、6-9頁)、「なぜ鶏肉と魚が一緒に売られているのか？」(『現代の中東』

第39号、2005年7月、巻頭話題欄)。

砂山 幸雄

③『支那排日教科書』批判の系譜(『中国研究月報』59-4、1~20頁、(社)中国研究所、2005年4月)、⑤「近藤邦康『毛沢東—実践と思想—』(『中国21』第23号、223~234頁、愛知大学現代中国学会、2005年12月)、⑧座談会「相互イメージのなかの日中関係」(『中国21』第22号、3~36頁、愛知大学現代中国学会、2005年6月)、時評「デジャ・ビュとしての反日デモ」(『中国21』第22号、i~ii頁、愛知大学現代中国学会、2005年6月)。

妹尾 達彦

②『都市と環境の歴史学』第1集(中央大学文学部東洋史学研究室、1-507頁、2006年3月)、『都市と環境の歴史学』第2集(中央大学文学部東洋史学研究室、1-564頁、2006年3月)、『都市と環境の歴史学』第3集(中央大学文学部東洋史学研究室、1-304頁、2006年3月)、③「農業—遊牧境界地帯与隋唐長安城—」(『中國史研究』40巻、5-130頁、韓国中國史学会、2006年3月)、「都市と環境の歴史学」(『都市と環境の歴史学』第1集、7-375頁、中央大学文学部東洋史学研究室、2006年3月)、「農業—遊牧境界地帯与隋唐長安城—研究の現状と今後の問題点」(『都市と環境の歴史学』第2集、229-251頁、中央大学文学部東洋史学研究室、2006年3月)、「隋唐長安城の葬地」(『都市と環境の歴史学』第3集、31-81頁、中央大学文学部東洋史学研究室、2006年3月)、「中国と都城とアジア世界」(鈴木博之他編『シリーズ都市・建築・歴史1 記念的建造物の成立』139-210頁、東京大学出版社、2006年2月)「九世紀的転型—以白居易為例—」(『唐研究』13号、493-532頁、北京大学出版社、2005年12月)、「固有なのか、普遍なのか?—隋唐長安城の建築構造と社会構造—」(『年報都市史研究』13号、9-26頁、山川出版社、2005年12月)「長安への旅」(『NHKスペシャル 新シルクロード5 カシユガル・西安』200-215頁、NHK出版社、2005年12月)、「隋唐」(礪波護・杉山正明・岸本美緒編『中国史研究入門』100-126頁、名古屋大学出版社、2005年11月)「八世紀前半葉的長安」(『中日文化交流研討会論文集』65-74頁、中国人民日報社、2005年7月)「唐代長安の都市生活と墓域」(『東アジアの古代文化』123号、51-60頁、大和書房、2005年5月)、⑤「関西中国女性史研究会編『ジェンダーから見た中国の家と女』東方書店、2004年」(『ジェンダー史学』創刊号、2005年10月、135-136頁)、⑦「唐長安城の城内与城外」(北京師範大学古代史研究講座、北京師範大学、2005年5月24日)、「長安与全球史」(清華大学八十周年講座、清華大学、2005年5月25日)、「唐代長安的儀礼空間」(中国社会科学院歴史研究所、2005年5月26日)、「洛阳史新

探」(北京唐史学者シンポジウム、北京師範大学、2005年5月27日)「九世紀的
転換—以白居易為事例—」(北京大学中国古代史研究センター、2005年5月30
日、「九世紀的転換—以白居易為例—」として公刊)、「農業—遊牧交界地帯和
隋唐長安城の歴史」(韓国中国史学会第6回国際学術會議、忠北大学校、2005
年6月10日、「農業—遊牧境界地帯与隋唐長安城—」として公刊)。

關尾 史郎

①『2002-2005敦煌学国際聯絡委員会通訊集刊』(共著、郝春文主編、上海古籍
出版社、2005年11月、248、249、264~271、272~273頁分担任執筆)、『三国志
曹操伝』(共著、別冊宝島編集部編、宝島社文庫、2005年11月、21~29頁分担任
執筆)、『中国歴史研究入門』(共著、礪波護・岸本美緒・杉山正明編、名古屋
大学出版会、2006年1月、77~81、92~96頁分担任執筆)、②『新潟大学大城プロ
ジェクト研究資料叢刊Ⅷ『俄藏敦煌文献』収載文献一覧(稿)Ⅲ』(新潟大学
超域研究機構「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」プロジェ
クト、2006年3月、全174頁)、③「史料群としての長沙呉簡・試論」(『木簡研
究』第27号、250~266頁、木簡学会、2005年11月)、「甘肅出土、魏晉時代画像
磚および画像磚墓の基礎的整理」(『西北出土文献研究』第3号、5~26頁、西
北出土文献研究会、2006年2月)、「疏勒河古墓群出土鎮墓文について—附「中
国西北地域出土鎮墓文集成(稿)補遺—」(『西北出土文献研究』第3号、91
~102頁、西北出土文献研究会、2006年2月)、「翟疆をめぐる断章—「吐魯番
出土文書」劄記(12)—」(下)(『資料学研究』第3号、左1~16頁、新潟大
学大学院現代社会文化研究科「大域的文化システムの再構成に関する資料学的
研究」プロジェクト、2006年3月)、④「《西北出土文献研究》第2号紹介」
(紹介、『敦煌学国際聯絡委員会通訊』2005年第1期、46頁、2005年7月)、⑤
「從史書与墓葬文物看魏晉時期的河西地域之多様性—以鎮墓文与画像磚為中心—」
(復旦大学歴史系“社会転換与多元文化”国際学術研討会、2005年6月27日、
於(中国・上海)復旦大学)、「吐魯番将来(五胡)時期的戶籍残卷二種—柏林
藏 Ch6001v 与 聖彼得堡藏 Дх08519v—」(吐魯番学第2届国際研討会、2005年
8月26日、於(中国・吐魯番)西州大酒店(論文提出))、「墓葬文物よりみた
〈河西〉、敦煌—鎮墓文と画像磚を中心として—」(魏晉南北朝史研究会大会、
2005年9月17日、於お茶の水女子大学)、「東アジア文化圏論の現在—前近代史
研究の立場から—」(新潟大学人文学部国際シンポジウム“東アジア文化研究
の新潮流”、2005年10月22日、於新潟大学五十嵐キャンパス)、「唐代改元試論—
以改元詔研究為主—」(第7届唐代文化学術研討会、2005年10月27日、於(台
湾・台北)国立台北大学民生校区)、「長沙走馬楼出土三国呉簡の調査と研究」
(唐代史研究会秋期シンポジウム、2005年11月4日、於京都大学会館)、「シル

クロードの社会と文化：趣旨説明」(新潟大学人文社会・教育科学系付置環東アジア研究センター開設記念国際シンポジウム“シルクロードの社会と文化”、2006年3月3日、於新潟大学五十嵐キャンパス)。

曾田 三郎

③「山東鉄道をめぐる日中交渉と日本人主任雇用問題」(本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済1914-22年』83~113頁、(財)東洋文庫、2006年3月)、⑤「奥村哲著『中国の資本主義と社会主義—近現代史像の再構成—』(『社会経済史学』第71巻第2号、99~101頁、社会経済史学会、2005年7月)。

高田 幸男

⑧「ともかく行ってみよう」(田中比呂志・飯島渉編『中国近現代史研究のスタンダード—卒業論文を書く—』研文出版、2005年4月、48頁)、「卒論で図書館・文書館を使いこなす」(田中比呂志・飯島渉編『中国近現代史研究のスタンダード—卒業論文を書く—』研文出版、2005年4月、105~117頁)、「神田先生の思い出」(神田信夫先生追悼文集編輯委員会編『傷逝—神田先生追悼文集』汲古書院、2005年4月、179~183頁)。

瀧下 彩子

③「日本の山東鉄道延長構想—踏査報告に見る予定線路の推移—」(『日本の青島占領と山東の社会経済：1914-22年』東洋文庫、2006年)、『国家総動員画報』記事目録(1937年12月10日—1938年8月9日)、『近代中国研究彙報』第28号、79~108頁、東洋文庫近代中国研究班、2006年3月)。

武田 幸男

①『高麗史日本伝(上)—朝鮮正史日本伝2』(岩波書店、平成17年5月17日、401頁)、『高麗史日本伝(下)—朝鮮正史日本伝2』(岩波書店、平成17年7月15日、406頁)、③「広開土王碑墨本との対話」(『日本と高句麗：人とサラムの交流』、1~7頁、朝日新聞西部本社・韓国国際交流財団・九州国立博物館・九州大学韓国研究センター・高句麗研究財団、平成17年1月15日)、⑦「広開土王碑墨本との対話」(九州国立博物館開催記念・朝日新聞西部本社70周年記念「高句麗シンポジウム」、朝日新聞西部本社・韓国国際交流財団・九州国立博物館・九州大学韓国研究センター・高句麗研究財団、平成17年1月15日)。

立川 武蔵

①*A Ngor Mandala Collection* (Lokesh Chandra, S. Watanabe と共著、*Mandala*

Institute, Vajra Publications, 2006年、134頁)、『聖なるもの俗なるもの』(講談社、2006年3月、203頁)、③「ランチュンドルジェの『大印契誓願』」(『人間文化研究所紀要』No.20、愛知学院大学、2005年9月、95～118頁)、『完成せるヨーガの環』第二章訳注(『愛知学院大学文学部紀要』No.35、2006年3月、123～129頁)。

田仲 一成

③「南戲の分化及伝播—以東南沿海為中心的考察—」(『人文中国学報』第11期、香港浸会大学中文系、2005年8月)、「中国における戯曲文学の発生」・『集刊東洋学』第94号(東北大学文史哲学会、2005年10月)。

クリスチャン・ダニエルス

②『貴州苗族林業契約文書匯編(一七三八～一九五〇年)』(史料編・研究編、全三巻、東京、東京大学出版会、2005年1月11日)、②*International Workshop on Remaking Traditional Knowledge; Knowledge as a resource*, Published by Head office of the Project on “Distribution and Sharing of Resources in Symbolic and Ecological Systems:” Integrative Model-building in Anthropology, ILCAA, 2006年2月15日、③「史料と虚構のあいだ—あるタイ族国王の系譜」(『歴史科学』No. 182, 52～71頁、大阪歴史科学協議会、2005年12月)、“Historical Memories of a Chinese Adventurer in a Tay Chronicle; Usurpation of the Throne of a Tay Polity in Yunnan, 1573～1584”, *International Journal of Asian Studies*, 3, 1, pp. 21～48, Cambridge University Press, January 2006、“Surveying and Preserving Documents in Dehong, Yunnan, China”, Kondeuane Nettvaong et al., Ed., *The Literary Heritage of Laos: Preservation, Dissemination and Research Perspectives*, National Library of Laos, Vientiane, November 2005.、⑦「アジア熱帯モンスーン地域における生態史」(総合地球環境研究所シンポジウムにおけるコメンテータ、京都市、京大会館、2005年3月25日、コメントの要約は『讀賣新聞』(大阪版)2005年4月20日、32面に掲載)、“The body-tool Relationship in South-western China and Continental South-east Asia”, *XXII International Congress of History of Science*, SC8. Chinese and Western Everyday Technologies in Transition: Approaches to a Cultural Interpretation of Artefacts, Meeting Room 1, Friendship Palace, July 24 2005. Organised by International Union of History and Philosophy of Science: Division of History of Science、「『天工学開物』に見える製糖技術」(シリーズ博物館への招待公開講演、神奈川県、東海大学にて、2005年10月1日)、「山地に暮らす人々—その歴史と文化」(鹿児島市、鹿児島大学総合研究博物館第9回市民講座、2005年10月29日)、

Christian Daniels, “General Comment”, International Symposium on Written Culture in Mainland Southeast Asia, (主催：国立民族博物館 共催：フランス極東学院 助成：国際交流基金、2006年2月4日、会場：国立民族博物館第4セミナー室)、「あるタイ族王国の歴史記憶—年代記からタイ文化圏の歴史を再構築する試み」(東京外国語大学AA研政治文化ユニット研究科会、2006年3月23日 AA研301号セミナー学)、「中国砂糖について」(甘さのグローバルゼーション サトウキビ栽培の伝播と文化変容、2006年3月25日、共催：上智大学ポルトガル・ブラジル研究センター、上智大学外国語学研究科地域研究専攻 支援：財団法人りそなアジア・オセアニア財団 会場：上智大学四谷キャンパス2号館17階大会議室)、⑧「武夷山：道教の名山と特産品」(武内房司編著『中国「世界遺産」の旅』第4巻『長江流域・華南』講談社、2005年12月1日、128～133頁)、「武夷山と製茶の変遷」(武内房司編著『中国「世界遺産」の旅』第4巻『長江流域・華南』講談社、2005年12月1日、140頁)。

田村 晃一

③「渤海と日本の交流を追って」(『古代日本と渤海』5～28頁、大巧社、2005年、7月)、⑦「『海東の盛国』渤海の文化」((財)東洋文庫春期東洋学講座、2005年5月17日、要旨：『東洋学報』87-2、65～69頁、(財)東洋文庫、2005年9月)。

笹沙 雅章

③「西域出土の印刷仏典」(旅順博物館・龍谷大学共編『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典研究論文集』、118～134頁、龍谷大学仏教文化研究所、西域研究会、2006年3月)、⑦「西域出土の印刷仏典」(旅順博物館蔵新疆出土漢文仏教国際学術研討会、大連、2005年10月15日)。

辻本 裕成

①『医談抄』(美濃部重克編、共著、三弥井書店、2006年2月、374頁、翻刻本文の作成、出典の調査に4名のうちの一員として参加した。また、解説中の27～56頁「諸本と本文について」、72～75頁「歌壇における宮廷医の活動」、96～103頁「本草書と『医談抄』」、103～110頁「『太平御覧』と『医談抄』」を分担執筆した)、「虫」の居所—「胸」と「腹」をめぐる(下)—(長谷川雅雄他4名の共著『アカデミア人文・社会科学編』82号、89～158頁、南山大学、2006年3月)、「『山頂湖面抄』成立試論—異文は何故生じたのか—」(『南山大学日本文化学科論集』6号、南山大学日本文化学科、2006年3月)。

土田 哲夫

- ③「抗戦期中国国民党組織の変容」(『中央大学経済研究所年報』第35号、425～440頁、中央大学経済研究所、2005年5月)、「盧溝橋事件と国民政府の反応—『王世杰日記』を中心に」(『中央大学経済学部創立100周年記念論文集』中央大学経済学部創立100周年記念事業委員会編集・刊行、569～584頁、2005年10月)、⑦「抗戦初期中国的“国民外交工作”」(“一九三〇年代的中國”国際学術研討会、成都、2005年8月5～6日)、「抗戦時期中国的聯美制日戰略和“国民外交工作”」(ワークショップ「日中關係の歴史と現状」、蘇州、2006年2月25日)。

朽尾 武

- ②「南船北馬再考—語の由来を求めて—」(近思文庫編輯『日本語辞書研究』第3輯上)港の人、2005年3月、15頁)、③「橋本閃雪『南船集』小考—山田俊雄先生を偲ぶ—」(『成城国文学』22、12頁、成城国文学会、2006年3月)、⑧「米芾の硯銘」(駒澤大学内記念文集刊行委員会『中村璋八先生傘寿記念論文集』汲古書院、2006年1月、3頁)、「人生七十古来稀而現今不稀」(『成城教育』131号、2006年3月、9頁)。

富澤 芳亜

- ③「在華紡の遺産—戦後における中国紡織機器公司の設立と西川秋次」(森時彦編『在華紡と中国社会』183～206頁、京都大学学術出版会、2005年11月)。

鳥海 靖

- ①『日中韓露歴史教科書はこんなに違う』(扶桑社、2005年7月、253頁)。②『日本史総合年表・第二版』(加藤友康・瀬野精一郎・丸山雍成と共編、吉川弘文館、2005年8月、1176頁〈増補部分2000～2004年、752～773頁の編集を担当〉)、⑦「日本における歴史教育・歴史教科書と近現代史研究の動向」(復旦大学日本研究中心、2005年7月14日、以後7月23日までに上海・北京の7カ所で、ほぼ同一テーマで講演、要旨「戦後日本的歴史研究与社会教育」と題して、在北京日本大使館ホームページに中国文で掲載)、「国際的な歴史相互理解のために」(韓国ジャーナリスト日本研修旅行団、外務相・(財)フォーリンプレスセンター、2005年10月19日、日本プレス＝センタービル)、「帝国議会と自由民権—立憲政治の定着」(朝日カルチャーセンター横浜・日本の歴史と文化—日本近代史講座、2005年9月1・15日、要旨：朝日カルチャーセンター「全講座案内」パンフレット)、「ヨーロッパにおける立憲政治調査」(朝日カルチャーセンター横浜・日本の歴史と文化—日本近代史講座、2005年11月17日、要旨：朝日カルチャーセンター「全講座案内」14頁)、「日中韓歴史教科書を考える」(朝日カルチャー

センター横浜・日本の歴史と文化—日本近代史講座、2006年1月12・26日、2月9日、要旨：朝日カルチャーセンター「全講座案内」4頁、「国際的歴史相互理解の試み」（歴史教育交流事業・中国歴史学とのシンポジウム、2006年2月28日、(社)国際フレンドシップ協会、3月7日、ほぼ同じテーマで韓国歴史家とのシンポジウムで報告)、⑧「戦勝国こそ超A級戦犯がブロゾロ」(田久保忠衛、上坂冬子、平川祐之と座談会、『諸君!』37-8、74~79頁、文藝春秋、2005年8月)、「〈日本の歴史教科書は間違っている〉と言われたら」(『諸君!』38-2、154~157頁、文藝春秋、2006年2月)、「財団の歩み・学問の歩み—歴史学・地理学助成と財団の二十年—」(西川治と対談、『(財)福武学術文化振興財団創立20周年記念誌—1985~2005』39~45頁、(財)福武学術文化振興財団、2006年2月)、「ロシアにおける史料調査への助成」(『(財)福武学術文化振興財団創立20周年記念誌—1985~2005』20頁、(財)福武学術文化振興財団、2006年2月)。

中兼 和津次

③「中国農村教育の経済効果—天長市と貴定県における教育の収益率を中心に」(田島俊雄編『構造調整下の中国農村経済』東大出版会、2005年1月、155~183頁)、「中国の経済発展と雁行形態」(渡辺昭夫編『アジア太平洋連帯構想』N T T出版、2005年6月、207~228頁)。

長沢 英治

⑤「三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア—所有・市場・公正—」(『イスラム世界』65、2005年10月、87~93頁)、⑧「イスラム世界の新聞産業」(『歴史学事典』第13巻「所有と生産」、弘文堂、2005年)、「最近の中東情勢と今後の改革の行方」(『中東諸国における政治情勢及び経済等の現状と今後の展望』みずほ情報総合研究所〔財務省委託研究報告書〕終章、2006年3月)。

永田 雄三

②NAGATA Yuzo, MIURA Toru and SHIMIZU Yasuhisa (eds.), *Tax Farm Register of Damascus Province in the Seventeenth Century: Archival and Historical Studies*, The Toyo Bunko. 2006. 488p., ③Yuzo Nagata, “Ayan in Anatolia and the Balkans During the Eighteenth and Nineteenth Centuries: A Case Study of the Karaosmanoglu Family”, Antonis Anastasopoulos (ed.), *Provincial Elites in the Ottoman Empire*, Crete, University Press, 2006, pp. 269-294., ⑧「『トルコ文庫』の由来と概要」(『明治大学図書館所蔵トルコ文庫目録』明治大学図書館、2006年3月31日、iv~vi頁)。

永積 洋子

⑤「木崎弘美『近世外交史料と国際関係』吉川弘文館、2005年1月刊」（『日本歴史』2006年3月号、126～128頁）。

中見 立夫

②『近代中国東北地域史研究の新視角』（江夏由樹・中見立夫・西村成雄・山本有造編、山川出版社、2005年10月、viii+354頁）、③「北京警務学堂・高等巡警学堂与川島浪速」（北京市档案馆編『档案与北京史国際學術討論会論文集』上冊、283-290頁、北京：中国档案出版社、2003年7月）、「欧亚清史満学研究剖記」（『満族史研究』第4号、253-259頁、2005年6月）、“Mongolia, Part 1: Mongolia from the Eighteenth Century to 1919”, *History of Civilizations of Central Asia, Volume VI: Towards the Contemporary Period: From the Mid-Nineteenth to the End of the Twentieth Century*, pp. 347-363, Paris: UNESCO Publishing, 2005.、「満州国の“外務相”—その組織と人事」（江夏由樹・中見立夫・西村成雄・山本有造編『近代中国東北地域史研究の新視角』、121-153頁、山川出版社、2005年10月）、“The Manchu Bannerman Jinliang’s Search for Manchu-Qing Historical Sources”, Alessandra Pozzi, Juha Antero Janhunen, & Michael Weiers ed., *Tumen jalafun jecen akū: Manchu Studies in Honour of Giovanni Stray* [Tungso-Sibirica 20], pp. 171-186, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2006.、④「中国モンゴル学国際學術討論会の開催」（『日本モンゴル学会紀要』第36号、85-86頁、2006年2月）、「最近、海外で開催された注目すべき中央ユーラシア史関係展覧会について」（『内陸アジア史研究』第21号、107-114頁、2006年3月）、⑦“The Russo-Japanese War Seen from the Northeastern Crescent Zone of the Qing Empire”, World War 0: Reappraising the War of 1904-5, Co-organized by Institute of East Asian Studies, Keio University & World War Zero Project Group, 2005年5月24日、慶応義塾大学、“On the materials of the Imperial Cabinet Archives (Neige daku dangan) and their Manchu and Mongolian sources in the Institute of History and Philology, Academia Sinica: Location, history of research, and our research project”, Second North American International Conference on Manchu Studies, 28 May 2005, Cambridge, Mass: Harvard University.、「関于海山回帰中国」（中国蒙古学国際學術討論会、2005年8月21日、呼和浩特：新城賓館）、「《満文大蔵経》の発掘、考証及其復刊」（故宫博物院・国家清史編纂委員会主辦故宫博物院八十華誕暨国際清史學術研討会、2005年8月26日、北京：中苑賓館、要旨：『故宫博物院八十華誕暨国際清史學術研討会論文提要匯編』206-207頁）、「旗人金梁与清史档案」（慶祝中国

第一歴史档案馆成立80周年《明清档案与歴史研究》学術討論会、2005年9月20日、北京：北京裕龍大酒店、要旨：『慶祝中国第一歴史档案馆成立80周年明清档案与歴史研究学術討論会文件檔案匯編』118頁）、「“外周”からの視点—日露戦争と“地域”の再編—」（東アジア近代史学会主催日露戦争100周年シンポジウム「20世紀東アジア世界と日露戦争」、2005年9月25日、専修大学、要旨：『日露戦争100周年シンポジウム「20世紀東アジア世界と日露戦争」報告要旨』67頁）、「東北ユーラシアにおける内文化と外文明の融解の場としての都市」（「グローバル化とアジア人間科学」プロジェクト（科研基盤研究（C））主催公開ワークショップ：グローバル化とアジア人間科学—アジアの知恵と地域全球化を検証する—、2005年12月4日、東京大学）、「“中国”と“モンゴル”のあいだ—歴史と現状—」（目黒区教育委員会主催社会教育講座：アジアを知りたい！〈政治・経済編〉、2006年1月27日、目黒本町社会教育館）、⑧「ラティモア」【事典項目執筆】（小松久男ほか編『中央アジアを知る事典』523頁、平凡社、2005年4月）、「神田信夫先生と台湾、そして《旧満州檔》—追想二題—」（『傷逝—神田信夫先生追悼文集』77-83頁、神田信夫先生追悼文集編集委員会、2005年4月）、*Chuo Eurasia Shi*（『新版世界各国史4：中央ユーラシア史』ハングル翻訳版、Seoul: Sonamoo Publishing Union, 2005.5, 581p）、「“周縁”からのアプローチ」（野沢豊主宰『近きに在りて』第47号、57-58頁、2005年8月）。

林 俊雄

⑦「突厥の歴史と文化」（国史館大学東洋史学科講演会、2005年11月15日、要旨：『国史館東洋史学』1に掲載予定）、⑧「モンゴル高原に遊牧民が残した遺跡」（『ユーラシアを駆ける—遊牧世界とオロンスム遺跡—』横浜ユーラシア文化館、2005年3月、10～40頁）、「草原の小さな英雄『石人』（『新シルクロードの旅2：敦煌・ホータン・クチャ・イーニン』講談社、2005年6月、38～47頁）、「唐の時代のキルギス」、 「玄奘三蔵」、 「匈奴」（『週刊朝日百科シルクロード紀行』12、朝日新聞東京本社、2005年6月、12～15、18～19、22頁）。

原 實

③“Ashes,” *Cracow Indological Studies, Vols. IV-V; 2nd International Conference on Indian Studies Proceedings*, (Krakow 2003, pp.251-269.)、 “A Note on *pūrṇakumbha*,” *Studia Asiatica, Vols. IV-V; Du corps humain, au Carrefour de plusieurs savoirs en Inde*, (Festschrift Alion Roşu) (Bucarest 2004 pp. 515-535.)、 “A Note on Pali *akuppa*,” *Indische Kultur im Kontext: Rituale, Texte und Ideen aus Indien und der Welt; Festschrift für Klaus Mylius, Beiträge zur Indologie 40* (Wiesbaden 2005 pp. 229-246.)、 「Vinaya 研究」（国際仏教学大学院大学紀要

7 (2003) pp. 270-220.)、「古代インドの女性観 (3)」(国際仏教学大学院大学紀要 8 (2004) pp. 322-283.)、「古代インドの女性観 (4)」(国際仏教学大学院大学紀要 9 (2005) pp. 1-64.)、梵天勸請の類型」(国際仏教学大学院大学紀要10 (2006) pp. 204-172.) ⑤Daniel Henry Holmes Ingalls (4 May 1916-17 July 1999), (*Indo-Iranian Journal* 43 (2000) pp. vii-ix.), In memoriam J. W. de Jong (15.2.1921-22.2.2000), (*Journal of the International Association of Buddhist Studies* 24 (2001), pp. 1-5.), Étienne Lamotte, *Opera Indologica* (Notes sur la Bhabavadgītā, Bouddhisme et Upaniṣad) avec une nouvelle préface de Minoru Hara, (*Publications de l'Institut Orientaliste de Louvain* 53 (Louvain-la-Neuve 2004) pp. vii-xiv.), 上村勝彦「マハーバーラタ」8 (ちくま学芸文庫 2005) pp. 241-246.) ⑦(1) “A Note on the Sanskrit *andha*,” (29th Deutscher Orientalistentag, Universität Halle Sept. 2004), “Hindu Concept of Sleep, *nidrā* and *svapna*,” (13th World Sanskrit Conference, University of Edinburgh, July 2006)。

平野 健一郎

③「アジアにおける地域性の創生—その原因を求めて—」(山本武彦編『地域主義の国際比較—アジア太平洋・ヨーロッパ・西半球を中心に』31～64頁、早稲田大学出版部、2005年7月)、⑦「政治・外交と文化交流—日韓中関係史に即して—」(東洋学講座「近現代のアジアを考える」2005年10月)、「国際移動時代のナショナリズム」(韓国・東洋政治思想史学会、現代日本学会合同大会「東亜細亜3国の自己認識と共同意識」第1セッション、2005年11月、大会報告書『東亜細亜3国の自己認識と共同意識』1～15頁、韓国・東洋政治思想史学会、現代日本学会、2005年11月)、「国際移動とナショナリズム／リージョナリズム」(早稲田大学 COE-CAS 第4回国際シンポジウム「東アジア共同体のダイナミズム」第4セッション、2005年12月、『早稲田大学 COE-CAS 第4回国際シンポジウム—東アジア共同体のダイナミズム—』早稲田大学 COE-CAS、2006年4月)。

弘末 雅士

③“European Travelers and Local Informants in the Making of the Making of the Image of “Cannibalism” in North Sumatra”, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 63, pp. 41-64, (財) 東洋文庫、2006年、③「東南アジアの港市とその支配者」(羽田正編『港町に生きる』、297～322頁、青木書店、2006年2月)、「[「南洋」と「東洋」] (貴志俊彦・荒野泰典・小風秀雅編『「東アジア」の時代性』、161～168頁、溪水社、2005年6月)。

深沢 眞二

- ①『近世初期刊行 連歌寄合書三種集成』（清文堂出版、2005年12月、翻刻・解説編 +513頁、索引編 +411頁）、②「枯野の夢夏艸の夢（上）」（『文学』隔月刊第6巻・第5号、岩波書店、2005年9月、17頁）、「枯野の夢夏艸の夢（下）」（『文学』隔月刊第7巻・第1号、岩波書店、2006年1月、13頁）、「芭蕉発句叢考—須磨の月／明石の風—」（『表現学部紀要』第6号、和光大学、2006年2月、12頁）。

藤田 忠

- ⑧『『よみがえる中国古代王朝展』によせて』（上・下、『新潟日報』2005年9月2・3日）。

弁納 才一

- ②「近現代東アジアにおける地域統合と人的移動—歴史的概観」（野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移動—ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』御茶の水書房、2006年3月、179～191頁）、「近代日中間における経済関係の深化と対立」（野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移動—ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』御茶の水書房、2006年3月、283～306頁）、③「占領時期前後における山東綿業構造の変動」（本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済—1914～22年』東洋文庫、2006年、269～296頁）、「中華民国期中国の食料事情に関する調査と研究について」（『近代中国研究彙報』第28号、23～55頁、東洋文庫、2006年）。

堀 敏一

- ①『東アジア世界の形成—中国と周辺国家—』（汲古書院、2006年2月、355頁）。

堀川 徹

- ②『中央ユーラシアを知る事典』（小松久男、梅村坦、宇山智彦、帯谷知可と共編、平凡社、2005年4月、624頁+付1枚）、③「19世紀末ハザラスプの地区別戸主名一覧について」（『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティーの成立と変容に関する歴史学的研究 研究成果報告書』2006年3月）。

本庄 比佐子

- ②『近代中国関係史年表 1799—1949』（岩波書店、2006年1月、809頁）、『日本の青島占領と山東の経済社会 1914—22年』（（財）東洋文庫、2006年3月、

389頁)、⑧「山根先生を偲んで」(『汲古』第48号、2005年12月、127頁)。

松重 充浩

③「第一次大戦前後における大連の『山東幫』中国人商人」(本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済1914-22年』財団法人東洋文庫、2006年3月、347-368頁)、⑦「張作霖奉天省政府による在地支配施策の展開と実態」(2005年度広島史学研究会大会東洋史部会、2005年10月30日、要旨『史学研究』250号、2005年10月)、⑧「『満州日日新聞』(1915-1916年)モンゴル関係記事標題目録」(『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』17号、2005年12月、60-83頁)。

松本 弘

③「アラブ諸国の政党制—民主化の現状と課題—」(『国際政治』141、56~71頁、日本国際政治学会、2005年5月)、「イエメン民主化の10年」(『現代の中東』39、24~39頁、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2005年7月)、「バハーレーンの民主化—史的展開と比較考察—」・「まとめと提言」(日本国際問題研究所編『湾岸アラブと民主主義—イラク戦争後の眺望—』115~137・253~265頁、日本評論社、2005年11月)、⑤「見市健『インドネシア—イスラーム主義のゆくえ—』」(『国際政治』143、168~171頁、日本国際政治学会、2005年11月)。

三浦 徹

②NAGATA Yuzo, MIURA Toru & SHIMIZU Yasuhisa eds. *Tax Farm Register of Damascus Province in the Seventeenth Century* Tokyo: The Toyo Bunko, 2006, 489p.、③「中世イスラム都市の諸相」『シリーズ都市・建築・歴史3 中世的空間と儀礼』(東京大学出版会、2006年、pp. 277-338)、“Urban Society of Damascus as the Mamluk Era was Ending” *Mamluk Studies* (Review, 10/ 1, 2006, pp. 157-193.)、⑧「イスラームと都市」『歴史と地理』584 (『世界史の研究』203、平成17(2005)年5月、pp. 35-38)、“Perception of Islam and Muslims in Japanese High Schools: Questionnaire Survey and Textbooks”, (*Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 21/2, 2004, pp. 173-192.)。

水野 善文

③「『獅子座三十二話』にみるバクティ—利他行として」(『中世インドの学際的研究』(科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)、成果報告書、研究代表者：前田専学、平成17年3月31日、pp. 252-263.)、「ジャータカにみる手紙—古代インド文字文化断章—」(『印度学佛教学研究』第54巻第1号、平成17年12月20

日、pp.382-375 (171) - (178)、「カーヴィヤ・シャーストラは単なる文学理論書か—色彩に関する表現をめぐる—」（『南アジア言語文化』第4号、平成18年3月31日、pp. 10-21.）、⑤Sachidanand, Unita & Teuji Sakata (eds.), *Imaging India Imaging Japan, A Chronicle of Reflection on Mutual Literature* (Delhi, 2004)（『南アジア研究』第17号、2005年10月、216-219頁）、⑦「第38回南アジア史研究集会（静岡・清水）の文学セッション『誰が誰に何を語ったのか』のコーディネート、司会、及び研究発表「中世期の詩人、語り部、語り手」（平成17年7月16日）、「日本印度学仏教学会第56回学術大会（四天王寺国際仏教大学）」における研究発表「ジャータカにみる手紙—古代インドの文字文化—」（平成17年7月29日）、「日本南アジア学会第18回全国大会（京都・龍谷大学）・シンポジウム『通説への挑戦—南アジア研究の課題』」における発表「サンスクリット文学とサバルタン—カーヴィヤ世界は閉じられていたか?」（平成17年10月1日）、「同上大会における分科会『南アジア研究—文学からの問いかけ』」における研究発表「カーヴィヤシャーストラは単なる文学理論書か?」（平成17年10月2日）。

村井 章介

①『中世の国家と在地社会』（校倉書房、2005年12月、iv+498頁）、②『港町の世界史①港町と海域世界』（歴史学研究会編、青木書店、2005年12月、xii+397頁）、③『寺社造営料唐船を見直す—貿易・文化交流・沈船—』（歴史学研究会編『港町の世界史①港町と海域世界』、113～143頁、青木書店、2005年12月）、「大智は新安沈船の乗客か」（『日本歴史』694号、88～92頁、2006年3月）、「建武政権の所領政策」（二木謙一編『戦国織豊期の社会と儀礼』、264～286頁、吉川弘文館、2006年4月）、⑦「日本史よりのコメント」（日本西洋史学会第55回大会・公開シンポジウム「ヨーロッパの港町—空間構成と社会動態の比較史—」、2005年5月14日〔神戸大学〕）、「中世倭人の世界」（東北アジア文化学会講演、2005年6月11日〔学習院大学〕）、「前近代の「国境」と倭寇・倭人」（鳥取県立図書館環日本海交流室開室10周年記念シンポジウム「東アジア世界の交流と波動—海と島と倭寇と文化—」基調講演、2005年9月18日〔鳥取県立図書館〕）、「アジアに開く中世の若狭」（特別展「若狭湾と中世の海の道」記念講演、2005年10月23日〔福井県立若狭歴史民俗資料館〕）、「「渡来僧の世紀」と信濃」（特別展「中世信濃の名僧」特別講演、2005年12月19日〔飯田市立美術博物館〕）、「禅宗の輸入と「日本化」」（國學院大学21世紀 COE プログラム・国際シンポジウム「古代・中世の異文化間交流—固有信仰と外来宗教—」報告、2005年12月4日〔國學院大学渋谷キャンパス〕）。

村田 雄二郎

- ①『一個日本記者筆下的袁世凱』（国家清史編纂委員會・文献叢刊、佐藤鉄治郎著、孔祥吉・村田雄二郎 整理、天津古籍出版社、2005年5月、398頁）、②『漢字圏の近代—ことばと国家』（C・ラマールと共編、東京大学出版会、2005年9月、222頁）、③「陳天華若干重要史実補允訂正—以日本外務相档案為主」（孔祥吉と共著、『福建論壇』2005年4期、56～65頁）、「清末民初：康有為」（平石直昭・金泰昌編『公共哲学17知識人と公共世界』東京大学出版会、2006年3月、29～63頁）、⑤「孫歌『竹内好という問い』」（『思想』980号、90-94頁、岩波書店、2005年12月）、⑧『国際政治事典』（猪口孝ほか編、弘文堂、2005年12月、1181頁、のうち、「漢奸」「教案」「三民主義」「総理衙門」「洋務運動」など21項目を執筆、ならびに編集協力）。

初山 明

- ①『中国古代訴訟制度の研究』（京都大学学術出版会、2006年2月、342頁）、④「秦・漢」（佐原康夫氏との共著、『中国歴史研究入門』51～75頁、名古屋大学出版会、2006年1月）。

森平 雅彦

- ③「『晦軒実記』刊行始末初探」（『年報朝鮮学』第9号、1～73頁、九州大学朝鮮学研究会、2006年3月）、「朱子学の高麗伝来と対元関係（その一）—安珣朱子学将來說の再検討」（『史淵』第143輯、65～103頁、九州大学大学院人文科学研究院、2006年3月）。

柳澤 明

- ③「2004年夏アムール紀行」（『満族史研究』第4号、239～252頁、満族史研究会、2005年6月）、「Some Remarks on the “Addendum to the Treaty of Kiakhta” in 1768” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 63, pp. 65-88.（（財）東洋文庫、2006年）、「『庫里碑』の謎」（『東方』第300号、8～11頁、東方書店、2006年2月）、⑦「清代蒙古的札薩克旗制与八旗制」（中国蒙古学国際学術討論会、2005年8月20日、呼和浩特）、「從档案史料窺見清代中俄關係—以十八世紀為主」（文献足徵：第二屆清代档案国際学術研討会、2005年11月3日、台北・故宫博物院）。

柳田 征司

- ③「梅印元冲講智親王聞書『蒙求聞書』」（築島裕博士傘寿記念会編『築島裕博士傘寿記念國語学論集』汲古書院、2005年10月、575～595頁）、「『万葉集』の

非単独母音型字余り(上)』(『国語国文』74-10、37～52頁、京都大学文学部国語国文学研究室、2005年10月)、「『万葉集』の非単独母音型字余り(下)』(『国語国文』74-11、16～31頁、京都大学文学部国語国文学研究室、2005年11月)、「有情物の存在を表す「アリ(アル)」「ヲリ(オル)」「エル(イル)」(小林芳規博士喜寿記念会編『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』汲古書院、2006年3月、102～122頁)⑦「抄物の整版から一東西方言の違いは、いつ、なぜ生じたか」(第2回成實堂文庫セミナー、2005年9月17日、36頁)、「抄物研究余滴」(水煙俳句フィスティバル2005 in 奈良、2005年11月19日)、「成實堂文庫所蔵の五山版から一中世における中国文化受容の一面」(第2回成實堂文庫セミナー、2005年9月17日、8頁)、⑧「東京大学国語研究室蔵『猪無野本色葉集』」(『木の葉』60-4、2005年4月、10・11頁)、「叡山文庫蔵『古文真宝口義』」(『木の葉』60-5、2005年5月、14・15頁)、「高山寺蔵注者未詳『華嚴仏光観聞書』」(『木の葉』60-6、2005年6月、12・13頁)、「抄者未詳『古事書』」(『木の葉』60-7、2005年7月、14・15頁)、「三ヶ尻浩校訂桃源瑞仙抄『史記抄』」(『木の葉』60-8、2005年8月、14・15頁)、「如月寿印抄『中華若木詩抄』寛永一〇年整版」(『木の葉』60-9、2005年9月、14・15頁)、「如月寿印抄『中華若木詩抄』古活字版」(『木の葉』60-10、2005年10月、10・11頁)、「山鹿本『句層私抄』」(『木の葉』60-11、2005年11月、8・9頁)、「土井本『句双紙抄』」(『木の葉』60-12、2005年12月、10・11頁)、「阪本龍門文庫蔵『千載和歌集』」(『木の葉』61-1、2006年1月、8・9頁)、「大東急記念文庫蔵『大学聴塵』」(『木の葉』61-2、2006年2月、8・9頁)、「亀井孝氏旧蔵『金剛般若波羅蜜経畧鈔』」(『木の葉』61-3、2006年3月、10・11頁)、「〔翻刻〕天理大学附属天理図書館蔵『於雲沢蒙求聞書』」(『奈良大学紀要』34、2006年3月、63～77頁、今西明日香・岸下裕一・高藤史憲・前田朋子・和田吉生と共編)、「日本語の音韻」(諏訪春雄編『日本語の現在』勉誠社、2006年3月、164～176頁)。

矢吹 晋

①朝河貫一著、矢吹晋訳『入来文書』(柏書房、2005年8月、720頁)、③「朝河貫一と三浦鏡太郎」(『自由思想』101号、29～38頁、石橋湛山財団、2005年11月)、「朝河貫一と入来文書について」(『入来文書』訳者解説、668～720頁、2005年8月)、⑤「『アジアの教育改革』」(『週刊読書人』2005年10月28日)、「『読書アンケート』」(『中国図書』2006年1月)、「誰も知らなかった毛沢東」(『国際貿易』2006年2月7日)、⑦「胡錦濤体制下の中国(講演)」(『東亜』2005年5月号)、「現今の日中関係の深層」(笹川平和財団パンフレット *Voices from the World* 6月22日所収)、経済同友会7月14日(報告書に概要所収、2006年3月)、北京大学日米中三国会議 China, Japan and U. S. Trilateral Conference

(2005年7月21～22日)、「入来文書と朝河史学」(鹿児島県薩摩川内にて出版記念講演8月27日)、ダートマス大学「ポーツマス会議百周年」シンポジウム9月8～10日(英文報告提出)、関東学院大学「日中関係の展望」(10月22日)、佐賀大学国際シンポジウム「東アジアの経済協力」(10月28日)、「中国の政治経済と日中関係」(キャピトル東京11月17日)、『『入来文書』について』(郡山出版記念講演11月22日)、「朝河史学と朝河平和学」(北京外国語大学日本学センター12月16日)、「朝河平和学と小日本主義」(12月17日、日中シンポジウム、日中コミュニケーション研究会報告書『中国新興メディアと対日イメージ形成』2006年3月所収)、「朝河平和学と小日本主義」(河南大学日本研究所2006年2月20日)、「中国の対日批判と日本外交」(『経済倶楽部講演録』2006年3月所収)、「中国の政治経済と日中経済協力」(荏原製作所2006年2月27日)、「入来文書と朝河史学」(二本松フォーラム2006年3月11日)、⑧「時代錯誤の反国家分裂法」(『世界週報』2005年4月12日)、「私の古典」(『文藝春秋』2005年5月号)、「日本外交は世界の笑い物」(『山陽時評』2005年5月29日)、「日本外交の恥」(『文藝春秋』2005年7月号)、「ポーツマス会議を支えた男」(『山陽新聞』(時評)2005年9月18日)、「核脅迫論を駁す」(『世界週報』2005年9月20日)、「甦る朝河史学」(『信濃毎日新聞』(潮流)2005年10月21日)、「朝河貫一を考える」(清水美和記者と対談『ワールド・コンパス』2005年11月号)、「第11次5カ年計画建議」(『国際貿易』2005年11月15日)、「東アジアはナショナリズム感染症」(『世界週報』2006年1月3日)、「中国経済の環境志向」(『山陽時評』2006年1月29日)、「農業税廃止の意味」(『世界週報』2006年3月7日)、※以下は21世紀中国総研ホームページのコラム「カラスの恩返し農業論」白石和良著『現代中国事情』を読む(2005年4月6日)、「反対日本入常」の意味するもの(2005年5月10日)、「東シナ海のがス田開発問題」(2005年8月5日)、「ナショナリズム熱中症の中国バブル大学教授」(2005年9月2日)、『『新京報』—光明日報と南方日報から生まれたニューウェーブ』(2005年10月3日)、「南からメディア改革の風が吹く」(2005年11月9日)、『『マオ—誰も知らなかった毛沢東』の著者名表記について』(2005年12月9日)、『『中国青年報』裴軍特派員の反日報道を斬る・鄭必堅『メディアの役割』』(2006年1月10日)、『『マオ—誰も知らなかった毛沢東』を評す』(2006年2月9日)、『『幌馬車之歌』(贈訂邦訳版)日本人の台湾認識の軽薄さを嘆く』(2006年3月6日)。

山内 弘一

③「儒教文化圏における士大夫層—宋時烈と小中華—」(小谷汪之編『歴史における知の伝統と継承』山川出版社、2005年4月、pp. 4～36)、④「朝鮮儒教と書院(其之三)」(『漢文學、解譯與研究』第八輯、上智大学漢文学研究会、

2005年12月、pp. 93~116)、⑤「小谷汪之編『歴史における知の伝統と継承』」(『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』24、上智大学、2006年3月、pp. 80~84)。

山内 民博

③「朝鮮戸籍大帳の寺・僧把握—慶尚道安義県戸籍大帳の分析から—」(『環日本海研究年報』13号、1~13頁、新潟大学現代社会文化研究科環日本海研究室、2006年3月)、「安義郷校蔵『郷校修理請助冊』について」(『資料学研究』3号、左35~51頁、現代社会文化研究科プロジェクト「大域的文化システム再構成に関する資料学的研究」、2006年3月)。

山口 瑞鳳

③「第一次グライラマ政権の崩壊と清朝・青海の関与」(『成田山仏教研究所紀要』29、pp. 47~99、成田山佛教研究所、2006年2月)、⑦「チベットの仏典から学んだこと」(成田山新勝寺「仏教文化講座」2005年6月)、「仏教の時間論」(東京大学駒場キャンパス学際交流ホール、主催 UTCP (東京大学21世紀 COE 共生のための国際哲学交流センター) 第4回現代仏教セミナー、特別講演、2006年1月30日)。

山崎 元一

① *The Structure of Ancient Indian Society; Theory and Reality of the Varna System*, Toyo Bunko Research Library 6, The Toyo Bunko, Tokyo, 2005. xiii+259頁。

山本 英史

③「健訟の認識と実態—清初の江西吉安府の場合—」(大島立子編『宋—清代の法と地域社会』財団法人東洋文庫、2006年3月、170~212頁)、⑦「赴任する知県—官箴に見る17世紀中国地方社会の諸相—」(第19回明清史夏合宿の会研究報告、2005年8月6日、要旨：第19回明清史夏合宿の会ニューズレター、2006年4月)、*The District Magistrate at New Post—Diverse Aspects of Chinese Society of the Seventeenth Century Observed from Guanzhen Official Handbooks* (東京大学東洋文化研究所シンポジウム *Elites in Asian History: Social Network and Cultural Representation* 報告、2006年2月18日)。

吉田 寅

③「中国プロテスタント伝道の開拓と宣教師の中国語定期刊行誌」(立正大学史学会創立八十周年記念『宗教社会史研究』Ⅲ、2005年11月26日、331~351頁)。

吉田 豊

- ①『コータン出土 8～9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』（神戸市外国語大学研究叢書第38冊、神戸、2005年、168pp.）、③Y. Yoshida, “Sogdian version of the new Xi’an inscription”, in: E. de la Vaissiere and E. Trombert (eds.), *Les Sogdians en Chine*, Paris, 2005, pp. 57-72.、④『中央アジアを知る事典』（平凡社、2005年4月）の項目「ペンジケント」（p. 466）、「ソグド」（pp. 300-301）、「イスラーム化以前の貨幣」（p. 142）、「イスラーム化以前の中央アジアの文字」（pp. 504-505）、「イスラーム化以前の暦」（p. 206）、「失われた言語」（p. 188）、⑧『シルクロード紀行 No.13 ペンジケント・ドシャンベ』（『週刊朝日百科』2006/1/15のエッセイ「ソグド商人の時代」（pp. 12-15）、「安祿山」（pp. 18-19）、「ソグド人」（p. 22））。

吉水 千鶴子

- ⑥『エリアーデ仏教事典』（中村元監修、木村清孝・末木文美士・竹村牧男編訳、法蔵館、2005年10月、677頁）、⑦“What Makes All the Produced Impermanent? : Proof of Impermanance and Theory of Causality”（第四回国際ダルマキールティ学会、2005年8月23日、ウィーン）。

吉村 慎太郎

- ①『イラン・イスラーム体制とは何か—革命・戦争・改革の歴史から—』（書肆心水、2005年10月、380頁）、⑧「政治体制の変転と揺れるアイデンティティ」（『Days Japan』 No. 18、2005年9月号、22～26頁）、「第9回イラン大統領選挙結果分析—予想と実相の乖離に寄せて」（同志社大学 CISMOR 研究報告書、<http://www.cismor.jp/jp/research/project/project02/050708.html>, 2005年、1～9頁）。

IV 業 務 報 告

1. 総 務 報 告

①会議事項

(理 事 会)

第328回 開催日 平成17年6月7日(火曜日)
出席者 斯波義信、原 啓芳、石井米雄、草原克豪、佐藤次高
田仲一成、鶴見尚弘、中根千枝、原 實、若井恒雄
委任状 岩崎寛彌、西田龍雄

第329回 開催日 平成17年6月7日(火曜日)
出席者 斯波義信、原 啓芳、石井米雄、草原克豪、佐藤次高
田仲一成、鶴見尚弘、中根千枝、原 實、若井恒雄
委任状 岩崎寛彌、西田龍雄

第330回 開催日 平成17年12月6日(火曜日)
出席者 斯波義信、原 啓芳、岩崎寛彌、佐藤次高、田仲一成
鶴見尚弘、中根千枝、西田龍雄、榎原 稔、若井恒雄
委任状 石井米雄、草原克豪、原 實

(評 議 員 会)

第153回 開催日 平成17年6月7日(火曜日)
出席者 梅村 坦、岸本美緒、後藤 明、佐竹昭広、松村 潤
委任状 安西祐一郎、池端雪浦、尾池和夫、大崎 仁、白井克彦
高木丈太郎、濱下武志、榎原 稔、間野英二

第154回 開催日 平成17年12月6日(火曜日)
出席者 岸本美緒、佐竹昭広、濱下武志、平野健一郎
委任状 安西祐一郎、池端雪浦、梅村 坦、尾池和夫、大崎 仁
後藤 明、小宮山宏、白井克彦、高木丈太郎、間野英二

(東洋学連絡委員会)

- 前 期 開催日 平成17年 5月24日 (火曜日)
出席者 斯波義信 (委員長)、梅原 郁、中根千枝、西田龍雄、
間野英二
議 題 1. 平成16年度財団法人東洋文庫事業報告について
2. 平成17年度財団法人東洋文庫事業計画について
3. その他
- 後 期 開催日 平成17年11月22日 (金曜日)
出席者 斯波義信 (委員長)、梅原 郁、尾崎 康、興膳 宏、
中根千枝、間野英二
議 題 1. 平成17年度財団法人東洋文庫事業中間報告について
2. 平成18年度財団法人東洋文庫事業計画案について
3. その他

②総務・広報事項

- ・当文庫創立(大正13年11月19日)以来81年振りに、寄附行為の全面改訂を行った(平成18年1月16日認可)。
- ・人事院が平成18年度以降給与構造改革実施を勧告、基本方針・概要を公表(平成17年11月7日決定交付)。当文庫も原則的に準拠対処の方針。
- ・台湾中央研究院語言研究所との間で学術・文献交流協定締結(平成18年2月7日)。

③設備・営繕事項

- ・建物・設備の経年劣化が進み(本館=築後22年、別館=築後37年)、建物のヒビ割れや設備(ボイラ・空調設備等)の老朽化が深刻さを増している。平成17年度に実施した主な営繕・補修関係は下記のとおり。
 1. 別館空調設備(コンプレッサ)一部交換
 2. サーバー室へのエアコン設備
 3. 書庫内エレベータ補修
 4. 温水ポンプ補修
- ・書庫建替えまでの応急措置として3カ年計画で仮設書架(約300連)設置計画了承(9月30日、本年度分107連設置済)。
- ・カラスによる被害が想定されるため、3年振りに庭木剪定を行った。

以 上

2. 人 事 報 告

i. 役員異動

年月日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
17.6.7	監 事	種 田 公 二	退 任	
〃	理 事	槇 原 稔	就 任	三菱商事相談役
〃	監 事	岡 野 理一郎	〃	ワコール監査役

ii. 評議員異動

年月日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
17.6.7	評議員	松 村 潤	退 任	
〃	〃	槇 原 稔	〃	
〃	〃	佐々木 毅	〃	
〃	〃	小宮山 宏	就 任	東京大学学長
〃	〃	平 野 健一郎	〃	早稲田大学教授
17.12.6	〃	高 木 丈太郎	退 任	
〃	〃	福 澤 武	就 任	三菱地所会長

iii. 東洋学連絡委員会委員異動

年月日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
18.3.31	東洋学連絡委員会委員	日比野 丈 夫	退 任	

iv. 名誉研究員異動

年月日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
18.1.1	名誉研究員	李 伯 重	委 嘱	
〃	〃	黄 寬 重	〃	
〃	〃	韓 永 愚	〃	
〃	〃	McDERMOTT, JosephP.	〃	
〃	〃	BLUSSE. Leonard	〃	
〃	〃	ELVIN, Mark	〃	
〃	〃	GUNGWU, Wang	〃	

年月日	役職名	氏名	区分	備考
18.1.1	名誉研究員	KYCHANOV, E.I.	委嘱	
〃	〃	SAHIN, Ilhan	〃	
〃	〃	RAFEQ, Abdul-Karim	〃	
〃	〃	KADIVAR, Mohsen	〃	
〃	〃	HUMPHREYS, R.Stephnr	〃	
〃	〃	LANCIOTTI, Lionelio	〃	

V. 職員異動

年月日	役職名	氏名	区分	備考
17.4.1	東洋文庫長	渡辺 幸秀	就任	※
〃	研究員(兼任)	末成 道男	委嘱	
〃	〃	西尾 寛治	〃	
〃	〃	丸尾 常喜	〃	
〃	〃	矢吹 晋	〃	
〃	〃	山崎 元一	〃	
17.6.24	研究員	山根 幸夫	逝去	
18.3.31	総務部長	原 啓芳	退任	

Vi. 客員研究員異動

年月日	役職名	氏名	区分	備考
17.4.1	研究員(客員)	青山 瑠妙	委嘱	
〃	〃	浅野 秀剛	〃	
〃	〃	天児 慧	〃	
〃	〃	荒井 政美	〃	
〃	〃	荒川 正晴	〃	
〃	〃	池田 温	〃	
〃	〃	池田 美佐子	〃	
〃	〃	伊香 俊哉	〃	
〃	〃	石塚 晴通	〃	
〃	〃	井上 和枝	〃	
〃	〃	井上 和人	〃	
〃	〃	今西 祐一郎	〃	

年月日	役職名	氏名	区分	備考
17.4.1	研究員(客員)	上野英二	委嘱	
〃	〃	内田知	〃	
〃	〃	梅田博	〃	
〃	〃	大河原知	〃	
〃	〃	大澤正	〃	
〃	〃	太田信	〃	
〃	〃	大谷俊	〃	
〃	〃	奥村哲	〃	
〃	〃	片山章	〃	
〃	〃	加藤弘	〃	
〃	〃	金丸裕	〃	
〃	〃	辛島昇	〃	
〃	〃	川井伸	〃	
〃	〃	川島真	〃	
〃	〃	貴志俊	〃	
〃	〃	北本朝	〃	
〃	〃	金鳳	〃	
〃	〃	久保亨	〃	
〃	〃	熊本裕	〃	
〃	〃	黒田卓	〃	
〃	〃	氣賀澤保	〃	
〃	〃	巖善	〃	
〃	〃	胡東	〃	
〃	〃	黄興	〃	
〃	〃	小杉	〃	
〃	〃	小浜正	〃	
〃	〃	早乙女雅	〃	
〃	〃	桜井由	〃	
〃	〃	佐藤宏	〃	
〃	〃	設楽国	〃	
〃	〃	蒨勇	〃	
〃	〃	嶋尾	〃	
〃	〃	清水宏	〃	

年月日	役職名	氏名	区分	備考
17.4.1	研究員(客員)	清水信行	委嘱	
〃	〃	庄垣内正弘	〃	
〃	〃	新免康	〃	
〃	〃	須川英徳	〃	
〃	〃	杉山正明	〃	
〃	〃	鈴木均	〃	
〃	〃	砂山幸雄	〃	
〃	〃	妹尾達彦	〃	
〃	〃	関尾史郎	〃	
〃	〃	関本照夫	〃	
〃	〃	曾田三郎	〃	
〃	〃	高田幸男	〃	
〃	〃	武田幸男	〃	
〃	〃	田嶋俊雄	〃	
〃	〃	立川武蔵	〃	
〃	〃	田中明彦	〃	
〃	〃	辻本裕成	〃	
〃	〃	土田哲夫	〃	
〃	〃	鶴見尚弘	〃	
〃	〃	寺田明	〃	
〃	〃	唐亮	〃	
〃	〃	枋尾武	〃	
〃	〃	富澤芳	〃	
〃	〃	中野真 ^麻 理	〃	
〃	〃	萩田博	〃	
〃	〃	花田秋	〃	
〃	〃	濱田美	〃	
〃	〃	林正俊	〃	
〃	〃	原實	〃	
〃	〃	平野聡	〃	
〃	〃	古田和	〃	
〃	〃	弁納才	〃	
〃	〃	細谷一	〃	
〃	〃	堀川徹	〃	

年月日	役職名	氏名	区分	備考
17.4.1	研究員(客員)	松重光浩	委嘱	
〃	〃	松涛誠達	〃	
〃	〃	松本弘	〃	
〃	〃	丸川知雄	〃	
〃	〃	水野善文	〃	
〃	〃	三谷孝	〃	
〃	〃	宮崎修多	〃	
〃	〃	村井章介	〃	
〃	〃	村田雄二郎	〃	
〃	〃	森平雅彦	〃	
〃	〃	森安孝夫	〃	
〃	〃	柳田征司	〃	
〃	〃	矢吹晋	〃	
〃	〃	山内弘一	〃	
〃	〃	山内民博	〃	
〃	〃	山崎元一	〃	
〃	〃	山本英史	〃	
〃	〃	山本毅雄	〃	
〃	〃	吉田伸之	〃	
〃	〃	吉田豊	〃	
〃	〃	吉水千鶴子	〃	
〃	〃	吉村慎太郎	〃	
〃	〃	六反田豊	〃	
〃	〃	和田恭幸	〃	

(※印は国立国会図書館支部東洋文庫職員)

3. 会 計 報 告

平成17年度収支計算書
 (自 平成17年 4月 1日)
 (至 平成18年 3月31日)

(単位：千円)

支 出 の 部			収 入 の 部		
項 目	金 額		項 目	金 額	
経 常 費	140,930		科 学 研 究 費 補 助 金	110,000	
人 件 費	110,521		維 持 会 費 収 入	35,200	
事 務 費	30,409		寄 付 金 収 入	27,200	
事 業 費	115,134		財 産 収 入	51,930	
Ⅰ 調 査 研 究 費	25,486		研 究 活 動 収 入	6,657	
Ⅱ 資 料 収 集 ・ 整 理 費	48,083		雑 収 入	77	
Ⅲ 研 究 資 料 出 版 費	26,385		建 物 等 修 繕 積 立 預 金 取 崩 収 入	5,000	
Ⅳ 普 及 活 動 費	10,046		運 営 調 整 積 立 預 金 取 崩 収 入	20,000	
Ⅴ 学 術 情 報 提 供 費	5,134				
支 出 合 計	256,064		収 入 合 計	256,064	

(注) 上表は一般会計に関するものである。

平成17年度貸借対照表 (総括表)
 (平成18年 3月31日現在)

(単位：千円)

資 産 の 部		負 債 及 び 正 味 財 産 合 計	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	2,687	流 動 負 債	1,438
固 定 資 産	5,366,460	固 定 負 債	78,077
(1) 基 本 財 産	5,088,756	負 債 合 計	79,515
(2) 其 他 の 固 定 資 産	277,704	正 味 財 産	5,289,632
資 産 合 計	5,369,147	負 債 及 び 正 味 財 産 合 計	5,369,147

(注) 一般会計のほか、特別会計・特定会計を含む。

V 役 職 員 名 簿

平成18年3月31日現在の財団法人東洋文庫の役職員は、以下のとおりである。

1. 役 員

役 職 名	氏 名	現 職
理 事 長	斯 波 義 信	東洋文庫理事長 日本学士院会員
専務理事	原 啓 芳	東洋文庫専務理事
理 事	石 井 米 雄	大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長 京都大学名誉教授
〃	岩 崎 寛 彌	東山農事株式会社社長
〃	草 原 克 豪	拓殖大学副学長
〃	佐 藤 次 高	早稲田大学教授 東京大学名誉教授
〃	田 仲 一 成	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	鶴 見 尚 弘	山梨県立女子短期大学学長 横浜国立大学名誉教授
〃	中 根 千 枝	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	西 田 龍 雄	日本学士院会員 京都大学名誉教授
〃	原 實	国際仏教学大学院大学理事長 日本学士院会員
〃	楨 原 稔	三菱商事株式会社相談役
〃	若 井 恒 雄	株式会社東京三菱銀行特別顧問
監 事	岡 野 理 一 郎	株式会社ワコール監査役
〃	東 條 和 彦	三菱金曜会事務局長

2. 評 議 員

役 職 名	氏 名	現 職
評 議 員	安 西 祐 一 郎	慶応義塾塾長
〃	池 端 雪 浦	東京外国語大学学長

役職名	氏名	現職
評議員	梅村 坦	中央大学教授
〃	尾池 和夫	京都大学学長
〃	大崎 仁	大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事
〃	岸本 美緒	東京大学教授
〃	後藤 明	東京大学教授 東京大学名誉教授
〃	小宮山 宏	東京大学学長
〃	佐竹 昭広	京都大学名誉教授
〃	白井 克彦	早稲田大学総長
〃	濱下 武志	京都大学東南アジア研究センター教授
〃	平野 健一郎	早稲田大学教授
〃	福澤 武	三菱地所株式会社取締役会長
〃	間野 英二	京都大学名誉教授

3. 東洋学連絡委員会委員

役職名	氏名	現職
委員長	斯波 義信	東洋文庫理事長
委員	石井 米雄	大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長 京都大学名誉教授
〃	梅原 郁	就実大学教授 京都大学名誉教授
〃	尾崎 康	帝京大学教授
〃	興善 宏	京都国立博物館館長 京都大学名誉教授
〃	竺沙 雅章	大谷大学教授 京都大学名誉教授
〃	中根 千枝	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	西田 龍雄	日本学士院会員 京都大学名誉教授
〃	間野 英二	京都大学名誉教授
〃	御牧 克己	京都大学教授
〃	森本 公誠	東大寺別当

4. 名誉研究員

氏 名	所 属 機 関
李 伯 重	精華大学人文社会科学学院経済学研究所
黄 寬 重	中央研究院歴史語言研究所
韓 永 愚	ソウル大学
BARY, W. T. de	Columbia University
FRANKE, H.	Ludwig-Maximilians-Universitat Munchen
GERNET, J.	Universite de Paris VII
McDERMOTT, JosephP.	St.John's college, Cambridge University
BLUSSE, Leonard	Universite Leiden
ELVIN, Mark	The Australian National University
GUNGWU, Wang	National University of Singapore
KYCHANOV, E.I.	Saint-Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies of Russian Academy of Sciences
SAHIN, Ilhan	Kirgizistan-Turkiye Manas Universities
RAFEQ, Abdul-Karim	The College of William and Mary Department of History
KADIVAR, Mohsen	Tarbiat Modarres University
HUMPHREYS, R.Stephnrn	University of California
LANCIOTTI, Lionelio	University of Naples

5. 職員

(平成18年3月31日現在)

部名	職名	氏名
総務部	部長	原 啓 芳 (専務理事兼務)
〃	課長	光 田 憲 雄
〃	参事	中 沢 元 幸 橘 伸 子 藤 村 由 美 子
〃	〃	柴 代 淳 子 長 谷 川 茂 広
〃	常勤嘱託	秋 葉 喜 八
図書部	部長	田 仲 一 成
〃	東洋文庫長	渡 辺 幸 秀※
〃	文庫長補佐	西 薗 一 男※
〃	閲覧係長	中善寺 慎※
〃	副主査	牧 武※
〃	司書	桜 井 徹 山 村 義 照 沢 崎 京 子※
〃	〃	篠 崎 陽 子 関 さ や か※ 坂 和 さ ゆ り※
〃	〃	黒 木 大 志 郎※

(※印は国立国会図書館支部東洋文庫職員)

部名	職名	氏名	現職
研究部	部長	佐 藤 次 高	早稲田大学教授
〃	研究顧問	石 井 米 雄	大学共同利用機関法人人間文化研究 機構機構長
〃	研 究 員	荒 松 雄 一	東京大学名誉教授
〃	〃	磯 貝 健 一	大手前大学講師
〃	〃	市 古 宙 三	お茶の水女子大学名誉教授
〃	〃	宇 都 木 章	青山学院大学名誉教授
〃	〃	海 野 一 隆	大阪大学名誉教授
〃	〃	衛 藤 藩 吉	東京大学名誉教授
〃	〃	大 江 孝 男	東京外国語大学名誉教授
〃	〃	太 田 幸 男	東京学芸大学名誉教授
〃	〃	岡 田 英 弘	東京外国語大学名誉教授
〃	〃	風 間 喜 代 三	東京大学名誉教授
〃	〃	粕 谷 元	日本大学講師
〃	〃	菊 池 英 夫	中央大学元教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研 究 員	草 野 靖	熊本大学元教授
〃	〃	佐 伯 富	京都大学名誉教授
〃	〃	酒 井 憲 二	調布学園短期大学名誉教授
〃	〃	佐 竹 昭 広	京都大学名誉教授
〃	〃	塩 沢 裕 仁	法政大学講師
〃	〃	滋 賀 秀 三	東京大学名誉教授
〃	〃	斯 波 義 信	東洋文庫理事長
〃	〃	志 茂 碩 敏	東洋文庫研究員
〃	〃	瀧 下 彩 子	東洋文庫研究員
〃	〃	田 仲 一 成	東京大学名誉教授
〃	〃	田 中 時 彦	東海大学名誉教授
〃	〃	田 村 晃 一	青山学院大学名誉教授
〃	〃	竺 沙 雅 章	京都大学名誉教授
〃	〃	千 葉 隼 一	桐朋学園大学名誉理事長
〃	〃	土 肥 義 和	国学院大学名誉教授
〃	〃	鳥 海 靖	東京大学名誉教授
〃	〃	中 嶋 敏	東京教育大学名誉教授
〃	〃	永 積 洋 子	東京大学元教授
〃	〃	西 田 龍 雄	京都大学名誉教授
〃	〃	長谷川 誠 夫	千葉工業大学講師
〃	〃	濱 島 敦 俊	暨南国際大学教授
〃	〃	星 実 千代	東京外国語大学アジア・ アフリカ言語文化研究所研究員
〃	〃	堀 敏 一	明治大学名誉教授
〃	〃	本 庄 比 佐 子	東洋文庫研究員
〃	〃	松 永 泰 行	同志社大学一神教学際研究センター 客員フェロー
〃	〃	松 丸 道 雄	東京大学名誉教授
〃	〃	松 村 潤	日本大学名誉教授
〃	〃	松 本 明	東洋文庫研究員
〃	〃	矢 沢 利 彦	埼玉大学名誉教授
〃	〃	柳 田 節 子	学習院大学元教授
〃	〃	山 口 瑞 鳳	東京大学名誉教授
〃	〃	吉 田 寅	立正大学元教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研 究 員	和 田 博 徳	慶應義塾大学名誉教授
〃	〃	渡 辺 紘 良	獨協医科大学名誉教授
〃	研究員(兼任)	飯 尾 秀 幸	専修大学教授
〃	〃	飯 島 武 次	駒沢大学教授
〃	〃	石 橋 崇 雄	国土舘大学教授
〃	〃	内 山 雅 生	宇都宮大学教授
〃	〃	梅 村 坦	中央大学教授
〃	〃	小 名 康 之	青山学院大学教授
〃	〃	糟 谷 憲 一	一橋大学教授
〃	〃	加 藤 直 人	日本大学教授
〃	〃	川 崎 信 定	東洋大学教授
〃	〃	岸 本 美 緒	東京大学教授
〃	〃	窪 添 慶 文	お茶の水女子大学教授
〃	〃	後 藤 明	東洋大学教授
〃	〃	小 松 久 男	東京大学教授
〃	〃	鈴 木 立 子	愛知大学教授
〃	〃	C.A.ダニエルス	東京外国語大学アジア・ アフリカ言語文化研究所教授
〃	〃	中 兼 和津次	青山学院大学教授
〃	〃	長 沢 栄 治	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	永 田 雄 三	明治大学教授
〃	〃	中 見 立 夫	東京外国語大学アジア・ アフリカ言語文化研究所教授
〃	〃	八尾師 誠	東京外国語大学教授
〃	〃	濱 下 武 志	京都大学東南アジア研究センター教授
〃	〃	林 佳世子	東京外国語大学教授
〃	〃	平 野 健一郎	早稲田大学教授
〃	〃	弘 末 雅 士	立教大学教授
〃	〃	深 沢 眞 二	和光大学助教授
〃	〃	古 屋 昭 弘	早稲田大学教授
〃	〃	三 浦 徹	お茶の水女子大学教授
〃	〃	御 牧 克 己	京都大学教授
〃	〃	毛 里 和 子	早稲田大学教授
〃	〃	吉 田 光 男	東京大学教授

6. 客員研究員

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	青 山 瑠 妙	早稲田大学助教授
〃	〃	浅 野 秀 剛	千葉市美術館学芸課長
〃	〃	天 児 慧	早稲田大学教授
〃	〃	新 井 政 美	東京外国語大学教授
〃	〃	荒 川 正 晴	大阪大学教授
〃	〃	池 田 温	創価大学特任教授
〃	〃	池 田 美 佐 子	光陵女子短期大学教授
〃	〃	伊 香 俊 哉	都留文科大学教授
〃	〃	石 塚 晴 通	北海道大学教授
〃	〃	井 上 和 枝	鹿兒島国際大学教授
〃	〃	井 上 和 人	奈良文化財研究所室長
〃	〃	今 西 祐 一 郎	九州大学教授
〃	〃	上 野 英 二	成城大学教授
〃	〃	内 田 知 行	大東文化大学教授
〃	〃	梅 田 博 之	麗澤大学教授
〃	〃	大河原 知 樹	東北大学助教授
〃	〃	大 澤 正 昭	上智大学教授
〃	〃	太 田 信 宏	東京外国語大学アジア・ アフリカ言語文化研究所助手
〃	〃	大 谷 俊 太	奈良女子大学教授
〃	〃	奥 村 哲	首都大学東京教授
〃	〃	片 山 章 雄	東海大学助教授
〃	〃	加 藤 弘 之	神戸大学教授
〃	〃	金 丸 裕 一	立命館大学教授
〃	〃	辛 島 昇	大正大学特遇教授
〃	〃	川 井 伸 一	愛知大学教授
〃	〃	川 島 真	北海道大学助教授
〃	〃	貴 志 俊 彦	島根県立大学助教授
〃	〃	北 本 朝 展	国立情報学研究所助教授
〃	〃	金 鳳 珍	北九州市立大学教授
〃	〃	久 保 亨	信州大学教授
〃	〃	熊 本 裕	東京大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	黒 田 卓	東北大学助教授
〃	〃	気賀澤 保 規	明治大学教授
〃	〃	巖 善 平	桃山学院大学教授
〃	〃	胡 潔	名古屋大学助教授
〃	〃	黄 東 蘭	愛知県立大学助教授
〃	〃	興 栢 一 郎	神田外語大学助教授
〃	〃	小 杉 泰	京都大学教授
〃	〃	小 浜 正 子	日本大学教授
〃	〃	早乙女 雅 博	東京大学助教授
〃	〃	桜 井 由 躬 雄	東京大学教授
〃	〃	佐 藤 宏	一橋大学教授
〃	〃	設 楽 国 広	立教大学教授
〃	〃	蒨 勇 造	東京大学教授
〃	〃	嶋 尾 稔	慶応義塾大学助教授
〃	〃	清 水 宏 祐	九州大学教授
〃	〃	清 水 信 行	青山学院大学教授
〃	〃	庄垣内 正 弘	京都大学教授
〃	〃	新 免 康	中央大学教授
〃	〃	須 川 英 徳	横浜国立大学元教授
〃	〃	杉 山 正 明	京都大学教授
〃	〃	鈴 木 均	アジア経済研究所国際関係・ 紛争研究グループ長代理
〃	〃	砂 山 幸 雄	愛知大学教授
〃	〃	妹 尾 達 彦	中央大学教授
〃	〃	関 尾 史 郎	新潟大学教授
〃	〃	関 本 照 夫	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	曾 田 三 郎	広島大学教授
〃	〃	高 田 幸 男	明治大学助教授
〃	〃	武 田 幸 男	岐阜聖徳学園大学教授
〃	〃	田 嶋 俊 雄	東京大学社会科学研究所教授
〃	〃	立 川 武 蔵	愛知学院大学教授
〃	〃	田 中 明 彦	東京大学東洋文化研究所所長
〃	〃	辻 本 裕 成	南山大学助教授
〃	〃	土 田 哲 夫	中央大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	鶴 見 尚 弘	山梨県立大学学長
〃	〃	寺 田 浩 明	京都大学教授
〃	〃	唐 亮	横浜市立大学準教授
〃	〃	朽 尾 武	成城大学教授
〃	〃	富 澤 芳 亜	高根大学助教授
〃	〃	中 野 真 麻理	国文学研究資料館助教授
〃	〃	萩 田 博	東京外国語大学助教授
〃	〃	花 田 宇 秋	明治学院大学教授
〃	〃	濱 田 正 美	京都大学教授
〃	〃	林 俊 雄	創価大学教授
〃	〃	原 實	国際仏教学大学院大学附置研究所所長
〃	〃	平 野 聡	東京大学助教授
〃	〃	古 田 和 子	慶応義塾大学教授
〃	〃	弁 納 才 一	金沢大学教授
〃	〃	細 谷 良 夫	東北学院大学教授
〃	〃	堀 川 徹	京都外国語大学教授
〃	〃	松 重 光 浩	日本大学教授
〃	〃	松 涛 誠 達	大正大学特遇教授
〃	〃	松 本 弘	大東文化大学助教授
〃	〃	丸 川 知 雄	東京大学助教授
〃	〃	水 野 善 文	東京外国語大学助教授
〃	〃	三 谷 孝	一橋大学教授
〃	〃	宮 崎 修 多	成城大学教授
〃	〃	村 井 章 介	東京大学教授
〃	〃	村 田 雄 二 郎	東京大学教授
〃	〃	森 平 雅 彦	九州大学講師
〃	〃	森 安 孝 夫	大阪大学教授
〃	〃	柳 田 征 司	奈良大学教授
〃	〃	矢 吹 晋	横浜市立大学元教授
〃	〃	山 内 弘 一	上智大学教授
〃	〃	山 内 民 博	新潟大学助教授
〃	〃	山 崎 元 一	国学院大学元教授
〃	〃	山 本 英 史	慶応義塾大学教授
〃	〃	山 本 毅 雄	国立情報学研究所教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	吉 田 伸 之	東京大学教授
〃	〃	吉 田 豊	神戸市外国語大学教授
〃	〃	吉 水 千鶴子	筑波大学講師
〃	〃	吉 村 慎太郎	広島大学助教授
〃	〃	六反田 豊	東京大学助教授
〃	〃	和 田 恭 幸	龍谷大学助教授

財団
法人 東洋文庫年報 平成17年度

平成19年1月31日 発行

発行者 東京都文京区本駒込2丁目28番21号

財団法人 東洋文庫

斯波義信

印刷者 富士リプロ株式会社

発行所 東京都文京区本駒込2丁目28番21号

財団法人 東洋文庫

本書は財団法人東洋文庫に対する平成18年度文部科学省補助金の一部によって刊行されたものである。